

箸	二〇〇人分	一戸當り	一人分(家族の多き家庭へは二人分)
杓子(金屬製)	一五五個	一戸當り	一個づゝ
同 飯盛り用	一五四個	同	
同 汁用	一五四個	同	
同 丁	一五五個	同	
同 九個	九個	適宜配布せり	
土 瓶	一五〇個	一戸當り	一個づゝ(不足分は追つて配布せり)
井 拭	一、〇五五個	一戸平均	六個づゝ(尙大家族及び其他へ)
手 欠	九五〇本		
馬 欠	三一〇個	各戸に二個づゝ配付	
湯 吞	七三四个		
膳 三	三個		
藥 壹箱	壹箱	出張所事務所へ送附	
酒 五升	五升		
魚 壹箱	壹箱		
味 噌	中樽 十七		
漬 物	小樽 四本		
佃 煮	壹樽		
下 駄	十足		

同日原田仁科兩氏小諸町嶋田材木店に於てブラック材料三十口分の購入を了す
蒲團(五布)購入の爲め平林、寺澤(準)長野市へ同市古金呉服店にて百三十五枚調達す

◎役場出張所日記

四月廿三日 篠の井町青年會大日方會長引卒の下に百三十人出働
安茂里村小路部落青年會五十名
四月廿二日 川中嶋村民五百名 出働
四月廿三日 川中嶋村民五百名 出働
廿二日 農學校生徒二百七拾名出働灰整理を行ふ
村小學校六年以上男(約八十名)職員引卒の下に食糧其の他配給品の分配を行へり
廿三日 安茂里消防組
同青年會城部會計百名灰整理應援
四月廿三日 眞嶋常盤婦人會員六名出働物品配給に付き働く
同 篠ノ井町青年會東福寺會長引卒の元に灌漑安之進宅附近に於て跡片付を行ふ
共和青年會 二十日出火時より共和青年會軍人分會と合同し現状或は學校役場等に於て活動す
廿三日 共和小學校六年以上の男女生徒(百名)職員引卒の元に配給方從事
廿二日 安茂里村青年會四拾名出働跡整理を行ふ

四月廿四日 午前八時公民學校生徒七拾名正村、木内教諭引卒指揮の下に活動
同 午前八時より岡田區民岡田消防組及段之原消防屋口商工會の各團体の出働
警察、久保一誠氏、山口源之丞毎日勞力寄附
廿五日 午前七時半より青年會員藤川會長引卒の元に、午前八時より婦人會員一同
午後四時愛國婦人會長野縣支部長梅谷婦人及本郡長見舞
町村長代表稻荷山町長小出五十二見舞
物品配給雨天の爲め休み食糧品三日間配給
川中嶋村秋山政信氏は宮本義廣及郵便局の屋根工事に從事す
廿七日 配給休み警察官二名出張
廿六日 犀口第一區(裏山)六人(海沼氏組)寄附
廿八日 長野市ブルキ職工二人長野市石堂町米山繁治一坪工賃貳拾五錢
小山熊太郎氏へ腰掛一ヶ貸
學校職員及六年以上の生徒物品配給す(村給與品及寄贈品)

小諸の材木を篠ノ井より小林二郎西澤武雄
平林今朝太三人運送馬車にて事務所に着せ
り

廿九日

丸子町材木請負者より大工三人勞力寄附
犀口人夫勞力寄附六名(左に記す)
飯塚辰治、東飯田儀作、金兒金之助、新海
龍吉、鹽入常治郎、小出健一郎
丸山町大工同上
組合より笹笠六個買入
鹽入常治郎より役場出張所用として薪金五
圓買入

五月二日

酒井古壽、海沼豊松、鹽入常治郎、金兒金
之助、小山艶治
犀口勞力寄附五人
野口應助、丸山周一郎、西澤吉之助、山田
磯五郎、町田藤太、川口佐忠治
篠ノ井町職工勞力寄附貳拾名
郡役所堀内技手通路測量に來場
本縣保安課警部及篠ノ井署長來場
五月一日より五日迄宿直夜警
唐木田直一郎、久保田喜一郎
犀口勞力寄附人名
小山艶治、瀧澤安雄、久保田梅吉、瀧澤光
治、段原辻太郎、瀧澤大之助、町田藤太
堀内道路技手測量に着手
北原三宅輝、理髮店貳名、理髮奉仕(大人
三十九人、小人六十八人)
梅谷知事、更級郡長、警察署長現場視察
犀口人夫勞力奉仕六人
金子末之助、立石徳治、野口助作、飯田捨
雄、酒井長之助、瀧澤大之助
堀内技手道路測量に來場
丸子町大工工事終了歸宅す(船度材木店)

三十日

犀口勞力寄附五人
飯田庄之助、山田清之助、酒井古壽、建具
屋鈴木孝正
山口源之丞、石井光江勞力寄附
松本和市寄附宅地内にある材木は附近の者
に配付す

五月三日

犀口人夫勞力奉仕六人
金子末之助、立石徳治、野口助作、飯田捨
雄、酒井長之助、瀧澤大之助
堀内技手道路測量に來場
丸子町大工工事終了歸宅す(船度材木店)

五月一日

食料品配給す
犀口商工會勞力奉仕人名

四日

學校生徒職員にて衣類及日用品配給
野口惣吾十一才女一人報告漏れ申出あり
篠ノ井町職工二十人勞力奉仕
トタン口より六十六入
犀口より勞力奉仕
竹村武志、大室久、山崎秀雄、田ノ口彌六
松坂波之進、西澤清意、關森重作
食糧品配給す
食糧品配給す

八日

金參圓九拾五錢 久保田善一郎落札
右代金入り
金壹圓也 久保田千松へ箱壹ヶ落札
右代金入り
白米壹俵役場より到着す
木炭一俵入り
高野自動車四月廿四日より五月八日まで出
動終り

五日

食糧品配給す
犀口勞力奉仕人夫
野口政之助、飯田大太郎、野口小源太、久
保喜市一人宿直

十二日

衣類等一般へ配給す
古ネコ二枚特賣す
金壹圓五十錢 酒井邦友

六日

犀口勞力奉仕
金箱菊太郎、小山艶治、瀧澤大之助
三寸角六丁土臺一丁神社の方送附繩、ミノ、
ザル、其他殘品を配給一般へ午後七時より
罹災者總會を事務所内に於て開會
蠶箱、糸網、繩網、空俵事務所に於て競賣
に附落札者
一金貳拾貳圓五拾錢 福井邦友
右代金入り
樽桶古四本競賣

五月十七日

物品配給をなす
配給區域 罹災者一般百五十名
配給物品
イ、綿ネル着物大人物九四枚 各一點宛
ロ、反物 二五反 同
ハ、ネル單衣四ツ身、鎌二丁添付六點 同
ニ、同 三ツ身、鎌二丁手拭二筋六點 同
ホ、同 一ツ身、鎌二丁手拭七筋添十一點
同
ハ、古着類取合せ 八點
以上配給済

五月七日

四月廿五日

青年會配給

- 第一回 炮烙壹個
- 第二回 瀬戸物、下駄
- 第三回 水杓子、農具(鎌、鋤)
- 第四回 野菜(葱、馬鈴薯) 人參
- 第五回 野菜
- 第六回 衣類 丙丁の部
- 第七回 衣類 乙の部
- 第八回 衣類 丁の部
- 第九回 雜貨 甲の部(手拭節、ハサミ、鼻紙、足袋、瀬戸物)
- 第十回 雜貨 風呂敷節手拭
- 第十一回 水桶水柄杓、ハシ塗椀瀬戸物
- 第十二回 大バケツ、金網米上茶碗二ヶ
- 第十三回 湯ワカシ、茶碗(乙)
- 第十四回 單衣(家族の數に應じて其の枚數丈)
- 第十五回 枕、布二反、揚子一本、齒磨二袋、手拭一包宛
- 第十六回 手拭二本、浴衣一枚(代りとし)
- 第十七回 草搔

四月廿八日

- 第一回 鍋、下駄、バケツ、洗面器、スリ
- 第二回 コギ、髮道具、盆陶器等取混ぜ平均に配布す
- 第三回 燕嘴、ミノ、クワガラ、莫蔭、天秤棒等取混ぜ平均に分配す
- 第四回 着古衣を(丁)の字丈に配布す
- 第五回 ザル、火箸、古釜、洋傘、小物數種(丙)
- 第六回 莫蔭、一枚宛(乙)
- 第七回 ザルコケ、手拭三本宛(甲)
- 第八回 新聞三十枚宛
- 第九回 配給品
- 第十回 下駄、鎌、火箸、菓子、手拭一筋
- 第十一回 茶道具(湯呑一ヶ菓子器) 白米綿糸
- 第十二回 古着(丁階級へ)
- 第十三回 古着五枚ワン、キウス、茶碗取混ぜ配布す
- 第十四回 重能、バケツ、鍋、ベニバチ、柄
- 第十五回 ホウチヨウ、チリ紙、ヒシヤク、掃
- 第十六回 木、齒磨、古着等數點取混ぜ配布す
- 第十七回 布圍拾六枚細民へ特配す
- 第十八回 庄田今朝三郎 二枚 松坂義雄 一枚

五月三日

- 同 三十日 一人 同
- 五月 一日 一人 同
- 同 二日 一人 同
- 同 三日 一人 同
- 五月 一日 晚より五月四日迄兩人宿直人夫(久保田喜市、唐木田直一郎)
- 五月 四日 一人 野口高之助
- 同 五日 一人 同
- 同 六日 一人 同
- 五月 六日 宿直夜警
- 五月 八日 半人 久保田喜市
- 同 八日 半人 馬場喜平
- 同 八日 半人 馬場忠

五月七日

- 同 三十日 一人 同
- 五月 一日 一人 同
- 同 二日 一人 同
- 同 三日 一人 同
- 五月 一日 晚より五月四日迄兩人宿直人夫(久保田喜市、唐木田直一郎)
- 五月 四日 一人 野口高之助
- 同 五日 一人 同
- 同 六日 一人 同
- 五月 六日 宿直夜警
- 五月 八日 半人 久保田喜市
- 同 八日 半人 馬場喜平
- 同 八日 半人 馬場忠

- 四月廿五日 一人 野口高之助
- 同 廿六日 一人 同
- 同 廿七日 一人 同
- 同 廿八日 一人 同
- 同 廿九日 一人 同

人 夫 控

- 計 拾六枚
- 太田鷹治 二枚 久保田宅意 二枚
- 坂田卓治 一枚 久保田善一郎 一枚
- 岡村卷治 二枚 吉岡袞袞雄 一枚
- 庄田繁治 二枚 庄田清作 二枚

- 同 三十日 一人 同
- 五月 一日 一人 同
- 同 二日 一人 同
- 同 三日 一人 同
- 五月 一日 晚より五月四日迄兩人宿直人夫(久保田喜市、唐木田直一郎)
- 五月 四日 一人 野口高之助
- 同 五日 一人 同
- 同 六日 一人 同
- 五月 六日 宿直夜警
- 五月 八日 半人 久保田喜市
- 同 八日 半人 馬場喜平
- 同 八日 半人 馬場忠

◎罹災救助規定

第一條 大正十五年四月廿日本村小松原區大火災に因る罹災者を急遽救助するものとす

第二條 食糧品は各罹災者に對し五日間はこれを配給し爾後各人の資力並びに災害程度を斟酌し尙自辨し難き事實ありと認むる者に對し必要に應じ配給するものとす
焚出及び食糧品給與は受給者一人一日に付き白米四合以内副食物は金拾錢以内とす但し老幼者(十二才以上)には白米三合の割合とし副食物は一戸を通じて適宜給與するものとす

第三條 小屋掛は左記に依り建築給與するものとす罹災者村稅戸數割附加稅年額金拾圓未滿を納むる者には是れを無償交付し金拾圓以上貳拾圓未滿を納むる者には金貳拾圓金參拾圓以上金五拾圓未滿を納むる者には金四拾圓金七拾圓以上を納むる者には金五拾圓を呈し本人の希望により建築交付するものとす但し相當雨露を凌ぐに足るものあるものには本條に適用せず

第四條 災害後臨時應急の建築をなしたるものには委員に於て査定し本條に照し相當代償の救済をなすもの

とす

第五條 前各條に掲けたる外の金品の給與に對しては罹災者の資力並災害の程度を斟酌し自力に依るを困難と認むる者に之れを爲すものとす

◎物品給與

縣稅戸數割
一圓六十四錢以下
三圓二十八錢以下
六圓五十二錢以下
拾圓以下
六圓五十錢以上
廿圓以下
卅圓以下
五十圓以下
五十圓以上

(四四人)
三一人
三一人
106人

一三人 三週
二〇人 二週
八人
三人 五日
四人

物品は需要者の程度を委員に於て調査し不公平なき様參酌配給するものとす

全員配給標準

物品 人員に對し

一、縣稅戸數割
甲 六圓五十錢以上
乙 六圓五十錢未滿
丙 三圓二十八錢未滿
丁 一圓六十四錢未滿

六 一戸に對し
七 三
八
九

◎燒失建物調査表

本家	土藏	物置	蠶室	其他	棟數	見積價	氏名
茅葺二階一 四八、七六坪全		瓦葺平家一 八、三坪全		茅平家二 六、五坪全	四	三、九〇〇	飯田種吉
茅葺二階一 四二、五〇坪全		瓦葺平家一 六、五〇全			二	三、四、〇〇	馬場時重
茅葺二階一 三四、五坪全		瓦葺平家一 一、二五坪全		茅平家一(便) 二、五坪全	一	三、五、〇〇	馬場林治
		瓦二階一 九、〇坪全			三	三、一〇五、〇〇	馬場良之助

罹災者建築給與基準
村稅戸數割 附加稅年額 金拾圓未滿を納むるもの
無償交付するものとす

一	二	三	四	五	六
六十圓以上	五十圓以上	四十圓以上	三十圓以上	二十圓以上	十圓以上
七十圓以下	六十圓以下	五十圓以下	四十圓以下	三十圓以下	二十圓以下
七十圓以上	七十圓以下	八十圓以下	九十圓以下	百圓以上	百圓以上
一戸に對し	人口に對し	同上	同上	同上	同上
金拾圓以上納むるもの	金拾圓を呈するもの	金二十圓以上を納むるもの	金二十圓を呈するもの	金三十圓以上を納むるもの	金三十圓を呈するもの
		金五十圓以上を納むるもの	金四十圓を呈するもの	金七十圓以上を納むるもの	金五十圓を呈するもの

茅平家一	丙一七、五〇坪全		茅平(便)一	〇、五坪全	三	九、七〇、〇〇	庄田 藤
茅平家一	乙四〇、〇八坪全		茅平(便)一	〇、五坪全	三	三、三九、〇〇	町田植太郎
茅平家一	乙四〇、六七坪全		茅平家一	〇、五坪全	三	三、三六、〇〇	杉坂兼治
茅平家一	甲四四、〇五坪全	瓦二階平家一	瓦平家三	二、二八坪全	七	五、五五、三〇	飯田藤太
瓦葺二階建一	乙三六、四八坪全		茅平建一	乙六、六坪全	三	三、一九、四〇	福井佐市
茅二階建一	甲一一、〇〇坪全		茅平(便)一	〇、二八坪	二	一、一〇、八〇	庄田清作
茅二階建一	丙一四、五八坪		茅平(便)一	〇、五八坪	二	七、四、五〇	庄田繁治
瓦二階建一	甲四七、五三坪	瓦二階建一	茅平家一	三、〇〇坪	四	五、六八、〇〇	飯田新吉
茅二階建一	乙三七、三二坪		茅平家一	三、〇〇坪	四	五、六八、〇〇	飯田繁作
瓦二階建一	甲五五、五〇坪	瓦平家建一	瓦平二茅平一	〇、五八坪	三	三、〇三、〇〇	飯田繁作
茅二階建一	乙四二、五〇坪		茅平家一	五、六六坪	七	六、六九、〇〇	瀧澤淺太夫
瓦二階建一	乙二、二二五坪		茅平家一	二、〇〇坪	三	三、五〇、〇〇	吉岡福之丞
茅葺平家一	乙八、七五坪		瓦葺門一	三、七五坪	四	二、六六、〇〇	瀧澤純之助
茅平家建一	乙一一、〇〇坪		茅(便)一	〇、五〇坪	二	五、〇〇、〇〇	吉岡袈裟男
瓦葺二階建一	乙三七、〇九坪	瓦平家一	茅(便)一	〇、五〇坪	二	六、五、〇〇	町田一太郎
		乙二一、六四坪	茅平家二	六、六八坪	五	三、〇九、二〇	清水鶴治

茅葺平家一	乙二二、〇〇坪		茅(便)一	〇、六〇坪	三	一、三九、〇〇	坂田友伊
茅平家一	乙二二、九五坪		茅(便)一	〇、五坪	二	一、五三、〇〇	松坂義男
板葺二階建一	乙二二、七五坪		板葺(便)	〇、五坪	二	一、九二、〇〇	飯田國之助
板葺二階建一	乙一四、八四坪		板葺(便)	〇、五坪	二	一、〇一、二〇	長田文作
茅二階建一	甲四四、三三坪	瓦二階建二	瓦平家一	〇、六八坪	七	七、一四、五〇	瀧澤好
板二階建一	乙六坪		板(便)一	二坪	二	五、〇〇、〇〇	德永茂作
茅二階建一	乙三六、五八坪		茅(便)一	〇、六坪	二	二、九四、〇〇	福井安太郎
茅平家一	乙二八、八八坪		茅(便)一	一、〇〇坪	二	一、七三、八〇	唐木田友彌
茅二階建一	甲五二、三八坪	瓦二階建二	瓦平家二	五坪	半七	七、一五、〇〇	瀧澤嘉久太
茅平家一	乙三二坪	瓦平家一	瓦平家一	三、〇〇坪	四	二、二七、五〇	吉岡熊太
茅平家一	乙四二、六六坪		瓦平家二	五、〇〇坪	五	四、五三、八〇	瀧澤國治
瓦二階建一	甲五五、八六坪	瓦二階建一	瓦平家二	五、〇〇坪	四	六、五三、五〇	瀧澤鶴治
茅平家一	乙三九、五八坪		瓦葺一	二、二五坪	二	二、三九、八〇	水島留太
瓦平家一	乙六、七五坪		茅(便)一	〇、五坪	二	四、〇〇、〇〇	酒井袈裟太郎
茅平家一	乙三一、四二坪	瓦平家一	茅葺二	二、二六坪	四	二、二二、四〇	松坂福太郎

茅二階建一 乙三二、九〇坪	茅二階建一 乙四一、〇〇坪	茅平家一 甲四四、一五坪	茅平家一 乙二〇、三三坪	瓦平家一 甲三五、六六坪	瓦二階建一 甲三三、九九坪	瓦二階建一 甲四七、二三坪	瓦二階建一 甲三九、二五坪	瓦二階建一 乙二六坪	茅二階建一 乙一九、九一坪	茅二階建一 乙三六坪	瓦二階建一 乙一四坪	茅二階建一 乙二六、五三坪	茅平家一 乙二七、五〇坪	瓦平家一 乙一七坪
				瓦二階建一 六坪			瓦二階建一 四坪					瓦平家一 乙二一、二五坪	瓦二階建一 乙七、五坪	
					瓦平家一 甲六坪	瓦平家一 三坪		茅平家二 乙一〇、五〇坪	茅二階建一 乙二一、五〇坪			茅平家一 六坪	茅平家一 四、五〇坪	
							瓦二階建一 甲一五坪		瓦二階建一 一〇坪					
茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	瓦平家一 三坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	瓦(便)一 一、六六坪	瓦平家一 三、三三坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、七五坪	茅(便)一 〇、五坪		茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪
二	二	四	二	三	三	三	二	四	四	四	一	四	三	三
二、五七、〇〇	三、二九、〇〇	六、〇〇、〇〇	一、三四、八〇	三、二七、八〇	二、八四、三〇	四、八三、八〇	五、四七、七〇	二、一〇〇、〇〇	三、三五、三〇	二、八五、〇〇	一、一〇、〇〇	三、四七、四〇	二、七〇、〇〇	一、〇〇、〇〇
高野角之助	瀧澤專吉	飯田良隆	宮本義廣	坂田禮	堀内米太	飯田保	小出貞幸	小出寅太郎	小出重作	松坂廣太	小出はない	小出本太郎	清水榮治郎	馬場ちの

茅二階建一 乙三六、一三坪	茅平家一 乙二二、九〇坪	茅二階建一 甲五九、三〇坪	茅平家一 甲四二、五〇坪	茅平家一 乙二八、三二坪	茅平家一 乙二五、一〇坪	茅平家一 乙二五、二五坪	茅平家一 甲三五、六五坪	茅平家一 乙一八、一六坪	茅二階建一 乙三八、一〇坪	茅二階建一 乙三七、三四坪	茅平家一 乙三二、二五坪	茅平家一 乙二二、二五坪	茅二階建一 乙三五、二五坪	瓦二階建一 甲六一、四六坪
		瓦二階建一平家一 甲一五坪	茅二階建一 甲八、五坪	瓦二階建一 乙六、〇〇坪	瓦二階建一 乙二一、二五坪				瓦二階建一 乙八、七五坪				瓦二階建一 乙八、七五坪	瓦二階建一 七坪
		瓦平家一 八坪	瓦平家一 五坪			茅平家一 甲一九、六六坪	茅平家二 甲一九、二〇坪						茅平家一 一〇坪	
茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	瓦平家一 一七坪	瓦(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪
二	二	五	四	三	三	三	四	二	三	三	二	二	三	三
二、九〇、五〇	一、四九、〇〇	八、二五、〇〇	五、三〇、〇〇	二、一四、三〇	二、三三、八〇	一、一〇、六〇	三、七五、四〇	三、〇〇、三〇	一、九五、〇〇	一、五九、〇〇	七、五、〇〇	三、五三、〇〇	六、七五、〇〇	六、七五、〇〇
酒井才治	吉岡長藏	野口文廳	坂田袈裟治	内山定吉	山田睦之助	山田龜治	瀧澤瀧治	高野與一郎	太田鶴太	山田常右工門	山田清吉	山田寛治	高野榮治郎	山田行太郎

茅平家一 乙九坪	茅二階建一 乙四四、一八坪	茅二階建一 甲五〇、五〇坪	茅二階建一 乙三三、九〇坪	茅平家一 乙四一、一坪	瓦二階建一 甲五六、一六坪	瓦二階建一 乙二二、五二階	茅二階建一 乙二八、〇八坪	茅平家一 乙二六、二五坪	瓦二階建一 甲二六、三六坪	茅平家一 乙三三、一五坪	茅二階建一 乙三二坪	茅二階建一 甲四一、一四坪	茅平家一 乙二六、〇一坪	板平家一 乙二六、一八坪
	瓦二階建一 六坪	瓦二階建一 甲七坪			瓦二階建二 甲二五坪(半)				瓦二階建一 乙一〇、七五坪	瓦平家一 乙六坪		瓦二階建一 甲七五〇坪		
	瓦平家一 甲一五、二五坪	瓦平家二 甲一四坪	瓦二階建一 六坪	茅平家一 六坪	瓦平家一 一〇、五六坪		瓦平家一 乙五坪		瓦二階建一 甲一〇坪	茅平家一 六坪		茅平家一 六坪	茅平家一 六坪	茅平家一 甲八坪
					瓦二階建一 甲二二、五〇坪									
茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪
二	四	四	三	三	半五	二	三	二	四	三	二	四	三	三
五五、〇〇	四三、九〇	五九、〇〇	二七、〇〇	三、四五、〇〇	八、一七、〇〇	一、八六、六〇	二、三一、四〇	一、五八、五〇	三、五八、五〇	二、七五、〇〇	五、二八、五〇	一、六九、六〇	一、七四、八〇	
小山吉之助	清水多美衛	久保田 義三郎	久保田長治	久保田千松	久保田 岩太郎	久保田 善一郎	宮尾 常雄	久保田喜市	松坂 慶作	松坂 久	柳澤房太郎	久保田 駒五郎	久保田宅意	渡邊宇一郎

瓦平家一 乙一八坪	瓦二階建一 乙三三、八三坪	瓦二階建一 乙三三、九三坪	茅平家一 乙二六、九一	瓦平家一 乙一〇坪	瓦二階建一 乙二八、九一坪	瓦二階建一 乙三六坪	茅二階建一 乙二六、二五坪	瓦二階建一 乙一六、三〇坪	瓦二階建一 乙三〇、五〇坪	茅平家一 甲二九、八三坪	板平家一 乙一〇坪	瓦二建一 乙一五、八〇坪	瓦二階建一 甲一三、五坪(半)	瓦平家一 六坪(半燒)
									瓦二階建一 乙一〇坪					
					瓦二階建二 一五、五五坪	茅二階建一 甲一五坪		茅平家一 三坪	板平家一 甲二二、二〇坪					
									板二階建一 甲一〇坪					
茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅(便)一 〇、五坪	便所一 〇、五坪	茅(便)一 〇、二五坪	茅一 七、五坪	茅一 三、五坪	茅(便)一 〇、五坪	茅平家一 一三、八坪	瓦平家一 二四、五〇坪	瓦平家二 一三、七五坪	板(便)一 〇、五坪	板平家一 六、五坪	瓦平家一 一五、七五坪	半二
二	二	三	三	二	四	三	二	三	二	六	二	二	二	二
一、四五、〇〇	二、六一、四〇	二、八五、四〇	一、六九、六〇	六〇、五〇	一、七六、一〇	三、一八、五〇	二、一五、〇〇	一、九二、四〇	二、四五、〇〇	六、二九、四〇	一、八五、〇〇	一、九〇、〇〇	六、七五	
久保田 安之丞	坂田 菊治	清水 兵藏	久保田宅意	柳澤行之進	坂田 藤吉	松坂 秋松	福井 莊	久保田治作	小山莊三郎	松本 和市	坂田 まき	觀音堂 内苑 良光	地藏堂 横本 つな	松坂 七藏

茅二建一 乙四〇坪(半)	茅平家一 一、二五坪	半一 一、六〇〇、〇〇	太田長重
計 全燒	一、二五坪	野口英雄	
一四八棟 四七六、八六坪	五七棟 四七三、二一坪	一八三棟 一八三、七八坪	
半燒	六六一、〇二坪	一八三棟 三三三、六五坪	
一棟 四〇坪	九棟 七〇、五〇坪	四九四棟	
	二棟 一六坪	一棟 二四、五坪	一三棟

小松原火災につきて農 學校記録

四月二十日

午後三時頃共和村大字小松原區に大火あり學校長、各職員それ〴〵小學校役場及び罹災近火の在校生卒業生宅見舞及び状況調査のため出張した。在校生の全燒戸數三〇の氏名は次の如くであつた。

四月二十一日

臨時職員會を開催し小松原罹災者に對する左記要件を決定した。

- 1、明二十二日の春季運動會を廢して罹災者跡地片付のため全校職員生徒出動すること
 - 2、在校生罹災見舞金額を一人五圓宛とし校友會より支出すること
- 尙此日寄宿舎生全部今井、丸山、宮本舎監引卒の下に夕食後小松原罹災地に出動して握飯及び蠟燭配りを手傳ひ午後十一時歸舎した
- 四月二十二日
- 午前八時より全校職員生徒脚絆地下足袋、ハツピの實習服裝甲斐々々しく何れも鍬を擔ひて小松原罹災者跡地片付けに出動終日活動の午後四時歸校した
- 四月二十四日
- 午後學校長は荒井書記を同伴して小松原の卒業生、在校生徒に對して正式に火災見舞に出張した

◎更級農學校の活動

◎小松原火災に際して更級農學校卒業生會の罹災會員に對しての應急處置

- 一、四月二十日 當日直に校内幹事現狀につき罹災會員及其程度を調査し直に幹事會の通知を發す
- 一、四月二十一日 幹事會に於て慰問方法協議取不取左の如く決定即刻宮本、樋口兩副會長荒井顧問、嶋田、樽田兩幹事出動慰問を了す

慰問及見舞金を贈る、全燒十九戸に對して金拾圓宛
近火七戸に對して壹圓宛

一、四月二十六日 本會機關紙「更農」を以て會員に對して義捐金を募集す、趣旨書左の如し

- ◎小松原大火罹災同窓に對して義捐金を募る
- 野口 正夫君 野口孝夫君 野口 信君 太田正志君
久保田辰己君 福井本昭君 太田安衛君 森慧典君
太田己佐雄君 野口清君 瀧澤博君 吉岡豊君
唐木田幸君 野口徹一郎君 飯田幸雄君 小山利君
野口久三郎君 野口禮五郎君 瀧澤安義君 瀧澤忠義君
久保田庄司君
- 瀧澤芳介君 ○飯田佐門君 ○松坂角之助君

○瀧澤延衛君 ○野口美光君 ○野口高之助君
○野口榮雄君 (○は近火)

右は今回小松原の大火に罹災せられし我々同窓同級の諸君です

何と云ふ悲惨な事を起した事でせう、僅か一瞬時に百五十餘戸を焦土と化し人々は身を以て遁れ辛ふじて生命の安全を得られたに過ぎません、時に衣食と住居を奪はれ相擁して途方に暮れて居らるゝ状態です、殊更同窓として同級として御氣の毒の狀は默視するに忍びません、茲に本會は緊急決議の結果左記により罹災會員に對し涙と仁俠に富まれる諸君の御情を仰ぎ之を休して慰問いたしたいと存じます

左記

- 一、金額 貴見に任ず
 - 一、メ切 五月十日
 - 一、送金 更級農學校卒業生會
- 小松原義捐據金會計報告
- 一、收入
- 壹百九拾貳圓九拾錢 會員獻金
六圓八拾七錢 卒業生會
- 計金 壹百九拾七圓七拾七錢

長野市
北海道農業試験場
朝鮮
埴科郡清野村
同 東條村
山梨縣中巨摩郡
埴科郡西條村
北海道訓路
朝鮮釜山府
上水内郡安茂里村
南滿州瓦房店
群馬縣碓氷郡
埴科郡戸倉村
長野市
埴科郡東條村
京郡第三高等學校
東筑摩郡日向村
埴科郡森村
同 東條村
更級郡鹽崎村
埴科郡埴生村
更級郡小嶋田村

宮川保治
中曾根徳治
松本重八郎
平林幸太郎
相澤範夫
笹本武雄
宮澤美好
矢嶋只人
橋本重幸
住澤光治
市川政治
金田四郎
瀧澤延壽
竹村太郎
相澤仲夫
宮城好章
平田元義
森村支會
瀧澤一潔
山岸嘉一郎
湯原年雄
小嶋田村支會

同 鹽崎村
南滿州關東州農事試験場
同
同
埴科郡五加村
更級郡信里村
同 稻里村
三重高等農林學校
更級郡信里村
同 中津村
東京農業大學内
同
同
埴科郡五加
同
更級郡篠ノ井町
埴科郡雨宮縣村
同
同

松本藤干男
塚本仁男
宮原晴夫
西澤愛喜
阿部一喜郎
嶋田初義
嶋田初義
稻里村支會
小河原
風間旭田
小林徳重
武井安治
傳田寛一郎
寺澤英吾
高野禎二郎
瀬野忠
中村治平
宮入大平
前山熒男
窪田誠太郎
窪田五十郎
半田郁郎

同 竹内清人
同 安藤貞江
同 北澤貞江
同 村澤春貞
同 正村秀二郎
同 東福寺支會
他に榮村支會に於ては會長山岸保氏代表を以て罹災卒業生に對シクラブ齒磨一袋を同情せらる

◎篠ノ井高等女學校同情記録

小松原大火災に就き本校の執りたる處置左の如し
一、發火後火勢益々熾んにして、容易に鎮滅の様子なかりしにより、山崎書記先づ現場に駆付け、被害の状況を視察す。
二、同書記の歸校報告を待ちて道田校長外瓜生、工藤、青木、山崎の諸職員 篠ノ井町内の菓子店を漁り、食パン數十個を買集め、之れを携へて現場に急行、罹災者を慰問し、本校生徒家庭中心にて罹災せられたる方に對しては右食パンを贈呈す。
三、同夜八時歸校緊急職員會議を開き取敢へず次の方法を講ずること決す。

- 1、罹災本校生徒に對しては、教科書、學用品等修學に必要なものを贈ること。
 - 2、一般罹災者に對してはネル地四つ身單衣百枚（男女各五十枚）を急遽製作し救済本部を経て贈呈すること。
 - 3、右経費は職員積立金の一部及び生徒義損金を以て之れに充つること。
- 而して衣類に就きては二十一日第四學年女物を第三年男物を擔當、夕刻までに仕上げて救済本部に送達せり。
三、二十一日罹災生徒福井淑子、長田かつの、庄田せい瀧澤はま、四名の家庭に對し慰問状を發送す。
四、二十四五兩日に亘り本縣社會課の委囑により罹災者に寄贈すべき衣類、ネル地單衣二百十八枚を作製す。
五、二十六日 罹災生徒に教科書、辭書、學用品を贈る
六、九月八日火災救済事業慰勞のため縣社會課より交附せられたる金圓使用の途につき生徒協議の結果、運動場並に、學校園に備付くべきベンチを新調することとす。

◎共和小學校校務日誌抄

四月二十日 火 曇

正午頃ヨリ強烈風

午後二時四十五分職員會開催。此時小松原區松本市氏方より出火。見る／＼八方に燃え擴がり、一時間餘にして、百五十四戸を焼失す。

男職員全部出勤。消防並に物品搬出に大活動をなす。午後四時半より本校を罹災者避難所とし立札をなし罹災者の收容につとむ。

婦人會員の招集を行ひ、炊き出しを行ふ。職員は部署を定め、村内各部落の炊き出しの受附並に罹災者への配給にあたり、午後十時に至る。

午後十時西澤小林兩職員は、天幕借用のため、下水鉤眞嶋、大塚へ出張十二時半歸校す。

「當夜は信濃電氣株式會社の職工數氏來校。數十燈を取付點火し、晝を欺く明晃の中を村内及他村各種用件の人々、罹災者消防手等入亂れて喧騒を極め、宛然修羅場の觀ありし。」

四月廿一日 水 晴

本日より二十四日に至る四日間、臨時休業を行ふ。

午前九時職員會開催。學校將來の方針並に當面の救援事業に關する打合せをなす。見舞客引きもきらず。

午後二時より職員一同にて罹災者の見舞を行ふ。

四月廿二日 木 曇

午前八時罹災者以外の兒童の召集を行ひ、大火災と兒童としての覺悟」につき訓話義捐金並に古本の寄贈方を話す。

高等科並に尋常六學年男子八十名は、罹災者への物品配給に任じ、大に活動す。午後九時半退散。

四月廿三日 金 晴
高等科兒童及六年兒童同上

四月廿四日 土 晴
本日を以て臨時休業を終る。

職員は午前八時半出勤。午後三時退散
四月廿五日 日 晴

本日は日直職員を増加して二名とし、臨時の出來事に對して遺憾なきを期することとせり。

四月廿六日 月 晴

本日より授業を開始す

第一時訓話 第二時大掃除

第三時寄贈品を罹災兒童へ配布

本日罹災兒童中欠席者次の如し。

高一 松坂あさの 製糸場行

尋六 松坂まさ江 忌引

尋四 太田壽三郎

尋一 久保田かほる

四月廿七日 火 曇後雨

午後村配給手傳の豫定なりしも、雨のため延期。授業

午前三時間。學用品の分配。

四月廿八日 水

壯丁學力試験

午前二時間授業をなし、それより配給手傳。午後五時終了。

四月廿九日 木 雨

傘配給。

午前校長郡役所へ出張。

四月三十日 金 晴

佐藤揆圖證、嶋田嘉三郎兩氏見舞のため來校。授業普通に行ふ。

五月三日 月 晴 溫暖

午前山本聖峯氏來校。見舞品寄贈。

講堂に於て兒童に對し一場の訓話あり。

「弘化四年川中嶋平洪水後の民心の緊張を語り、小松原大火災後に於ける罹災者の覺悟に及び、兒童の立場として如何に勗むべきかに及ぶ。」

藤川訓導事故欠席。午前三時間にて配給手傳をなす。

五月十日 月 曇

午後一時より小松原罹災兒童の家庭訪問を行ふ。

「職昌手分して各受持兒童の家庭につき慰問し、心ばかりの見舞品を贈呈せり」

昭和貳年度

四月廿日 水 曇

午後南風強し。

本日は小松原大火災の壹週年記念日に當り、昨年の如く曇天強風なり。

第一時記念日につき訓話す。

1、健剛なる精神により復興せよ。復興と青少年の責任。

2、世の同情に對する感謝。

第二時合同体操

火災當時の學校職員は左起の通りであつた。

校長

坂田 俊 雄

曾根川 千治郎

池田 與三郎

小林 保男

五明 千年

柏原 慶野

酒井 眞佐子

藤川 隆鼻

柳澤 照男

繁治 野口 靜雄
 柳澤房太郎 太田 徳重
 榮作 太田 壽三郎
 房太郎 柳澤 たつい
 君太 堀内 れん
 寅藏 岡村 たまい
 良之助 馬場 英三郎
 けさ 瀧澤 政實
 千松 久保田 治郎
 貞二 坂田 虎雄
 竹三郎 宮内 竹則
 一太郎 町田 欽二郎
 國之助 飯田 使實
 惣吾 野口 ゆき江
 壽男 吉田 奈美
 鶴治 瀧澤 しづ江
 給治郎 矢澤 三郎
 尋常科五學年 (一五名)
 茂雄 庄田 文雄
 長藏 吉岡 正利
 莊三郎 小山 倫
 幸平 小山 集

植太郎 町田 利貞
 貞幸 小出 鐵男
 延治郎 野口 慶治郎
 袈裟雄 吉岡 本
 鷹治 太田 みね
 鶴太 太田 たい
 熊太郎 小山 王
 道治 松坂 春之
 喜三郎 瀧澤 宣嘉
 藤伊 野口 秋夫
 和十郎 森川 典
 主計 瀧澤 義次
 友彌 唐木田 よしき
 春治 岡村 傳
 鶴太 太田 こを
 義男 松坂 りん
 ちの 馬場 武一郎
 主計 瀧澤 稻男
 才治 石黒 満治
 良隆 飯田 眞一郎

福之丞 吉岡 善治
 榮二郎 高野 よき
 角之助 高野 きく江
 俊治 野口 さと
 尋常科六學年 (一五名)
 榮作 太田 仁
 多美衛 清水 清
 給治郎 矢澤 勝友
 和十郎 森 隆則
 邦友 福井 花江
 慶作 松坂 マサエ
 貞幸 小出 秀子
 種吉 飯田 あさの
 高等科一學年 (二三名)
 良隆 飯田 英太郎
 延治郎 野口 謹一郎
 角之助 高野 喜久治
 忠治郎 野口 保夫
 鶴治 瀧澤 繁義
 良之助 馬場 みち
 兼治 松坂 方
 高等科二學年 (二三名)

善一郎 久保田 辰男
 袈吉 庄田 とき
 陸之助 山田 勝子
 寅作 岡村 貞良
 やすよ 坂田 藤重
 藤伊 野口 夏雄
 宅意 久保田 遼
 重作 小出 ふさ
 龜作 野口 りきの
 袈裟太郎 酒井 光枝
 一太郎 町田 文雄
 ふさ 瀧澤 久雄
 瀬喜太 塚田 敏寛
 植太郎 町田 敏寛
 吉之助 小山 政伊
 熊太郎 小山 正

學務委員
 校 醫

小山 源之助
 金澤 清美
 矢野 卯金吾
 渡邊 清高
 西澤 直太郎
 倉田 實
 寺澤 種二
 飯田 大佐
 嶋田 佐門

◎學年別罹災兒童氏名並
 保護者名

尋常科一學年 (二十一名)
 保護者 兒童氏名
 幸平 小山 均
 福之丞 吉岡 今朝美
 陸治郎 福井 安幸
 浦之助 飯田 康雄
 俊治 野口 好美
 袈裟雄 吉岡 トク
 ふさ 瀧澤 壹臣

保護者 兒童氏名
 幸治郎 塚田 玉智
 寅藏 岡村 安張
 鶴太 太田 庚
 寅重 瀧澤 英伸
 和十郎 森 千代枝
 榮作 太田 くめ
 信衛 瀧澤 英雄

今朝二郎 庄田 篤
 卓二 坂田 きくの
 角之助 高野 ゆきい
 貞幸 小出 芳伊
 尋常科二學年 (二十名)
 長藏 庄田 弘直
 繁治 吉岡 義二
 嘉内 野口 隆明
 植太郎 太田 勝衛
 廣太 町田 久友
 給治郎 松坂 久男
 矢澤 四郎
 良隆 飯田 きくの
 定治 内山 直江
 春吉 野口 くにい
 尋常科三學年 (一一名)
 壽作 瀧澤 榮一
 才治 石黒 貞治
 常雄 宮尾 藤男
 時重 馬場 くめ
 卷治 岡村 重
 尋常科四學年 (三十三名)

袈裟太郎 酒井 高利
 善一郎 久保田 かをる
 才治 石黒 けさ
 本太郎 小出 源治
 道治 松坂 忠重
 竹三郎 宮内 晴夫
 莊三郎 小山 久利
 有本 福井 本宣
 藤太 飯田 等
 ちの 馬場 ふみ
 渙治郎 野口 律
 兵一郎 福井 きくの
 寛治 高橋 一子
 多美衛 清水 林
 義三郎 久保田 保
 袈裟太郎 酒井 幹男
 吉彌 坂田 たけみ
 陸之助 山田 キノイ

鶴太	太田 武雄	文作	長田 忠男
袈裟太郎	酒井 安幸	幸治郎	塚田 光商
繁治	野口 武雄	清作	庄田 正一
貞幸	小出 芳雄	よね	堀内 忠義
時重	馬場 けい	和十郎	森 美枝
本太郎	小出 よし	俊治	野口 うめ
榮治郎	高野 ふさ		

◎小學校を經由したる同情

須坂小學校から

謹啓 今回の小松原の御災難誠に御察し申上ます罹災者中には児童ことに貴校在學の児童も少なからぬことと思ひます

物心ある大人は堪へられもませう、あきらめもしませう併し使ひ馴れた學用品を失ひ魂を打込んだ、玩具、運動具、さては着替への着物や、かばんを焼失してしまつた無邪氣の児童の心の中を推量しては眞當に堪えられぬ心持がいたします

別代金五拾圓五拾錢は私共小學校の児童職員此心持の滴りに過ぎないのであります

ドウゾ純眞な児童同志の同情を交はす資料として今回の

災難に逢つた貴校児童のために御使用下さい
「金五十四錢」

小松原ノ火事ニアイ一番コマル人ニアゲテ下さい
尋五竹組 佐藤 宇市

これは火災の翌日まだ災難のことを児童に傳へぬ前に金を添へて持参した児童の手紙であります

世の垢に染まぬ児童の中にこそ、眞の人間の心が味はれます、眞の道德の芽生が認められることと思ひます

ドウゾ御受下さい 敬具

大正十五年四月三十日

上高井郡須坂小學校長 山口菊十郎

更級郡共和小學校長 坂口俊雄殿

志賀小學校から

謹啓 御村今回の大火は 經濟上に教育上一大損失に有之眞に御同情申上候

早速児童に訓話し児童より教科書の寄附を申出で候間別記の通り、合計六百九十二冊を貳箱に入れ御寄贈申上候古本にて多少改正されたる本も有之候へ共一片同情心の發露に有之候間御利用下さらば幸甚の至りに御座候

敬白

北佐久郡志賀小學校長 小野澤 正男
共和小學校長 坂口俊雄殿

埴科郡豊榮小學校から

啓上

今回貴村小松原區火災については何とも御氣の毒の次第にて申上ぐる言葉も知りません殊更御校児童方には定めし萬事御困りの事と御推察申上ます

就ては御校児童方の學用品代として甚だ些少なから當校児童から別紙爲替を以て差上げたいと存じます

何卒御受納下さい

尙折角御自愛の程祈上げます 匆々

更級郡村上小學校 成田 成一郎

前略

御村小松原部落今度は突然の大火災大慘事餘りの御愁はしさで何んとも御見舞の言葉も出ない様な次第です

迅速當地小學校児童は勿論當村有力者各位には其慘狀其の極に達し迎も人間業ならぬ實狀を委細に申上げて出來得る限りの救護を願ひつゝあります、別紙金貳拾圓餘りに少額到底罹災児童諸子に鉛筆一本だに贈る事を得ば幸甚の至りであります

あの高樓櫛比して何不足なく暮す事を得たあの児童等昨日に變る今日の生地獄に苦しき喘をしなければならぬ、可愛い子供等の救護に御使ひ下さる様御願ひ申上ます

大正十五年四月二十三日

小學校長へ宛てた可弱い女性の同情

拜啓

小さき友の皆々様

こん度の大火災、私達はもう何と申上げて宜しいのですかわかりませんが、唯涙もつて皆々様のために祈らせて戴くより他はありませんでした

皆様はすべて天のお試です、皆様の一層勉強しなければならぬ時が來たのです、どうぞ早くそれをおさとりになつて下さいまして共に進ませうネ……

神様と共に……こゝに慰問品と申上げるもお恥しきものでございますが只ほんの私の心だけにお納め下さいますならば有難うございます

一、手帳 七冊

四月二十一日夜

長野市吉田町 長野製糸工場 岡澤ひろ子

福嶋小學校から

拜啓
今回の貴村之大火誠に御氣の毒に存候 就ては當校兒童職員より貴校罹災兒童職員へ御見舞の印として金參拾圓別券にて御贈呈致候間よろしく御計ひ被下度候
五月三日

共和小學校長 坂口俊雄殿
福嶋尋常高等小學校

南條小學校から

拜啓
益々御清榮奉賀候 去廿日貴校通學區域小松原區不慮の大火にて罹災の兒童其家族に對しては深甚の同情に堪へず茲に貴下を通し御見舞申上候 就ては當校職員兒童一同同情の微衷として左記金額罹災兒童の學用品の一部として贈呈致し度につき御受領の上可然御取計相願度候

敬具

四月廿五日
埴科郡南條小學校長 高田仙太郎
共和小學校長 坂口俊雄殿

一、金貳拾七圓六拾四錢也

貴村今回の御罹災に對し本會兒童は御同情に堪へず甚だ少額ながら各自の贖金に依り手帳百冊を購入し貴校在學の罹災學童諸君に贈呈致し度別途鐵道便により貴下宛發送致し置候に付き乍粗末微意の程を御傳達の上現品御分配に預り度此段貴意を得候
拜具

大正十五年四月廿八日
小縣郡東鹽田村 下之郷双葉會長 齋藤小太郎
共和小學校長 坂口俊雄殿

一金七圓也(同封爲替券)

右金額は甚だ輕少には候へども今回御村小松原區罹災學校兒童へ學用品費の一助にもと當校兒童及職員微志の贖出に仍るものに御座候間御手數には御座候へども適當なる學用品御見斗ひ御購入被下直接罹災兒童へ御分與願度く此段及御依頼候也

尙直接御伺ひ御願ひ致すべき所書狀を以て失禮致居る次第御海容被下度候

大正十五年五月五日
埴科郡中之條小學校職員兒童一同
更級郡共和小學校長殿

◎凄慘を物語る手紙と手紙

二十六米突の風速に低氣壓旋風と大自然の魔手は恣に其慘虐を隨所に現出した、火元に應援の爲め出勤した庄田茂雄氏は、各所に手傳て自分の家へ皈ると全く手の下す事が出来なかつた母屋に續く裏の土藏内の然も柳行李の中に入れておいた手紙が六里を距てた、上水内郡中郷村字小玉地籍の早川孝三郎氏の桑畑に數ヶ所の焼痕を止め舞落て居た四月二十一日耕作に出た早川氏は取敢ず、これを見て如何に其慘害の甚しかつたかを慮り別紙の手紙に金壹圓の小爲替を封入して役場宛送附された

拜啓 一昨二十日貴村小松原の大火には驚入り何共申様なき大悲慘事と御察申上候

折柄の烈風にて數多の燃殻及別紙の書狀は五六里を隔つる當地に飛び來り桑樹に引掛りたるものにて文面高等設置云々の事より察すれば二三十年以前の手紙と存ぜられ候得共余りに珍らしき事故大火之當日如何に烈風なりしか後日の參考資料とも存じ同封御送り申上候次第に御座候

次に封入の爲替券甚輕少には候得共聊御見舞として差上候に付貴村罹災者救恤費の内え御加へ被下候共或は手紙

宛名之庄田様へ御遣し被下候共何れなり共宜敷御計被下度御依頼申上候 敬具
四月二十二日 上水内郡中郷村小玉 早川孝三郎

共和村役場 御中

◎六里を飛んだ手紙の文面 (長サ二尺巾六寸)

拜啓 昨夜愚息熟々話しに依れば今後も鹽崎校へ御通學の御事誠に好き御事と存じ居候學問は中途にて校を轉ずる程損の事は無之と信じ申候故何卒是迄御一所に通學致され候一年生の兩人も共和學校高等認可に相成候迄鹽崎校へ出校致し居られ候様御誘引致度候若し北原へでも入學致す心得ならば共和學校も不日高等二年を認可に相成儀に候故今より當校へ入學致す方上策と信じ候間彼の兩人へ能々御話し聞かせ願ひ度く候拙者も明日にも暇を見つけ罷出談示致し見度候間北原へ入學の儀三四日見合せの事に御話し置き下され度候右は御依頼に及び候也
早々以上

十月一日 共和學校長 小林元治郎
庄田茂雄様

◎共和學校宛義捐金送附芳名

一金參拾圓也 長野市立町 柳澤勘之助
 一金拾七圓也 上水内郡小田切小學校職員兒童一同
 一金八圓五拾錢也 埴科郡豐榮小學校兒童一同
 一金貳拾圓也 更級郡村上小學校 成田正一郎
 一金四圓也 小縣郡鹽尻村 母袋誠外三名
 一金貳拾七圓六拾四錢 埴科郡南條小學校職員兒童一同
 一金五圓也 長野市縣町 小島まつ
 一金五拾圓五拾錢 須坂小學校職員兒童一同
 一金五圓也 上水内郡榮小學校職員兒童一同
 一金五圓也 小縣郡東鹽田下之郷双葉會贊助員一同
 一金參拾圓也 西筑摩郡福嶋小學校職員兒童一同
 一金拾圓也 奈川村婦人會
 一金拾五圓七拾八錢 奈川小學校職員兒童一同
 一金七圓也 埴科郡中條小學校職員兒童一同
 一金九圓拾錢也 上水内郡日下野小學校職員兒童一同
 一金參拾圓也 篠ノ井町校醫 嶋田左門
 一金五圓也 東京府下大久保百人町 清水千代
 一金四拾六圓十貳錢 共和尋常高等小學校兒童一同
 一金拾五圓也 更被郡信里村誌友一同代表小河原とみ

手帳百廿冊 小縣郡東鹽田村下之郷双葉會兒童
 一手帳七冊 長野製糸株式會社内岡澤ひろ子
 一手帳百冊 長野市後町 白井齊
 一手帳三十冊 埴科郡豐榮村 駒村英光
 一石盤二冊 諏訪郡岡谷 林今朝市
 一教科書三十冊 共和村 柳本いち
 一鉛筆 一折 同 平林行雄
 一手帳 一冊 北佐久郡志賀小學校兒童
 一教科書古本 上水内郡大豆嶋小學校西澤恒一郎
 一原稿紙貳千枚 長野市石堂町 柏木千藏
 一鉛筆十二折 埴科郡森小學校職員兒童
 一手帳三百冊 同 上
 一鉛筆三百十三本
 右ノ外
 手帳、衣服、鉛筆、筆、墨、紙、鉄等貳百五十餘點
 罹災者供給品及代金調
 一、洋服 百貳拾圓四錢
 一、傘 八拾貳圓八拾錢
 一、學用品 貳拾壹圓五拾四錢
 一、教科書 五拾八圓九拾壹錢
 一、第二回洋服給與 貳拾圓
 一、第二回學用品給與 貳拾壹圓貳錢

火災罹災者に對する供給教科書調

學年	修身	讀方	書方	算術	地理	同附圖	理科	國史	圖畫	家事
尋一	數冊	額金	數冊	額金	數冊	額金	數冊	額金	數冊	額金
二	二七	一三一、五	一	一	一	一	一	一	一	一
三	三二	二二	一	一	一	一	一	一	一	一
同四	一四一、四	七九	一	一	一	一	一	一	一	一
同五	九一〇	三三	一	一	一	一	一	一	一	一
同六	六三	四〇	一	一	一	一	一	一	一	一
高一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一
計	五五、三	五八、三	三二、一	三三、五	一六、二	二五、四	五二、八	四八、七	五〇、五	四三
合計金五拾參圓貳拾錢 三百四十八冊										

第二回供給教科書調
 高 修身書 貳冊 代金 貳拾貳錢
 同 書方手本 貳冊 代金 拾錢
 同 地理書 六冊 代金 七拾八錢
 同 圖畫手本 壹冊 代金 拾貳錢
 同 農業書 拾冊 代金 參圓貳拾錢

學用品供給調

學年	筆	木炭紙	傘	クレオン	石盤	石筆	掛物	計
尋	1	1	2	1	1	1	1	1
高	1	1	1	1	1	1	1	1
計	2	2	3	2	2	2	2	2
高	1	1	1	1	1	1	1	1
高	1	1	1	1	1	1	1	1
同	1	1	1	1	1	1	1	1
同	1	1	1	1	1	1	1	1
同	1	1	1	1	1	1	1	1
同	1	1	1	1	1	1	1	1
同	1	1	1	1	1	1	1	1
計	9	9	12	8	8	8	8	9
高	1	1	1	1	1	1	1	1
高	1	1	1	1	1	1	1	1
同	1	1	1	1	1	1	1	1
同	1	1	1	1	1	1	1	1
同	1	1	1	1	1	1	1	1
同	1	1	1	1	1	1	1	1
同	1	1	1	1	1	1	1	1
計	9	9	12	8	8	8	8	9

尋 三 代金 參拾參錢
 高 二 代金 九拾六錢
 計 金 五圓七拾壹錢
 總計金 五拾八圓九拾壹錢

日本赤十字社長野支部の活動

救護班派出の件

本月二十日午後二時更級郡共和村字小松原に火災起り折柄の暴風に煽られ一部落殆ど全滅の慘狀を呈し傷病者も相當に發生し救護班の必要を感じ即刻之れが派遣方も更級郡長より電話を以て申請ありたるも大急の場合制規の御承認を受けるの余地なきを以て即時左記人員を以て救護班を編成して派遣同夜徹宵患者の收容に努め翌二十一日飯還候に就ては之れが御承認相成度
 右決裁を仰ぐ

大正十五年四月十二日

派遣人員

醫員 角田庄作
 書記 松峯隆之
 看護婦 白澤好美
 同 篠原みどり
 同 國上キノ

救護報告

赤十字長野支部救護所

共和村字小松原南組 野口高之助宅

右の者宅は風の工合に依り災害を蒙りたるに依り始め郡役所の指定は同村小學校内なりしも學校は災害地を距る約十丁にして救護に便ならずと觀て直に右災害地の殆ど中央に位せる何れへも便なる所に救護所を開きたり救護せる患者重傷者合せて貳拾參名(午後九時四十分迄に)何れも火傷、裂創、踏抜等にして手當後皆各自の避難所に飯れり。郡役所にては同所員の未だ活動を開始せざるに先ち急速救護班の到着を深く感謝せり。

焼失せる戸數は百七十八戸なるべし、確實なる數は明朝調査の上ならでは判明し難し焼死せる者一名(庄田清作)五十三才ありしも之れは土地の醫師に依りて救護せられたり。

班員は今晩此所にて徹宵救護に従ひ二十一日に至り一般に沈靜せる時に於て發生すべき患者を救護し一段落を告げし時機を見て適當に引揚ぐるを可とし居り候 班員の健康異狀無之候右取敢ず報告致し候

四月二十日午後九時四十分

小松原火災地救護班

松峯書記

早川主事殿

第二報告

四月二十一日午前一時半救護打切り五に一二時間位宛就寝せり。
 四月二十一日午前四時起床救護開始只午前八時五十分迄に救護せるもの六十二名内燒死女一名死体檢案す
 二十一日午前十一時半迄に罹災地一巡の後救護所閉鎖引揚げの豫定班員無事右及び報告候也
 四月二十一日午前八時五十五分

小松原救護班

早川主事殿

追報 二十日午後十一時頃舊篠之井踏切に於て自動車と汽車衝突即死一重傷三輕傷二是れは篠之井町小宮山醫師應急救護せり。

救護日誌

更級郡共和村日本赤十字社救護班

- 一、燒失戸數 一五四戸
- 一、燒死者 小松原中組 瀧澤みか(五十九才)
- 小松原南組 庄田清作(五十三才)

◎救護人名

マ、右足部擦過傷

鹽崎村 關川忠一

- 一、右足坐火傷 所置 沃丁 繃帶 小松原 吉田 壽男 二十三才
- 一、右手擦過傷 所置 沃丁 繃帶 小松原 山田 寛治 三十五才
- 一、下腿下部擦過 所置 沃丁 繃帶 中津村 山本 春治 五十八才
- 一、右手顔面火傷 所置 沃丁 繃帶 小松原 小出健一郎 二十八才
- 一、左足切創 所置 オキシフル濕布 繃帶 小松原 酒井ハツ 四十二才
- 一、右足切創 所置 沃丁 繃帶 小松原 酒井こえな 六十二才
- 一、右足捻挫 所置 沃丁 繃帶 篠之井町 栗林 熊吉 四十二才
- 一、腦貧血 位置 沃丁 繃帶 篠之井町 伊藤 博 二十六才
- 一、頭痛 所置 赤酒 薄荷 篠之井町 宮原 民雄 三十才
- 一、眼申異物 所置 ミグレニ、一一包授與 共和村 某 二十一才
- 一、眼申異物 小松原 野口延治郎 六十才

- 一、眼申異物 小松原 久保田ソウ 四十七才
- 一、大腿部捻挫 所置 沃丁 繃帶 小嶋田村 瀧澤鶴太郎 四十七才
- 一、眼申異物 所置 沃丁 繃帶 鹽崎村 山岸嘉一郎 二十八才
- 一、眼申異物 榮村 山岸 信雄 三十三才
- 一、上腿打撲傷 所置 沃丁 濕布 小嶋田村 山田 吉雄 四十才
- 一、指頭刺物 所置 沃丁 繃帶 篠ノ井町 宮入 輝虎 三十二才
- 一、打撲傷 所置 沃丁 繃帶 眞嶋村 瀧澤 峯雄 三十才
- 一、眼申異物 所置 沃丁 繃帶 小松原 野口ひろ 三十七才
- 一、眼申異物 所置 沃丁 繃帶 小松原 松坂福太郎 十九才
- 一、眼申異物 所置 沃丁 繃帶 篠ノ井町 丸山 敬三 四十五才
- 一、眼申異物 所置 沃丁 繃帶 篠ノ井町 丸山 敬三 三十四才
- 一、右手掌擦過傷 稻里村 宮本 茂則 三十四才

- 一、右手掌火傷 所置 沃丁 繃帶 川中嶋村 中山 隆治 二十八才
- 一、左腕關節打撲 所置 ワセリン貼用 繃帶 共和村 太田 浪惠 三十才
- 一、眼申異物 所置 沃丁 繃帶 中津村北部消防手 某 二十二才
- 一、左拇指切創 所置 沃丁 繃帶 御厨村 山越 千春 二十九才
- 一、感冒 所置 沃丁 繃帶 小松原 高野新治郎 二十九才
- 一、右手擦傷 所置 アスピリン四回分授與 小松原 庄田 肇 三十六才
- 一、右足第一指打撲 所置 沃丁 繃帶 中津村 下村 亨 二十才
- 一、左中指擦傷及皮下溢血 所置 沃丁 濕布 繃帶 眞嶋村 小山 清友 三十才
- 一、顔面(左)火傷 所置 沃丁 濕布 繃帶 小松原 坂田 ミキ 七十二才
- 一、肩押部打撲 所置 オレブ油塗布 篠ノ井町 田中 廣繼 三十一才
- 一、眼申異物 所置 沃丁 繃帶 小嶋田村 中村 浩 二十三才

- 一、貧血 篠ノ井町 近藤 貞治 二十七才
- 一、右足打撲 所置 赤酒 授與 鹽崎村 伊藤 虎助 三十二才
- 一、頸部火傷 所置 沃丁 塗布 小松原 坂田 ヤスヨ 四十七才
- 一、左足刺創 所置 ワセリン貼用 鹽崎村 中嶋 今朝五郎 二十八才
- 一、左足刺創 所置 沃丁塗布 眞嶋村 中澤 卓美 三十一才
- 一、右膝關節疼痛 所置 沃丁 塗布 小嶋田村 安川 常雄 三十一才
- 一、胸部擦傷 所置 濕布 繃帶 中津村 山田 寛治 四十六才
- 一、左頰部火傷 所置 沃丁 塗布 共和村 松坂 幸 三十二才
- 一、顔面裂創 所置 ワセリン貼用 小松原 坂田 藤吉 八十一才
- 一、心臓病 所置 沃丁 小松原 飯田 慶作 妻 眞嶋 消防手 二十六才
- 一、腦食血 所置 モヒ注射 眞嶋 消防手 二十六才
- 一、頭部打撲裂創 東福寺村 荒井 義春 二十五才
- 一、左手火傷 所置 沃丁 繃帶 小松原 馬場 時重 五十二才
- 一、左足捻挫 所置 ワセリン貼用 西寺尾村 栗林 正己 二十五才
- 一、貧血 所置 沃丁 繃帶 榮村會消附組員 榮 茂 二十三才
- 一、擦過傷 所置 赤酒 川中嶋村 野本 敏男 二十七才
- 一、切創 所置 沃丁 ワセリン 繃帶 小松原 小出 芳雄 十四才
- 一、切創 所置 沃丁 塗布 榮村 山岸 敏 二十四才
- 一、火傷 所置 沃丁 塗布 川中嶋村 山崎 徳重 三十二才
- 一、感胃 所置 ワセリン 塗布 繃帶 長野赤十字社支部病院へ送ル
- 一、胃部 所置 アスピリン錠授與 小松原 宮内 喜知治 二十三才
- 一、手部打撲 所置 沃丁 繃帶 川中嶋村 宮下 勇太郎 二十六才
- 一、足蹠釘傷 所置 沃丁 繃帶 小松原 野口 春吉

- 一、顔面手火傷 所置 沃丁 塗布 小松原 小出 健一郎 四十五才
- 一、手指傷 所置 オキシフル濕布 共和村 岡澤 信年 三十三才
- 一、手指擦過傷 所置 沃丁 塗布 鹽崎村 伊藤 清作 五十一才
- 一、手指擦過傷 所置 沃丁 繃帶 死者 共和村字小松原 瀧 澤みか(五九)
- 一、位置 復活、脚莖、破懷 左上肢四節屈シ右上肢腹活左下肢ハ膝關節下脛骨一部存シ右下肢ハ膝四節ヨリ全クナシ 同 上 庄田 清作(五二)
- 一、皮膚全クナシ 黑色筋肉一二節存ス 顔面ノ筋肉ナシ 臟部ヅキ存ス 位置本所足西 計 焼死共計六十一名

◎救護業務報告 日本赤十字社長野支部

一、一般の状況 大正十五年四月二十日午後三時長野縣更級郡共和村字小松原松本和市方より出火折柄の裂風に煽られ一部落二

百余戸殆ど全滅に至らんとしつゝあり。傷病者夥しき見込を以て救護班派遣方同郡長の要求に依り即時之れを編成自動車にて現場に至り適宜の地點に救護所を開き同夜徹宵救護に當り翌二十一日午前十時迄に救護せる死者、重軽傷者六十二名にして其慘害名状すべからざりし。一、作業に關する事項 焦土に化せる罹災地の中央風向により奇蹟的にも難を免れたる野口高之助氏の軒頭に赤十字旗を掲げ其一室に携帶の材料を備へたり。一、救護員に關する事項 醫員及び看護婦は支部病院職員、書記は支部書記を以て之れに充てたり其氏名左の如し。

- 一、救護材料に關する事項 携帶せる材料左の如し。 披一 カスト二 赤十字旗一 沃丁 酒精 オレブ油 繃帶 ガーゼ
- 一、經費に關する事項 醫員 角田 庄作 書記 松峯 隆之 看護婦 白澤 好美 同 篠原 みどり 同 國上 キノ

支出せる經費總額左の如し
金六拾七圓也

内譯
金參拾壹圓也

旅費及手當

金參拾六圓也

一、患者及び消費品に關する事項
前表の通り

雜費

◎大正十五年四月二十日病類別患者表

病類	患者數		治療日數		治愈		死亡		未治療宅		他病院へ轉送		引渡	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
外傷	4	6												
法定及其他傳染病														
神經系病	1													
呼吸器病														
循環器病														
榮養器病														
眼病														
運動器病其他	1													
合計	5	6	6	6	3	5	2	2	4	5				

◎外傷患者種類及ビ部位表

種類	頭部		面部		頸部		胸部		腹部		背部		腰部		上肢		下肢		計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
男過傷																				
火傷																				
擦傷																				
刺創																				
捻挫																				
眼中異物																				
切創																				
打撲																				
裂創																				
合計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
備考	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
外ニ男女計二名燒死																				

オレーブ油

四五〇瓦

◎救護班遣申請ノ件

大正十五年自四月二十日
至四月廿一日藥品治療用消耗品表

ガゼ目
五裂繃帶
ワセリン

消費量
六反
十五卷
四五〇瓦

本社長殿
赤長第六五九號 大正十五年五月三日
日赤長野支部長

本月二十日午後二時更級郡共和村字小松原(支部ヲ距ル一里餘)に大火災起リ折柄の烈風に煽られ戸數二百余の一部落殆ど全滅し傷病者多數發生に付き救護班派遣方更級郡長より縣廳を經由して申請に付即時之れを派遣致し候に就ては御承認相成度く此段稟請候也
救第三八〇號

大正十五年五月十一日

日本赤十字社社長 男爵 平山 成信

長野支部長 梅谷 光貞殿

五月三日赤長第六五九號申請災害救護施行ノ件承認ス

◎日本赤十字社長野支部救護班閉鎖後ノ救護者左ノ如シ

(四月二十二日ヨリ篠ノ井町醫師瀧澤朝次郎氏ノ治療ニ依ル者)

- 小松原南組 渡邊 某 胃
- 同 松坂慶作氏ノ妻 心臟
- 同 氏ノ娘 胃
- 篠ノ井消防手 某 擦過傷
- 小松原消防手 某 指擦過傷
- 篠ノ井町消防手 井堀 誠 目ノ治療

- 同上 栗原 駒吉 目ノ治療
- 小松原消防手 瀧澤 一二三 足傷
- 瀧澤喜久男ノ長女 瀧澤 ひさし 溜へ遂落シテ胃
- 小松原消防手 同上 某
- 同上 飯田 等 足部打撲
- 同南組 丸山 常造 足部釘傷
- 篠ノ井町消防手 新井 富男 耳擦過傷
- 同上 氏名不詳 目ノ所置
- 川中嶋消防手 吉川 義茂 足傷
- 中津村消防手 坂田 實 目ノ治療
- 南組 高野 新治郎 目ノ治療
- 中組 高野 氏方運轉手 感胃
- 北組 宮内 喜知治 感胃
- 太田鶴太長女 太田 たい 風邪並胃
- 岡田 林部 榮 膝部ハレ
- 吉岡豊三女 山口 酒造太郎 目ノ治療
- 中組 吉岡 悦子 腸及ビ目ノ治療
- 段原組 飯田 良隆 腸の疾患
- 渡邊 眞 感胃
- 中組 小山 いだの 産後
- 西寺尾村 今井 信三 指ノ切創

- 篠ノ井町消防手 山岸 信夫 足部擦過傷
- 北組 福井 邦友 便秘
- 同 内山 定吉 胃
- 中組 山田 官治 胸部火傷
- 同 高野 一二三 感胃

共和村大字小松原火災記事

北原郵便局

過ぐる大正十五年四月廿日共和村大字小松原の火災は川中嶋平野に未曾有の火災にして時恰も暴風火勢猛烈を極め僅々卅分間にして同字を席卷し遂に百八十二戸を烏有に歸せしむ出火は晝間なりし爲に人蓄の被害は少なかりしも其貴重なる財物は勿論重要書類迄も焼失せるもの其災害の甚しき其悲惨の状況は今尙當時を廻想して戦慄に堪へざるものあり。

左に當時當局の應急所置及上司への状況報告等順を追つて記すれば次の如し。

一、大正十五年四月廿日電報報告を名古屋遞信局監督課長宛發送す
電文 區内共和村大字小松原大火郵便函焼失委細後報

當局の文書報告

北第一〇七號

大正十五年四月廿日

長野 北原郵便局長 田嶋 傳藏

名古屋遞信局監督課長殿

本日午後二時卅分區内共和村小松原字南組松本和市宅より失火し午後五時迄の間に字中組字北組計百八十二戸を烏有に歸せしむ當局は出火を知り直に通信手及集配人を現場に急派したるも暴風の爲火勢猛烈を極め同字郵便切手賣捌所南組二一七番地長田文作宅に設置の郵便函は是を取外すの暇なく焼失の止むなきに至る。右報告候也

一、四月廿一日早朝豫備郵便函を舊焼跡に設置し半焼竹木トタン板等にて其の周圍風雨を防ぐ設備をなし高く遞信旗を樹立す而して事務員一名及集配人一名を駐在せしめ罹災者の便を計りて電報受付事務を開始す(本施設は四月廿六日迄繼續實施す)

又局長代理は避難所に罹災者を慰問し郵便葉書五百枚を寄贈す。

一、四月廿六日遞信局監督課より左記電報照會あり。
焼失郵便函に郵便物否、焼失前開函日時を報告あれ
當局報告の電文

焼失の郵便三通前後の見込、二十日午後一時一〇分開
函

一、當局の文書報告

北第一〇九號

大正十五年四月二十二日

長野 北原郵便局長 田嶋 傳藏

名古屋逓信局監督課長殿

焼失郵便函の件報告

一號便開函は廿日午後一時一〇分にして出火は午後二
時卅分なるを以て其間一時間廿分なり平常取集状況と
右経過時間より推察するに約三通前後のものたるべし
と思量す

右報告候也

附記

一、事務員集配人を駐在せしめたる自廿一日至廿六日六
日間の郵便集配物數電報受付配達の通數等は時日経過
の今日何分不明なり

一、大字小松原は電報發信に就ては平常約一里を隔つる
北原局迄出向を要するものなるを此の臨時の施設は相
當便宜なりしものと思量せらる。

◎共和消防組員全員に對し長野縣

聯合消防同盟會總裁より慰問

消防手

大正十五年四月廿日更級郡共和村火災の際消防に出動
し其の不在中自家災厄に遭ひたるは畢竟専心職務に盡瘁
せられたる結果にして寔に同情に堪へず茲に長野縣聯合
消防同盟會々則施行細則第五條に依り金壹封を贈與し慰
問の意を表す。

大正十五年五月廿八日

長野縣聯合消防同盟會總會

從四位 梅谷 光貞印
勳三等

◎自動車衝突と消防手の死傷

篠ノ井警察署から應援命令を受けて時を移さず駆けつ
た鹽崎消防組其他は余燼止まず各所に火は燃え盛つて居
る各消防組では夕食を取りに消防手數名を飯村さした其
多くは輕傷者を以て宛てた中嶋今朝五郎氏も此時足に釘
を踏んで居つたので丸通運送店の自動車に依つて宙を飛
んで今や舊篠ノ井の踏切を通過せんとする時下り百三十
三號の貨物列車は驀進し來り列車と衝突して自動車は大

破され中嶋氏は其場に即死し運轉手小沼忠義(二二)同助
手宮嶋春雄(三二)は瀕死の重傷を負ふた大橋事を出來し
た他同乗消防手も何れも重輕傷を

一方川中嶋消防組消防手 山崎福茂(二八)飯嶋舞治
(二五)兩氏は小山幸平氏宅座敷に於て消火に盡力中雷管
破裂して顔面に大火傷を負ひ直ちに救護班の治療を受け
共和消防組岡田部消防手小笠原政廣氏は消防に盡力中
眼を打ちつけ遂に失明の悲運を見た他救護班日誌を見て
も數多の重輕傷は續出した左は中嶋今朝五郎氏葬儀に於
ける弔詞である。

弔詞

更級郡鹽崎村消防組

故消防手中嶋今朝五郎氏

大正十五年四月廿日更級郡共和村字小松原に於て火災
の際熱心消防に盡し負傷し歸途不時の災厄に遭ひ其職に
盡る 誠に哀悼の情に堪えず 茲に長野縣聯合消防同盟
會々則第三條に依り金壹封を贈り恭しく弔意を表す

大正十五年四月二十二日

長野縣聯合消防同盟會總裁

從四位勳三等 梅谷 光貞

弔詞

鹽崎消防組 故消防手 中嶋今朝五郎君

君は大正九年四月二十一日鹽崎消防組員に就職以來獻
身の精神を根底とし義勇奉公の發露を職司として多年消
防の爲め盡瘁せられつゝありしが本月二十日日本郡共和村
小松原に於て大火災勃發するや迅速機敏現場に馳付け猛
火を侵し勇戰奮闘中職務の爲め負傷せしを以て糧食運搬
用自動車にて歸宅收容の途次不幸にして列車と衝突遂に
殉職するに至れり 今や溘焉として幽明境を異にし再び
君が勇姿に接し勇敢なる活動を期待する事能はず誠に痛
悼失望の至りに堪へざる所なり 然りと雖も義勇公に報
ずるは人生最大の義務なり蓋し義勇公に奉ずるは生を捨
て義を取るより大なるはなし君は生を捨て義勇奉公職司
を完うせらる其の死や實に壯烈にして萬衆の儀表たるべ
し嗚呼悲哉君の壯烈なる葬儀に列し感慨無量敬虔の念禁
ずる能はず

大正十五年四月二十二日

更級消防同盟會長

警部勳七等功七級 岡田 長左衛門

自由詩 火の戀

火！お前はなぜ人の家を山をいや尊とい人命までも取るのだ
 それを聞かないでくれ 人間よ
 癪にさわるからだ！ 人間よ お前らは俺を見そこなつて居る 俺には戀も 情けもないとあざけり 侮つてゐる だが俺には戀人があるのだ
 何處？ 誰れだ？
 水だ！ 俺には水と云ふ 美しい戀人がある
 彼女と俺とは楽しく天國で暮して居たのだ
 そこえお前らの神が天國の神へ願ひに來た人間と云ふ奴が 地球といふ所へ理想的の文明を 建設したいといつて援けを求めに來たのだ そこで俺と水とが來なければならなかつた、そしたら 俺と彼女とは別々に離されて 仇の様な事をして助けねばならなかつた 人間はそれを知らぬ
 うらうん
 そして俺に戀人がないといふのだ 俺れ……俺れは……俺れは……
 いやよくわかつた よく人間に傳へてやらう人間よ

俺はお前より偉いのだ そしてお前を自由にすることが出来るのだ
 俺をあなごる奴……人間らしくない人間を徹底的に滅さしてやるのだ……俺に彼女のあることを見せてやるのだ
 俺が怒る時 彼女は俺をなだめに來る そしてあの柔軟かい手で俺をなだめてくれるのだそしたら俺は靜まつてやる
 彼女が俺をなだめてくれないならば 俺は此の人間界を 目茶々々につぶしてしまふのだ
 人間よ……わかつたか……俺には水と云ふ戀人があ
 るのだ……だからお前に寛大であり得るのだ。

思ひ出五首

岡澤素一郎

忘るな四月二十日のあの火災
 此風で燃えるも知らず長地村
 大火事を聞くは辰野の汽車の中
 牟禮まで焼けた手紙が吹いて行き
 有難や同情金が五萬圓

共和村大火災を詠みて

埴科郡寺尾村 宮林忠 二

- 單衣着て畑に行きし其まゝに 着換へも持たず家焼きにけり
- 南より一時の間に一村を 焔にしたり何とせむはや
- 握飯負ひて走るに自轉車の 走り遅きをもどかしきかな
- 燃ひせまる火の子拂ひて此家を 守りしならむ焼す残れる
- 飛火して河の向ふの山燃ゆと きけば恐ろし風の強きは
- やゝ高き處は吹かれ焼け灰も 綺麗になつて清められしが
- 螢火も余せるからに百余戸の 家の跡かたなくなりけり
- 住み古し家惜しかりし一心に 護りて居るよ燃へさかる家を
- 南組の叔母の家居も焼けてなし 昨夜たづねて會ひし叔母の顔

○燒跡の灰かきわけて一心に 物さがすらし此家の人は

消防常識

一秒時風速	名稱	摘要
一 〇——一米四	靜穩	煙直上ス
二 一、五——三、四	軟風	風アルコトヲ感ズ
三 三、五——五、九	和風	樹葉ヲ動カス
四 六、〇——九、九	疾風	樹枝ヲ動カス
五 一〇、〇——一四、九	強風	樹ノ大枝ヲ動カス
六 一五、〇——二八、九	烈風	樹ノ大幹ヲ動カス
七 二七、〇——	颱風	木ヲ拔キ枝ヲ折ル

◎簡単な急救法
 ◎火傷の手當
 椿油 ワセリン オリーブ油等油類にて手早く良く塗ると痛みが早く取れます又 馬鈴薯を卸し、うどん粉と練合せこれを貼ると良い。
 ◎湯傷の手當
 卵の白味又はソーダ石鹼を塗ると良ろしい。
 ◎全國に比較し本縣の順位 (昭和二年調)

火災度數 一四位(二位北海道)
公設消防組數 一位
同上組員數 四位

◎火災時の注意

- (イ)火災が出たら小火でも匿すな匿すと大きくなる
- (ロ)火災を出し又は火災を見つけたら室外に出て大聲で附近の人に知らせて消火に協力を頼め
- (ハ)聲が出ない時は金だらいでも馬欠でも叩け
- (ニ)夜間は各戸で馬欠に水を汲み万一の場合に必ず備へよ
- (ホ)近所の火事には消火器でも馬欠でも持つて駆けつけよ
- (ヘ)警察署か駐在所か派出所かへ直ちに知らせることを忘るな
- (ト)村落では火の見梯子に登つて鐘を叩け
- (チ)消防組員や唧筒の通行に便宜を與へ妨害にならぬ様注意せよ
- (リ)老人子供病人不具者は二階へ寝かすな
- (ヌ)老人子供婦人不具者は早く風上に避難させよ
- (ル)煙に巻かれた時はしやがめ匂ふて壁に傳つて逃げよ
- (ヲ)手拭を水に浸して鼻口を覆へば煙の窒息を妨げる
- (ワ)二階から降りる時は蒲團を巻いて抱いて飛ぶか麻紐

又は帯を結び合はせ一端を柱に縛りつけて滑り落ちよ
(カ)着物に火がついたら轉つてもみ消せ 毛布か蒲團に巻いてもみ消せば尙適當である立つた儘消すのは危険だ

横綱 孝行と火の用心は灰にならぬ前
大關 亂れる家庭は火も乱れ
關脇 ねる前に必ず火元を一廻り
小結 火の用心緩み勝ちだよネジを巻け
前頭 火の用心ピラは壁より胸に貼れ
同 ポンプ百より用心一つ
同 油断からこそ火事さわぎ

前頭 人は眠れど火は眠らぬ
同 注意の網は火も漏れず
同 火元七代市民の恨
同 命を繋ぐ火又人を殺す
同 火の用心は細心にせよ
同 用心に用心をして火の用心
年寄 焔が上れば國は下り坂

蒙御免 防火標語番附

行司 一筆啓上火の用心
行司 火事は最初の五分間

勸進元

小松原火災記念誌
刊行會

横綱 線香の火から萬戸灰
大關 身のまわりより火のまわり
關脇 ねる時出る時火の用心
小結 火の氣があれば見る氣になれ
前頭 國のためお互のため火の用心
同 油断の吸殻立つ焔
同 生兵法は大火の元

年寄 罪も火も涙で消えぬ
前頭 一人の不徳で萬人の嘆き
同 狂人に刀小供にマッチ
同 信用の落ちたは火の元粗忽より
同 火は人の良心まで焼く
同 氣をつけねば火もつく
同 安全第一火の用心

◎燒失戸數一〇〇戸以上火災調

(自大正元年
至昭和三年)

期	間	郡市町村名	場	所	燒失戸數	燒失面積	損害見積額
大正二年	三月二十日	西筑摩郡	福嶋町	字 向城	一〇六 ^戸	三、〇一〇	二〇〇、〇〇〇 ^円
大正五年	五月一日	上高井郡	保科村	字在家、外山、尻欠高岡	一三七	四、二〇〇	三五〇、〇〇〇
同	年五月十日	上伊那郡	中箕輪村	字 松嶋	一〇七	三、六〇三	七五七、一五三
大正八年	六月廿一日	同 郡	伊那町	伊那町	一四四	二、七七五	三九〇、七四四
大正八年	十月十五日	下伊那郡	飯田町	愛宕町、扇町、知久町、東町、通町、追手町、主税町	三〇四	六、〇八二	一、六五七、五三〇
大正十一年	一月廿七日	同 郡	和田村	字 本	一三〇	五、八八〇	三四四、九〇四
大正十五年	四月二十日	更級郡	共和村	字 小松原	一四九	六、八七二	一、〇七三、七三八
昭和二年	五月十二日	西筑摩郡	福嶋町	字山原、上町、向城	五三六	一六、〇八〇	三、五〇〇、〇〇〇

昭和三年中該當ナシ

◎燒失戸數二〇戸以上一〇〇戸未満火災調

(自大正元年
至昭和三年)

時	期	郡市町村名	場	所	燒失戸數	燒失面積	損害見積額
大正二年	五月三十日	下水内郡	永田村	字 南永江	三五 ^戸	九二四 ^坪	三五、九六六 ^円

大正二年	十一月一日	下伊那郡	且開村	字 新野	八〇	二、五〇〇	一五〇、〇〇〇
大正三年	三月十二日	南安曇郡	穂高町	字 町	四	七七四	七六、九九四
大正四年	五月三十日	東筑摩郡	芳川村	字村井區上町	二七	一、三五〇	一〇八、〇〇〇
大正六年	五月廿七日	南佐久郡	前山村	字前山區平垣	二七	二、〇五〇	一三三、五〇〇
大正七年	三月廿一日	西筑摩郡	日義村	字 原野	四	二、〇〇〇	八〇、〇〇〇
大正七年	六月九日	同 郡	橋川村	字 贅川下町	三	一、二〇〇	七五、〇〇〇
大正八年	十月一日	下伊那郡	和田村	字 新	三	二、四九一	三三三、二二三
大正九年	五月廿一日	南安曇郡	穂高町	字 町	三	四四	五一、一五〇
大正十年	四月五日	南佐久郡	穂積村	字 高岩火原	六	一、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇
大正十一年	五月四日	下伊那郡	飯田町	字 櫻町	五〇	七一〇	二二五、〇六七
大正十一年	十月廿八日	西筑摩郡	福嶋町	字 山平	三	一、〇一〇	九〇、〇〇〇
大正十三年	四月廿五日	上伊那郡	川嶋村	字 上嶋	五	二、五〇〇	一一〇、〇〇〇
大正十四年	四月十八日	南佐久郡	内山村	字 大	二	四三	三三、〇〇〇
大正十五年	七月八日	小縣郡	神川村	字 大屋	二	一、〇〇〇	一一〇、〇〇〇
昭和三年	八月二十日	上水内郡	信濃尻村	字 野尻	元	一三六、一〇三	七六、七四三

第三章 新聞報導編

信濃毎日新聞第一報

(大正十五年四月二十一日夕刊所載)

共和村の大火

同村火の海と化し

今なほ盛んに燃ゆ

二十日午後三時頃更級郡共和村大字小松原段之原松本材木店より出火し折柄の烈風に煽られて同村七十餘戸は見る／＼火焰に包まれ盛んに燃へつゝあり(午後三時二十分)

悲惨なる光景

共和村の大火 (續報)

(篠之井電話夕刊續報) 二十日午後三時頃更級郡共和村字小松原(夕刊大字小松原段之原とせるは單に字小松原の誤)の南端松本材木店より出火する紅蓮の炎は折柄南の烈風に煽られ僅かに二十分足らずで全部落火の海となり同四時には全く焦土と化して了つたが遂に中部南部の七八軒と厩口を残す他二百四十餘戸を全焼して午後四時漸く火勢は衰へた 出火と共に附近數ヶ村より消防隊が續々駆つけたが砂塵を卷く烈風には手のつけ様もなく拱手して居るに過ぎず罹災者も又一物をも持出すこと能はず殆ど着のみ着のまゝで悲惨を極めて居る 因に延焼を免かれたる者については目下取調べ中であるが現在迄に判明したる分は 馬場林治 飯田儀左衛門 清水民右衛門 松坂七藏 野口高之助 飯田喜作 飯田泰三の諸氏その他同村寺院天照寺で同村氏神布施御厨神社は烏有に歸し又小松原銀行は取潰された。

信濃毎日新聞(第二報)

(大正十五年四月二十一日所載)

火勢愈々猛烈に遂に

二百數十戸を全焼

折柄の烈風に罹災者は着のみ着儘で

五時半に至り

全く鎮火す

八百五十棟を焼失す

各方面の目覺しい活動に

救護策は完備した

(篠之井電話) 出火と同時に附近村落遠くは屋代稻荷山松代等から全部の消防約百組以上駆つけ鎮火に努めたる爲め漸く午後五時半迄に全く鎮火したがこれより先出火ときくや同村婦人會青年會村農會並に各農家組合員全部總出で救護に努める一方長野赤十字社支部へ急報して救護班の來援を求めた結果醫師十數名看護婦三十名程午後四時三十分頃到着した 尙共和村小學校へは急遽電燈が取付するなどして救護に万遺憾なきを期した かくして罹災者は共和村小學校並に豫備として光林寺天照寺などへ收容し一方篠之井町彌生會社の自動車により同村岡田區より村民各自二升づゝ寄附せる米を運搬し共和村役場其他數ヶ所に於て炊出しをなし罹災者一同に分配するなど目覺しい活動振であつた損害目下取調べ中であるが罹災者は約千人位棟數八百五十棟である尙出火と同時に駆つけた更級郡中津村西部消防組千野勇は頭部に裂傷を負ひ其他重輕傷者多數ある見込みなるが目下取調べ中尙火災の爲め飛火したる火の粉で同村厩口地籍山林を約十坪程

を焼失したが大事に至らず消止めた。

火元より隣家が

先に焼失した

あの風ですからと

隣家の妻女語る

火元たる松本和市方の隣家某家妻女は次の如く語る何しろあの風のことでしたから火事と云ふ間もなく家の方へ燃へ移り火元より私の方が先に燃へてしまつた譯です、ですから何も荷物を取出す暇などはありませんでした。身体一つの避難が漸くでしたと顔を曇らせて居た。

火事の續報三つ

註(一つは野田大火一つは福井の大火なり)

共和村の大火で二名焼死

重輕傷者は尙不明

(篠之井電話) 別項共和村大火で同村庄田源之助(五二)は出火と聴くや居宅内に荷物取出しに入りたる處火廻りが案外早かつた爲め煙に包まれて窒息死亡した。尙小井土某の十七になる娘は逃げ場を失ひ焼死した他多數重輕傷者ある見込みにて目下取調べ中なるも詳細は尙不明。

四月二十二日續報

ただ見る死の如き焼土

雨の一夜明けて

餘燼未だ消へず

惨たる共和村

佛壇の前で猛火に包まれた

ふじ婆さんの焼死

(A特派記者)

餘燼を踏んで焼死者の一人である、瀧澤みか(五九)さんの家を訪れる。みかさんは甥に當る瀧澤信衛(三〇)の家で厄介になつて居た者で當時姉のふじ(六一)と小松原字中組の家に居た處あの魔火に包まれ遂に悲業の死をとげたのである。二記者の訪れた時は仮埋葬に附した後で焼跡には隣家の桶職木戸寅治夫婦が居た寅治さんは語る「火元と、此處とは數町も離れて居るのですがあの烈風なので僅か十分も経たぬ内に火に包まれてしまひましたから荷物を出すどころかやつと体をもつて免れたわけでふじさんも私達と一緒に逃げ出したのですが生憎火の廻つて居る方へ飛び出したのでとうとう煙に巻かれて仕舞つたのですが不思議なことに死んで居た場所が丁度私共佛壇の前でした。

一瞬間の出来事瀧次翁さんの嘆き

罹災者の一人である瀧澤鶴治(五五)さんは其日同郡丹波嶋の親戚へ客に招かれて行つて居た「共和村で火事だ」

と云ふ報を知つて息せき切つて駈つけた時は自宅は既に燃へ落ちてしまつた後でどうすることも出来ず漸く焼跡の庭先で七人の家族の無事の姿を見て安心したと云ふ留守をして居た息子さんの忠義君(二七)の談に「丁度三時ちよつと前でした! 火事だ! と云ふ聲をきいて數丁

離れて居た火元に駈けつけ消火に盡力しようと思ふともう火が飛んで自分の家が危いのですそれで飛ぶ様に引き返して來ましたが其時はもう家の附近は一面の火でどうすることも出来ませんでした全く一瞬間でした」と火の廻りの早かつたことに驚きの目を見張つて居た。

奇蹟的に免れた

火元近くの松坂家

火元から僅か四五間離れて居る奇蹟的に類焼を免れた家があるそれは松坂七藏(七一)の家で主家は完全であるし土藏の如きも僅かに軒を焼かれただけで實際不思議だ當の七藏氏は「全く自分でどうして助かつたか判りません何でも篠之井のガソリン唧筒が私の家で火を喰ひ止め様と必死に水を注いだのですが其お蔭でしょうその代り家の中においた荷物は安全でしたが持出した荷物はみんな焼いて仕舞いました」

戰場のよう

学校の忙しさ

何事も宿命だと嘆く老婆

(B特派員記)

數町に互る焼跡を巡つて小松原區の南端なる共和村小學校を訪れる校門を入ると其處には罹災者の家庭に贈るバケツや茶椀等を始め澤山の米俵や小麦粉袋が積み上げられて全く戰場の様な光景を呈して居る教室の中には十名あまりの女の先生が頻りに握飯をこしらへて居る。罹災者慰問の事情を告げると一女教員が飯粒のついた手を振り「昨夜は十數名の女子供や老人やが來て居ましたが今朝はもう誰も出て居つて只今は二人残つて居るばかりです」と飯粒のついた手を振り「救護所にあてゝある裁縫室へ案内して呉れる此處には年の頃八十に近いと思はれる婆さんと四十才前後の婦人と二人がポツ然と物思ひに沈んで居た婆さんに聲をかけるると殆んど潰れかかつた様な目をつとめて大きく見開きながら「いえどうもこれも運命だよおら此年になる迄別に何の不幸もなく來たのさ明日死ぬかと云ふ今日になつてこんな目にあつてなそれによいが自宅の野郎は呑駈くれでそれに子供だつて未だ録々役にも立たぬのだからどうして生きていつたらよい事やら」と涙を流して横にうつ伏してしまふ此婆さんの家は火元の家から四五間風下で火事だと云ふ間にもうすぐ隣の家が濛々火に包まれて居たので逃げ出

すのにやつとだつたと云ふ婆さんの名はおせき(七八)と云ひ息子の久保田宅意さんは數年前に愛妻を失つてからは余り裕福でない家庭に幼な子供四人も抱へて居た爲め遂に自暴氣味に陥り酒ばかりに浸つて居たのださうである家庭は婆さんと併せて六人更に婆さんは「昨夜はこうしてチョットも眠れなかつたよ家の者らは何處へ行つて居るのかなあ煙草が飲みたいんだが………おれも長生した爲めこんなつらい目に逢つてのう」と生憎煙草の持合せない記者は居たたまらず其場をつくるつて退席する。

これ迄の運命さ

焼死した清作老人の

息子さん語る

煙に巻かれて逃場を失ひ遂無慘な死を遂げたと云ふ庄田清作さんの焼跡を訪れる相續人の嘉平(二八)さんが今年高等科二年になつた弟と二人で崩れ積つた瓦をほじくり金物を拾ひ出し乍ら語る「ハアおやちは五十四歳です實は火事だと云ふ聲をきくとすぐ如何に火元は風上だとは云へこんな離れて居るんですから自分の家などは大丈夫と思ひましておやちと私と二人共火元へ駈けつけて消火に努めたんです處が其うち他人に云はれてホット風下を見ますともう自宅の隣の家へ火がついて居たので急い

で自宅へ戻つて来て見ますともう火が一パイでとても家の附近へなど寄つけれなかつたのです。濡れた布團を頭からかぶつて火の中を潜りぬけて来て見ますと、丁度母(五三)が佛壇の位牌をかき集めて持出す處でした。私はもう其時夢中で早く逃ろ!と云つて救ひ出したが後からついて来た父は其後どうしたのか東へ逃ればよいのに西へ逃げた爲め一軒おいて隣の家の前で倒れたまゝ死んで居たのです。ヤードも仕方がありません。これ迄の運命と思つて諦めるより他仕方がありません」

信濃毎日新聞 (四月二十二日續報)

列車と衝突し

救援車粉砕す

炊出運搬自動車舊篠之井踏切で

即死一名重傷者六名を出す

(篠之井電話) 廿日午後十時二十分頃更級郡鹽崎村役場から共和村小松原罹災者に送る炊出運搬中の稻荷山驛前丸通運送店所有の貨物自動車運轉手小沼高則(二四)助手宮原晴男(三一)が第二回の運搬を終り歸途鹽崎村中の郷組消防手中島今朝五郎(二五)清水寅雄(二四)宮下義雄(二二)奥村忠治(二七)を乗せ全速力で國道を疾走し來り

舊篠之井地籍の信越線踏切を横断せんとする利那屋代驛發午後十時十二分下り第百三十三號旅客列車が轟進し來りまた、く間もなく貨物自動車の脇腹に衝突し車体は滅茶(一)に粉砕され運轉手小沼高則助手宮原晴雄は重傷を負ひ消防手中嶋今朝五郎は撥ね飛ばされ頭部を粉砕されて即死し清水寅雄は頭部に宮下義雄も共に重傷を負ひ奥村忠治だけは僅かな打撲傷を受けた一方機關車にも多少の損害はあつた模様であるが五分間停車して現場を發車した負傷者は直に傍の開力堂菓子店山本孫次郎方に收容し同町小宮山嶋田醫師を迎へて手當を加へ夜の明くるを待つて篠之井町嶋田病院に入院せしめた。

責任は無い

勤務後の惨事

踏切番の辯明

同踏切番所保線所屬番人は語る「こゝは午前六時から午後九時までの勤務で夜は八時五十九分の屋代驛發列車が過ぎてしまへば私の責任はなくなつてしまふのです。から惨事當時の私は既に今日の責任は果したので九時半頃寝に就きました。處が百三十三列車が來てあの惨事で實に驚きました。何と云はれても私には責任はありません」

罹災者收容

バラックを建て

共和村の急施村會で

善後策を決議

(篠之井電話) 焼け跡では附近の田圃から寄せ集めて來た藁屑で露凌ぎの小屋を建てたり天幕を張つて一時を凌いで居るが共和村では二十一日午前十時急施村會を開き善後策につき協議した結果取敢ずバラックを建て罹災者を收容する事となり目下役場員は手分し收容を要する家族の調査を行つて居る右に付大澤鐵左右氏は語る「取敢ず建てるバラックは三四十戸の豫定で只今書記が材木屋へ交渉に行つて居ます小松原區は主として養蠶本位とする民家が多いので蠶具一切合切焼いたのですから今年は何うすればよいか困るんですと云ふので少しでも何かして蠶を飼はなくては家計が立ちません」

大火の餘聞

火元の姪が退學を申出づ

更級郡共和村小松原大火の火元である松本和一の妻某は當日味噌煮で火を焚て居たのであるが同人の姪に當る篠之井女學校四年生長田某(一七)は松本方からの出火と聞くや非常に驚き申譯ないと二十一日午前遂に學校當局へ退學を申出でて來たが當局でもそれまでには及ばないと慰撫に努めて居る。

火の子が高岡村へ飛ぶ

二十日午後の更級小松原の大火で烈風に煽られた黒煙は雲の様になつて長野市の上空を通つて北の空へ流れたが燃えさしが火災現場から五里も離れた上水内郡高岡村附近へ盛に落下するので同村受持巡査は長野署へどこかに火事があるかと問ひ合はして來た程である。

運動會を休んで灰かたつけ

篠之井農學校では二十二日春季運動會を開催の豫定であつたが生徒の發意に依り二十一日職員會議を開いて協議した結果二十二日の運動會を中止して早朝より全校生徒二百余名共和村小松原區の罹災地に赴き焼跡の灰片付けを手傳ふ事となつた。

篠之井高女生が襦袢を縫つて

篠之井女學校では直に食パン數千個を用意し運搬罹災民一同に分配し尙二十一日は授業を休みフランネル襦袢を作製して罹災者に分配する事となつた。

一萬圓同情金募集の計畫

更級郡町村長起つ

(篠之井電話) 大火に際し更級郡町村長は二十二日郡衙樓上に緊急協議會を開催し義捐金一萬圓寄附募集の具体方法を講すべく尙更級小學校長會は二十一日午後より郡衙樓上に緊急參會を求め専ら兒童を中心とする救濟策を講ずる筈。

社告

僅か一時間足らずで百五十余戸の全部落が焦土と化した更級郡共和村小松原大火の跡は實に阿鼻叫喚の慘を極めてゐます着のみ着のままで漸くに難を免かれた千餘戸の罹災者は親子相擁して殆んど途方に暮れてゐる始末です本社は茲に大方の同情を仰ぎ悲惨な罹災者を慰藉すべく左記要項に依り金品の寄附を募ります。

- 一、一口一圓以上の事
- 一、物品にて寄贈の場合に限り共和村役場へ直送の事

- 一、募集期日四月卅日限り
- 一、寄贈者氏名は本紙へ掲載し領收證に代ふ

信濃毎日新聞社

共和村火災續報 四月二十二日

小學校は二日間臨時休業

教科書の補充に困り

取敢ず謄寫版刷で

共和村小學校は廿一廿二兩日臨時休業して二十三日から授業を開始する豫定であるが何せ罹災家庭の児童は教科書等は一切焼いてしまつたのでこれが補充に付き學校當局も研究して居る兎に角謄寫版刷を配布して一時授業を続け様と云つて居るが併し家が焼けてしまつた児童は

學校へ来て落付いて勉強するかどうかが一番案じられると同校の一教師は語つて居た。

縣では救助金

郡では總動員で炊出し

共和村小松原大火に付き縣では罹災救助基金から支出して救助を爲す事に決定し大いに救助計畫を進めて居るが右に付き二十一日午前十一時罹災状況を視察して歸廳した萬地方課長はいふ「差し當り縣は更級郡長に命じて郡役所總動員で篠之井料藝組合にたのみ炊出しに奔走應急救助方法を講じて居る罹災救助は食糧衣類就業費用品小屋掛料等であるが之の救助金額は調査後でなければ判然しない村では今朝村會を開いて二千圓を決議し中津村の木工學校に頼んで小屋掛けをしホンの雨露を凌ぎ得る程度のもので作り罹災者を救助する方策をたて居た。

負傷者善後策

鹽崎村消防員の奇禍につき同組合では緊急會を開いて負傷者の善後處置に關して協議中である。

共和村大火の

四月二十三日夕刊記事

罹災者調査成る

更級郡役所と篠之井警察署

(屋代電話)更級郡共和村小松原區の大火損害高は其後

郡役所並に警察署に於て鋭意調査中であつたが右完了したる處によると。

焼失戸數 百五十六戸 此總棟數四百九十九棟
 内居室 百四十九棟 四千五百五十四坪八合
 土藏 六十八棟 七百二十七坪七合五勺
 納屋 八十一棟 七百十三坪五合
 物置 九十六棟 七百五十四坪三合
 便所 百〇六棟 百二十一坪六合五勺
 建物總坪數 六千八百七十一坪三合
 罹災家族數 九百四十五人

である猶總損害額は篠之井警察署の調査に依ると百七萬七千七百二十八圓で

内不動産 損害額は五十三萬七千九百八十八圓
 動産損害額 五十四萬六百三十圓
 通貨損害高 三千七百六十七圓八十錢
 罹災中 十才未満 二百六十一人
 七十才以上 三十五人

十二歳以上七十歳以下六百四十九人である猶罹災就學児童は 百四十七人

之を内譯すれば 尋常一年生 二十四人
 二年生 二十二
 三年生 十人

四年生 三十一人
 五年生 十六人
 六年生 十六人
 高一年生 一五人
 高二年生 一三人

死傷者は踏切衝突者の分迄合せて死者三人重傷者二人輕傷者五十人である猶郡役所に於ては大火救護費として一萬千五百七十八圓九十三錢を支出し食費被服費其他に充當した。

蠶種の焼失に

應急對策を決す

蠶種の補給と稚蠶飼育の

方針漸く纏まる

(屋代電話)大火の難にあつた共和村小松原區は更級郡唯一の養蠶業地であるが本年春蠶掃立枚數は約二千枚以上を數へられ内約一千枚は郡是蠶糸會社に保管してある爲焼失を免れたが残り一千枚は全く灰燼に歸してしまつたので同村農會では二十一日午後農會各區長會を開催し大澤村長寺澤農會長鎌田郡是蠶糸常務等出席して各種養蠶上の救濟策に付き打合せするところあつたが如何に掃立を急ぐも例年の掃立までには全部完了の見込が立たないので掃立は例年より數日遅れ殊に二日目から稚蠶共同

飼育する事となり屋外條桑育に依り急場を凌ぐ方針を立て約一千枚の蠶種は郡是會社より供給を受け之れが稚蠶飼育上に關しては差當り更級郡是會社を當て桑と養蠶人夫は共和村農會より供給する事に決した猶之が寄宿舎として郡是蠶糸會社の一部を提供し本年蠶兒飼育は萬遺漏なきを期する筈であると猶郡是蠶糸會社鎌田常務は自家の蠶具五百枚分貸與方を農會に申出た。

埴科各町村

救助策 各種団体活動

(屋代電話) 共和村大火に際し各町村から集まる同情は非常なもので埴科郡各町村會は自發的に百圓乃至二百圓宛を支出し罹災民救助に送りつゝあり猶同郡佛教護國團では二十五日午後一時理事會を開催し義捐金募集に際し協議を遂ぐる埴科婦人會幹部では慰問品並に義捐金募集に活動中であるが二十七日取纏め現場に發送の埴科郡村商工會では二十六日花見運動會を中止し其の金を全部罹災者に送る事とした。

東筑摩郡でも

義捐金を募集

(松本電話) 悲惨なる更級郡共和村の大火災の罹災者見舞の爲め東筑摩郡では二十二日直に各村に通知を發し一口一圓以上の義捐金募集に取りかゝつたが締切りは三十

日まであると。

惨死消防員の

村葬舉行

他の負傷者は經過良好

(屋代電話) 夕刊所報篠之井地籍鐵道踏切で惨死した稻荷山消防組中嶋今朝五郎氏の葬儀は廿一日の村會に於て村葬を以つて二十二日午後一時より鹽崎村天用寺に於て鄭重に營むことゝなつた猶遺族に對しては直に村より扶助料三百圓を送り外に吊祭金百圓郡消防同盟會並に縣同盟會よりも應分の吊祭料を贈る事となつた因に他の負傷者は經過良好生命には憂ふる處なしと。

更級郡農會活動開始

花見會を廢し善後策協議

更級郡農會では二十一日技術員會と花見會を開催の豫定であつたが共和村の大火に依り會議だけに止め午後二時より開催大火善後策の打合せをなし結果早速太細百束種子扱け依農具其他を各町村農會の手を経て寄附を仰き順次罹災者に配布する事を可決し直に活動を開始した。

共和村大火義捐金募集

長野市社會課

長野市では更級郡共和村の大火にあたり今回の罹災者に對し義捐の爲金品を募集する事になつた之は衣類家具

食料品金錢等種類の何たるを問はず無制限であるが希望者は來る二十九日まで同市社會課係宛申込むべしと。

好物の酒をやめても

四月二十四日(記事)

小松原大火に

貧者の一燈

床しい須坂の便り

廿二日の夕暮印半纏を身に五十歳前後の見すほらしい男が本社須坂支局を訪れた懐中からもじ〜と古新聞に包んだ物を放り出して「貧乏人のわずかばかりの志しですが何分御便宜を」と云ひつゝ立ちさつた中には「金五圓」「小松原大火見舞金」と書いてあつた此の男は須坂町裏上町に住んで居る上野藤作(五八)さんと云ふもので現在須坂町役場の掃除入夫を勤める身柄と判明した藤作さんは「私は今日から八年前須坂へ流れて來たものだが一日も酒を呑まねば生きて居られない程酒に苦勞した人の嫌やがる掃除入夫を勉むるのも夕食の時にかたむける一杯の酒を飲みたいばかりである酒に絶たれたらもう死だ然し今度と云ふ今度は酒をきつぱり止めても火災で苦しんで居る小松原の人に送りたい」と語つた藤作さんは今から約三十年程前に生れ故郷下水内の富倉から更に山深い越後境の長澤部落で五十戸焼失した火災の物凄かつた有様を語りながら人事では無いと顔を曇らせて居た。

降る様な同情

災厄の共和村へ

(屋代電話) 共和村の大火に各方面からの同情は頻々と集まり埴科郡埴生村小嶋純水館製糸では二十四日工男女合して五百余名は治田公園で花見運動會を催すべく女工達は踊と唄を盛に習つて居たが突然之を中止し其の金を以つて罹災者を慰問する事となつた。

戸倉村農會では白米二十俵を罹災者に寄附する事を更級郡農會に申出した尙更級郡役所では廳員全部で百圓の金を送り二十三日小林郡長は同所を慰問に趣いた。

埴科郡雨宮縣村及農會青年會軍人分會婦人會處女會では現金二百二十圓白米三石大繩四十二束を罹災者に配布した。

同情金七千五百圓

村役場の忙しさ

二十三日は長野市の花岡醫師が負傷者の手當に活動し眞嶋村常盤婦人會では會員六名出張罹災者の慰問に當り篠之井青年會では小日向會長外二十人安茂里小市青年會では五十人川中嶋村八百人其他附近の消防隊出動し協力して現場の跡片付けに力を注いで居る其の結果二十三日午後三時頃までには大半の跡片付けを濟ませ一齊にバラックの建築に着手する筈又二十三日迄に共和村役場で

受付けた同情金は約七千五百余圓で物品では農具家具寝具食料品其他約一萬五千余點の多きに上つた。

農會から出張

更級郡共和村の大火に際し本縣農會では金百圓を贈る事となり二十四日三木幹事共和村農會に出張した。

災後の共和村

復興の陣立全く成る

中津村少年團が

情けの風呂仕度

更級郡共和村大火後始末に付き同村では農會長寺澤雅二郎外二名を復興委員長に推薦し尙農村に於ける理想的住宅建築及道路新設等に關する設計は縣農會三木幹事に委嘱し建築材料及其他物品の配給は村會に於て配給規則を作り罹災者救済に萬遺漏なきを期する一方郡醫師會長堀仁一郎氏は罹災者の衛生状態を視察し善後策を講し今月の末には腸チブスの豫防注射をなし五月末頃には赤痢豫防注射を行ひ旁々向ふ一ヶ年間位は罹災者に對し藥價半減の取扱を爲すに決したこゝに麗はしい話として同郡中津村少年團談友會と名乗る廿五歳を年頭にする少年達は擧つて二十五日午後村の手押ポンプを借用に及び薪携帶で風呂桶十箇並に天幕十枚を用意して現場に到り罹災者一同の入浴に供した。

縦横無盡欄

二十六日朝金三圓に手紙を添えて共和村小松原罹災者にと申出た奇篤の娼妓がある長野鶴賀新地新湯樓内トミ子事百崎しげ(二四)と云ふが本人で「(前略)今度の災難にあわれな共和村小松原の御人様は誠にお氣の毒と思ひますので澤山の事は出来ませんが僅か三圓の御金ですけれども私の心から災難にあわれた人様へ差上げたいと思ひますから(後略原文)と云つたしほらしい文面であり長野署では直ちに本社に廻送して來た。

燒跡に

四月二十八日記事

文化農村建設

復興を急ぐ共和村の大計劃

更級郡共和村の大火災の復興に當り同當局では此際模範的文化農村建設の大計劃を立て、目下救済をかねあらゆる復興を凡て文化的のものにせしめんとする意嚮を有し専ら關係方面識者の意見を求めつゝあるが二十七日にも本縣農會より新井技師宮崎技師尾崎技師出張火災の現場模様を調査する處あつたが調査し終つて歸國せる三氏は交々も語る「罹災者は目下當面の復興を競争的に急いで居るので文化農村建設に關する大計劃などは云つて歩いてとて殺氣だつて居るのでそうした計劃を纏める事は困難である殊に同區は個人思想觀念の強い所だと云ふ事

達し燃へあがつたものであると云はれて居る。

共和村の失火罪

大正十五年五月四日(信濃毎日新聞所載)

四百九十九棟の人家を灰燼して百餘萬圓の損害を來した最近の更級郡共和村宇小松原大火災の火元同村義一郎妻松本やすの(二六)は失火罪として長野區裁判所檢事局で取調べ中であつたが三日略式命令で罰金百五拾圓に處された。

烈風中の火事

時事新報所載(大正十五年四月二十一日)

長野縣

共和村大火

百戸を燒き尙鎮火せず

長野縣更級郡共和村宇小松原松本和市方より二十日午後二時十分頃出火、折柄の南西の烈風に煽られて燃擴がり、長野市、更級、埴科一市兩郡等の附近消防手總動員で駆付けたが四時半迄に百餘戸を甜め盡し益々燃擴がり何時鎮火するか豫想つかず、死傷者多數ある見込みである原因は和市の孫金治(四)が籠の火を弄り、それが厩舎に燃移つて大事に至つたものであるが、長野警察部より

あるから尙更むづかしい事と思はれるが此の際第一に行はねばならないのは道路整理で次が永久的建物を可成農家としての理想的のものとせしめ漸次復興につれ公會堂をも建設する事である罹災者にバラック建設から農業者の共同實施を機會に共同經營を普及せしめる事は肝要の事である兎に角文化農村建設に關する研究並に意見發表の想談會は後に開かれる事と思ふが此の際小松原區を以て文化農村とせしめる事は可能性に富んだ良い計劃であると思ふ』

四十日燃へ續けた

(大正十五年六月四日朝刊所載)

小松原の火事

穀庫跡でぶすくと

とうとう表面へ出て大騒ぎ

四月二十日未曾有の大火に襲はれて灰燼に歸した小松原區は着々復興しつゝある矢先一日夜こと同村野口文廳氏宅燒跡から火の手が上がるのでスワ一大事と消防隊出動し消し止めたが此場所野口氏方の穀庫跡にあたり灰片付の際燃焼中の穀類を完全に消しとめず互かけや木材等の焼け残りと共に積み重ねたので余燼は漸次燃焼物を燒き盡し遂に四十日を経た一日夜に至つて俄然表面に

は巡查教習所生徒三十余名、又長野赤十字支社よりは救護員を夫々特派した(長野電話)

救助を要するは五十戸の見込み

萬地方課長が災害状況視察

共和村でバラックを建設

更級郡共和村の火災に就き萬地方課長は二十一日早朝災害状況を視察し小林部長大澤村長と善後策の

打合を爲し正午歸廳したが、罹災者に對しては差當り戸數割納税額を調査し救護方法を決定するが、救助を要するものは五十戸の見込みで右に對してはバラック建設費、就業資金食糧學用品等を縣の罹災救助基金より支出するに決した。尙ほ同村では二十一日朝臨時村會を開きバラック建設費二千圓を支出し中津木工學校に委託し罹災者を收容するに決し小學校は一週間臨時休校することとなつた。

火災の見舞金

長野市では共和村の火災に對し二十一日金二百圓を見舞金として贈つた。

八十一名の患者と

負傷者を收容 救護班の巡回

小松原の燒跡は二十一日も隣村各地の消防組出動燒跡片附をなして早朝より救護品を携へた見舞客で

非常に雜沓を呈した。又警察部の救護班は看護婦三名を一組として巡回救護に當り赤十字救護班も二十一日正午迄八十一名の患者及び負傷者を收容した。尙一時混亂に陥つた村内も秩序も漸次恢復し燒跡に早くも假小屋を營む者もあつた。

留置所で大喜びの金治

其復はすや／＼と眠つた

失神せる祖父と父

大火災の當の責任者松本和市(六三)長男治一郎(三一)孫金治(四ツ)は二十日午後四時小松原村が炎々たる猛火に包まれてゐる最中に所轄篠ノ井警察署に引致され、出張中の岡田署長の飯署を待つて

取調べを開始する事とし、和市と義一郎、別室の留置場に入れられたが、兩人は殆ど失神の状態で慘狀の想ひ出に戰慄してゐた。無邪氣な金治は自分の惡戯から全村が灰燼に歸したのも知らず、留置所の

夕食を父義一郎と共に終つて「お父さん家へ歸らう……」と強請み並居る署員に涙を絞らしめ岡田署長の取調べに對し和市は自分等一家の過失から引起した罪の怖ろしさに「怎麼お處刑でも恨みませぬが、唯金坊だけは救けて下さい」と係官を涙ぐませたが親子三人は一先づ取調べを終ると二十一日夕刻歸宅させた。和市一家は義一

郎の妻(二六)及び子供三人の六人暮しで相當な家作も持つて裕福の暮しをしてゐたと。

避難した夫婦子供

さめ／＼と泣く

部落は火の海

慘澹たる火災

警鐘の亂打に驚いて屋根へよぢ上つて見ると川向ふの安茂里邊りから黒煙が濛々と立ち上つてゐる近火だ自轉車を飛ばせて相生橋迄まつしぐらに馳付けたが火元は思つたより遠い様だ安茂里と見たのは烈風の爲め黒煙が二里も地を這つて來たのであつた火元は小松原である事を確め引返して丹波嶋から岸川沿ひに現場へ行く事にした狂ひ風は砂塵を捲き上げて面を向ける事も出來ないこの風にどこの馬鹿が火事を仕出かしたんだらうと云ひ乍ら現場に駈行く青年團の一隊を追ひ抜き川端へ出ると少しく穩かになつたと思つた烈風が又復

煽り出した橋の中央まで行くと風の抵抗が烈しく前へ進めない程だ川中嶋驛眞近に來ると家財道具を擔いでドーン／＼走つて來るものにあつたこれも焼け出されたのであらう四十五六歳のみすぼらしい内儀さんが跣足の六歳位の女の子と十歳位の男の手を引いて小さな風呂敷包を抱えあへぎ／＼やつて來るのにも會つたまだ現場までは

十數丁はある筈なのに地を匍つて來る煙にむせ返るやうだ、やうやく現場へ駈けつけて見ると想像しても恐ろしい今の今三時間前迄立派な部落であつた、家町は縣道を眞中に狭むで南北十數丁東西七八丁の一面は全く火の海と化し紅蓮の焔は渦を卷いて濛々たる廣い煙の中に物凄く燃上つて居る消防隊も相當來て居るであらうが、煙の爲めに何處にどうして居るのか判らないと未だ焼け落ちない彼方此方の棟や冬木立の様な樹の上に馬簾を持つて居るのが見へるだけである、けれども時々突風の流れる間にチラー／＼と蜘蛛の巢の様にポンプの水管から水の放射されて居るのが見へた、然しそれは燒石に水で何んの効果もなかつた。罹難民は山手の方から下手の火の及ばない寺院、學校、民家、田甫の中に避難したが家に居たものは火事と同時に風の烈しいので万一を慮り家財道具を持ち出したが野良仕事に出て居たものは一物も取出すことが出來ないばかりか家へ駈つけた時はもう火に浸はれて居た。役場や郡役所では炊出しをしたり罹難民をいたはりながら駈廻て居たが何しろ數百家族一千餘名が焼出されたことゝて避難所の混雜群居生活の悲惨は目もあてられない極であつた。殊にこうした雜居中にもそれ／＼家族は夫婦子供は相擁してサメ／＼と泣いて居るも

の父母の悲しみも知らずにサメ／＼と背中に或は懷に涙

る無心の子供の姿も一層憐れであつた。

そうして罹難民の悉くはうらめしそりに焼野ヶ原と化してゆく現状を眺めながら右往左往するものや、自分の家のあつたと思ふ邊りを遠くからぼんやり見て居り消防手や群衆に怒鳴つけられてわつと泣出した若い女もあつた亦中にも鐵瓶と火鉢を抱へ何處と的もなく家へ行くんだと現場の周圍を巡つて居る若者があるかと思へば六十ばかりの發狂したおばあさんが鉄を擔いで家を返せと同じ田の畦を往たり來たりして居るものもあつた。

さしもの猛火も全土を焼いて漸く下火になる處の現狀は悉く消防隊が取圍ひて居た殘火は未だバチバチとやつて居た。負傷者が續出するやら又は路上に投出された少しばかりの家財道具を見てオロ／＼泣き出す者などあつて避難所は慘憺たる場面を展開して居た (記者)

縣保安課發表詳報

△出火時日

二十日午後二時四十分

△鎮火

同日午後四時四十分

△燒失戸數

全燒百五十五戸 (半燒一戸)

△罹災人員

一千二百十五名

△重なる建物

村社布施御厨神社 小松原銀行

△損害見積

八十萬圓

△燒死者

南組 庄田清作 (五三) 中組 瀧澤みか (五九)

△行衛不明

三名

△消防手負傷

六十四名

△出動消防組

長野市 上水内郡 更級郡等四十組二千二百名

百名

新愛知附録

(大正十五年四月二十一日所載)

暴風中の火事

十數戸を燒く (第一報)

二十日午後三時二十分頃更級郡川中嶋驛の北方小松原の農家から發火し折柄の大暴風に煽られたため十數戸を舐め盡し尙盛んに延焼中である (午後三時四十分)

延焼

六十戸 (第二報)

長野縣更級郡共和村宇小松原松本和市方居宅から出した火は折柄の烈風に煽られ附近農家に延焼し同村八十五戸の内約六十戸を舐め盡し尙盛んに燃へつゝあるが午後四時頃に至り更に火は二十丁を離れて居る、川中嶋宇四ツ屋區の農家に延焼し三戸を燒き尙目下盛んに燃えて居る原因は松本方の味噌煮の不仕末からである (四時十分發報)

小松原の悲惨な罹災者

萬地方課長等の骨折で

一先づ天照寺に收容 (第三報)

更級郡共和村の大火につき二十一日早朝罹災者救助の爲め縣よりは萬地方課長、日向、戸谷兩警部補出張し小林更級郡長大澤共和村長、岡田篠ノ井警察署長等と協力し多數の罹災者を共和小學校並に天照寺本堂に收容し焚出しを行ふと共に衣服、小屋掛等につき手配を行つた更に農學校及び信濃木工學校より多數の生徒を出動せしめバラツクの建設に着手したが何分烈風中の火災のことゝて火の手は意外に早く罹災者の九割は家財道具を持出す暇なく全部焼出してしまつたことゝて目もあてられぬ慘狀を呈した。

農村には珍らしい大火

萬地方課長語る

共和村の大火につき罹災者救助の方針確立のため出張した萬地方課長は二十一日正午現場より歸縣して語つて曰く

「縣としては罹災者の財産程度を調査した上で救助方法を立てようと思つて村役場に調査を命じたが未だ何も出ず來上つて居ないので差當りバラツクと食料を充實せしめ追つて罹災者救助基金を支出する考へであるが救助を要する者は百五十五戸の内六十七戸の多數に上る見込みである兎も角農村としては縣下では初めの事なので國としても出来るだけ救つてやりたい考へである」云々

共和村の臨時村會

小松原の大火につき共和村では二十一日午前八時より臨時村會を召集し小屋費二千圓を支出し村民を出来る限り救助することを申し合せた。

長野市から見舞金

長野市では共和村の大火につき見舞金二百圓を送ることとに決定二十一日午前倉澤收入役が同村へ出張。

長野市愛婦日赤支部から見舞金

長野市愛國婦人會支部及び長野赤十字支部並に本縣社會課にては小松原の大火につきそれ／＼見舞金を送ること

とに決定目下調査中である。

長野新聞

(大正十五年四月二十日夕刊所載)

暴風徒らに荒狂ひ

小松原村殆ど全焼

焼失戸數二百六十五戸

四才の兒童が焚火を弄んで

遂に此慘事を生む

更級共和村字小松原材木商松本和市方より廿日午後三時出火し見る／＼内に火は烈風に煽られ附近の民家に燃え移り午後四時迄に五十戸の二百棟を焼拂ひ尙延焼しつゝあるが残る民家も一秒時二十四米突の風に煽られ猛火は頗る危険に類し附近消防隊は勿論篠井上水内郡消防隊は必死防火に努めつゝある人畜の死傷は多數あるらしい(午後四時)

大火原因は火元である松本和市方では孫金治(四つ)が味噌燗たきの火を持ち遊び居る内に納屋へ燃え移り同家は縣道端の小高き丘の上であり納屋に移つた火は猛烈な辰巳風に煽られ居室をたちまち焼拂ひ一方附近の民家に移り火勢物凄く長野市上空まで黒煙は風の爲に送られて旭

山が噴火したるが如く蒙々と天に沖し大火の慘狀を察するに難くない程であつた。

長野からも警官と消防隊

自動車で急行

所轄篠ノ井警察署にては共和村大火の報に接するや非番巡查の召集をして同村へ警備の爲め派遣すると共に附近消防組の出動方を督勵し長野署並に縣警察部へ應援を依頼し來ので折柄長野城山武徳殿に於て岐阜縣警察部と本縣との武術試合に出席中であつた竹下警察部長は右の報に接するや福澤署長に管内消防組の應援方を命ずる同時に見學中であつた警官講習生二十五名は戸谷保安課警部補並に教官指揮の下に自動車で同地へ急行せしめた。

救護班現場へ出動

赤十字長野支部では共和村大火の報に接するや直に角田外科醫引卒の下に看護婦三名を自動車にて急行せしめ又縣衛生課では青木巡查部長引卒の下に醫師看護婦十餘名を自動車に分乗せしめ急行した。

救護方法に就き

萬地方課長談

未だ詳報に接しないので如何なる方法に依り救済すべきかに就て具体的な方法を考へて居ないが損害が廣汎に涉つて居る様子であるから縣としては先づ應急の處置と

に金品の義損を募集中である。

死傷者八十餘名

損害見積百萬圓に近し

焼失戸數百五十五戸

共和村大火詳報

四歳の兒童が弄んだ火より大火災を起した更級郡共和村の火事に就ては昨報の如くであるが縣では廿一日早朝萬地方課長災害狀況視察をなし小林郡長大澤村長と善後策に就き協議を爲し正午歸廳したが縣としては差當り罹災救助資金を醸出し救助を要する者五十戸のバラツク建設費其他就業資金食糧品學用品の購入に當る管であるが一方共和村では二十一日臨時村會を開き二千圓を支出し應急施設としてバラツクを建設することになつたが罹災者は當分小學校に收容することになり小學校は一週間休校することになつた而して罹災狀況につき縣保安課の發表に依れば左の如くである。

出火時刻二十日午後三時四十分

鎮火同日午後五時四十分

焼失戸數全焼百五十五戸半焼一戸

二百七十六世帯

罹災人員千二百十五名

損害見積八十萬圓

して金を出して食糧品衣類並に小學校生徒の學用品の補充をなさなくてはならぬと思ふ其他の方法に就ては郡長に一任してもよいと考へて居る 云々

郷社伊勢社も炎上

罹災民は小學校に收容

後報共和村大火の報に接し遠くは上水内郡七二會戸隱消防組等外四十消防組の必死の防火にさしもの猛火も午後五時三十分鎮火した同區戸數二百七十五戸中焼失戸數二百六十五戸半焼六戸人畜の死傷者並に損害は目下取調べ中である焼失區域は東西五町南北十町に亘り役場小學校小松原銀行類焼をまぬかれたが郷社伊勢社は遂に祝融の見舞ふところとなりたるも御神休は同村消防組の盡力に依り安全に小學校に移された。

罹災者は全部小學校に收容すると共に役場では損害を被らざりし三百五十戸に對し一戸當り二升の焚き出しを命じ罹災者へ配付し焼け跡は實に慘憺なる光景を呈し目を覆ふばかりで其内をさまよふ罹災者の姿は夕暗と共に一層あはれを添へて居る。

中津實業銀行支店長瀧澤主計氏宅も全焼し天照寺は災厄を免れたが同寺敷地内にある小さな堂は焼失した。

篠ノ井の同情

篠ノ井警察署並に同町双葉組合には焚出しをすると共

出場消防組 長野市 上水内郡 埴科郡 上高井郡
四十組二千五百名

火災後詳細なる取調に依り判明せる焼死者は小松原區
庄田清作(五三)及信衛叔母瀧澤みさ(五九)で兩名共逃げ
損じ猛火中で煙に包まれて窒息し此外行衛不明者三名あ
り負傷者は同區の中央でありながら奇しき因縁で幸に焼
失しなかつた野口高之助方へ收容し赤十字社長野支部救
護班が置いて夫等の應急手當を施せるが廿日から廿一日
までに取扱つた患者数は七十餘名に及び内消防手の負傷
者六十四名に達したが更級郡川中嶋村字今里山崎茂(三
二)顔面其他に大火傷を負ひ長野赤十字病院へ廿一日入
院し加療中である。

さながら關東大震災を思はせる

附近村落は桃花満開の中を此處ばかりは殆ど眼も向け
られぬ慘憺たる焼跡で冬枯れのそれよりもいたまじき眞
黒な木立の彼方此方には昨日の慘狀を思はせる白煙が未
だ濛々と立ちのぼつて居る。

十町にもあまる小松原沿道には遠近所在より友人知己
を訪ねて集まつた老若男女が右往左往し又隣接町村の各
消防隊は悠々たるラッパの音も勇ましく活動して居り此
處修羅場裡はさながら關東大震災大火災を偲ばせるに充
分であつた此大火事場の眞中であつて不思議にも火災を

免れ共和村役場の出張所救護班の本部警察部の出張所等
に宛られて居る野口高之助氏宅を訪へば運び出した家財
道具の取散らした中に主人は語る

「何しろ野良に出て居ました最中とてあはてゝ家に飛び
込み物を取出してゐましたが不思議にも火の手が二つに
分れ幸にも焼残つた次第です」と悲しさうな中にも喜び
の表情を浮べて居た。

罹災民語る

一方不幸にも類焼のうき目に遭遇した罹災者を天照寺
の救護所に訪へば眼を眞赤に泣きはらした十七八の娘と
ぼんやり一緒に立しよんぼんで居た母親は

「これも皆運です災難です何しろ野良仕事の最中とて急
いで家に駆けつけて見たものの、何一つ取出す隙もなく
焼けてしまつたのです只この着物一枚これを一枚出した
だけです」

と娘は肩に掛けて居た袷を指して見せた。

一人の子供の火遊びから圖らずも此の大事を惹起した
火元の松本市の焼跡を訪ねれば家族一同は何處へか姿
をくらまして居らず五六人立ち話をしてゐた中の親類
の一人は語る「味噌も煮て居つたけれども、もうそれは
終つて家族も皆居たのです矢張り金治の弄火からで鉤肩
に燃えうつるとあの風で手の着けようがありませんでし

た燃え出したと思ふともう向ふのともない家が燃え
出して居た始末です何とも申譯なのいことになつてしま
つたが本當に業風業火でした」

罹災兒童には

一般から學用品募集

更級町村町會は

一萬圓を募る

更級郡共和村大火につき其損害高は目下詳細取調中で
あるが由來同村は郡下でも裕福なる農村で全村悉く數棟
の土藏を有せるが今般の損害の重なるものは穀にして瀧
澤淺太夫の一千俵を最高とし各戸二百俵内外を焼失し殊
に多くの人は野良に仕事中で搗て加へて大風の爲め、家
財道具など取出したもなく詳細取調書提出をまつて縣
當局も救濟基金を下附し一方郡では取敢ず二十二日午後
一時より町村長會を開き約一萬圓の寄附金を募集し又二
十二日午後郡衙に小學校長會を開會し罹災兒童百五十名
の教科書學用品等は一般兒童をして寄贈さすべく計割中
であるが篠の井高等女學校にては二十日取敢ず多量の食
パンを、寄贈すると共に全校生徒三十名は徹宵ネルの單
衣三百枚を二十一日午前十時迄に縫ひ上げて寄贈し共和
村役場婦人會篠ノ井町二葉組合では共力して夫々廿日夜
より焚出しを行ひ尙岡田區では一軒につき各々二升平均

の白米を集めて焚出しを續行し尙新田組築地組大門等も
それ〴〵順番に焚出す豫定になつて居り各方面より寄贈
せられたる白米毛布味噌醬油手拭反物茶碗等も頒布し萬
遺漏なきを期して居るが二十日現在罹災民中救護所に厄
介になつて居る家族は光林寺に三家族天照寺に十家族村
役場に一家族の合計十四家族で小學校には大人兒童各々
十名のみである尙縣保安課日向警部は警察部長の代理と
して二十一日朝現場に急行し懇に罹災民を慰問する所が
あつた。

小松原區は

春蠶を共同飼育

千枚の蠶種を配布し

郡是會社で飼ふ

百五十三戸四百九十九棟を祇め盡した共和村小松原區
は養蠶業として郡下隨一の場所だけあつて本年の同區掃
立春蠶種は約二千枚の豫定で内一千枚は郡是蠶種會社に
保管しありて今回の難を免れたるも一千餘枚は悉く焼滅
し之れに對し共和村農會は廿一日午後急遽農家組合長會
を開會各種蠶業上の救濟策を協議し尙大澤村長寺澤農會
長鎌田郡是蠶種常務大澤技手出張し掃立迄には如何にバ
ラツクと雖も全部建設を終る見込みがないので掃立を例
年より數日遅らせ殊に二眠まで稚蠶共同飼育をなして配

給し以後屋外條桑育を以て急場の収入を計る方針を立て約一千枚の蠶種供給と是れが稚蠶育場は更級郡是會社を以て充て桑葉と業手は共和村農會より日割を定め出勤せしめ時によりては更級郡繭糸の一部も寄宿に借り受け春蠶飼育の進行を期する計劃を立て更級郡是蠶種會社は特に養蠶組合に最も研究深き技術者を増員することに決定し鎌田同會社専務は自家用蠶具五百枚分の貸與方を申出た。

大火の支出所要費

其他の調

更級郡共和村小松原區の大火其後の取調べに依る詳細なる焼失棟數内譯其他罹災支出費關係所要費左の如し

燒失戸	百五十三戸
燒失棟	四百九十九棟
内	
本建	百四十九棟
物置	九十六棟
土藏	六十七棟
其他	百八十七棟
罹災人員	九百四十五人
内	
十二歳未満	二百六十一人

七十歳以上	三十五人
其他	六百四十九人
燒死者	二人
負傷者	七十八人
罹災小學兒童	百四十七人
罹災人員五日分食費	一千十四圓九十三錢
被服費	三千二百五十八圓
小屋掛費	六千七百六十圓
小學兒童用品	五百四十六圓
以上費用總計	
	一萬二千五百七十八圓九十三錢

續々として義損金集る

更級郡共和村小松原區罹災の内縣稅等級割中等以下にして焦眉のバラツク建築舎に腐心するもの戸數百五戸に對し一戸平均二百圓と見積り一萬千圓を要すを以て郡當局は大澤村長と計り本縣より約五千圓村費より五千圓郡各町村義損金一萬圓を仰ぎ一日も早く復興の緒に着かしめんとし計劃中なるが隣村中津村は早くも廿日村會の決議を以て一千圓を寄贈し續いて篠ノ井町も一千圓を寄贈すべく其他下堰普通水利組合は一百圓上中堰普通水利組合は二百圓を寄贈し尙小學校長會の決議に基き郡當局は學用品全部各賣捌店に注文して萬端遺漏なき様進みつゝ

あり。

小學生から二千圓の同情金

日用品は購聯から原價で提供

共和村罹災民救済策

更級郡共和村では罹災者を小學校に收容し休校を爲して居るが救助方法に就ては購買組合聯合會から日用品其他同組合で取扱ふもので生活必需品に屬するもの並に蠶具等は原價を以て提供することになり二十三日醬油罐詰等第一回の輸送を行つた又米穀に就ては同村農會の斡旋に依り外米を購入することになつたが學校の教科書は西澤書店より是れをとりよせ廿六日より開校する豫定で目下の處尋常科六年生の男子は救恤品の配給に當り女生徒は焚出しを行ひ目覺しい活動を續けて居る一方郡内小學校長は廿二日篠ノ井に於て會合し罹災救助に關し各小學校の採るべき方法に就いて協議をなした結果郡内小學校生徒より二千圓の義捐金を醸出することになつた。

共和村火災に

埴科もお付合ひ

更級郡共和村小松原區火災に付いては同郡内各町村は勿論隣接埴科郡に於ても二三町を除く外全町村共各役場が主体となり罹災者救助の見舞金の募集或は團体の花見學校生徒の遠足旅行等を中止する等同情翕然として集り

屋代町長の如き自から有力者を訪問義捐の勧誘に努めて居るので豫想外の好成績あるべく觀察せらる。

復興準備益々整ふ小松原區

信濃木工學校建築を請負ひ

更級郡共和村小松原燒跡整理は地元共和村は勿論隣接町村篠ノ井・中津・川中嶋・御厨・榮・信里・石川の各消防組と更級農學校生徒二百六十名通明公民學校生徒七十名篠ノ井町青年會二百五十名御弊川川中嶋青年會等の應援により二十四日を以て略結了し尙共和村長、農會長、信用組合長主腦となり今後の建築物、道路等に付いては縣農會三木幹事に委託して具体案を作り之れに準據して理想の農村住宅を建築することとし取敢ず間口二間、奥行三間のバラツク百三十箇の材料を小諸、丸子、松代の方面より蒐集し信濃木工學校をして應急建築せしめ各地より惠送の諸物品は配給規定を臨時作成之れに準據して配給を萬遺漏なからしめ尙更級郡醫師會長堀仁一郎氏は會を代表して向後一ケ年治療費半額を以て罹災者に限り治療に應ずる旨申出で尙各地最後必生の腸チブス、赤痢をして絶對になからしめんと適當の期に於て二回の注射を施し尙臨時征露丸を頒布して衛生状態を可良ならしめんとし篠ノ井警察署は特に野外電話を罹災地と役場に架設し

て萬事通話の敏速を圖り物資運搬に就いては更級繭糸會社は自動車を提供する等着々復興の準備整ひ既にバラツクの建設せられたるもの十數箇に達した。

共和村小學校

授業開始

更級郡共和村小松原區は焼け残つた藏を修理したりバラツクや藁小屋を立て小學校より順次引移るので二十七日より授業を開始した尙中津村南原の温友會にては同部落内三ヶ所に毎夜三本宛の慰問風呂を立て、目下尙かはるく灰掃除をなす村内各消防組員や罹災民に當てゐる。

更級町村の罹災救助

財源は寄附が當然

更級郡共和村の罹災者救助に付き同郡では町村長會議を開き一萬圓を支出し之れを各町村に割當てることになつたが各町村の割當て額を如何なる方法に依るか之れを町村豫算として支出するか或は一般町村民の寄附に依るかが問題であるが右に就き縣地方課では市町村豫算より支出すれば當然郡長の許可を受けなくてはならぬ結果になるので一般寄附行為に依つて罹災救助費を募集するが最も穩當であるとの見解を取つて居る。

人情美談

浮川竹の勤めの身が

共和村の罹災民

救助に金を恵む

新湯樓に咲く花富子

金が浮世か浮世が金か―と朝夕に源平藤橘の客を送り迎へ彼は娼妓よ―異性の犠牲生活者よ―泥水稼業よ―と云はれて居る浮川竹の身にも泥中の白蓮と稱すべき美しい人情愛を持つ女がある。

それは絃歌さんざめく長野鶴賀新地新湯樓方富子こと百崎しげ(二四)で十九歳の時打掛姿で店に出て今日迄に足掛六年稼業大事と勤めて居るが去る廿日四歳の兒童の弄火より遂に一村落祝融に見舞れた更級郡共和村の大火災の悲惨な印象一は京濱大震災後の悲惨事として縣下の同情は翕然として注がれ義捐金は夫々各方面で募集されつゝあるを登樓客より開かされ體驗する家庭の悲惨な生活を知る彼女は焼跡に迷ふ罹災者に對し同情の涙なく居られなく一夜まんじりとせす考へぬいた揚句自分が働いた玉のハネ錢を残し溜た金三圓をば僅かながらも送る事として二十六日午前八時頃長野野署へ左の手紙をつけ金員同封にて寄せて來た。

拜啓

取急ぎ申上げます今度災難にあはれた共和村小松原

傷一名を出した。

即死

更級郡鹽崎村字上町

消防手 中嶋今朝五郎(二五)

重傷

同 郡同 村字角間

消防手 清水寅雄(二四)

同 郡同 村字上町

消防手 宮下義雄(二二)

長野市妻科町三四

運轉手 小沼高則(二四)

更級郡信田村八四

同助手 宮原晴男(三一)

輕傷

更級郡鹽崎村字上町

消防手 奥村忠治(二八)

即死者は檢死の上家人に引渡し重傷者は手當の上篠ノ井町の鐵道囑託醫嶋田左門方へ收容し輕傷者は假手當の上自宅に引取らしめた右踏切は第二種踏切で踏切看守は午前六時から午後九時までの勤務であつて右棒事發生の際は時間外で看守が勤務して居らざりし爲めこの大慘事を演出したものである因にこれが爲め同列車は十時十七

の御人様を誠にお氣の毒に思へますので澤山の事は出来ませんが僅か三圓の金でも人様に差上げたと思ひますからお手数でも警察署様から共和村へ送つて下さる様お願申します。

東鶴賀町新湯樓内

百崎しげ

四月廿五日

と美しい心の持主である彼女は其の心持ちを水蒸の跡に残して寄せたが實に娼妓稼業從事中のもとして近頃感すべきもので同署では該金を直ちに送附の手續を取つた。

食料品運搬の歸途

自働車列車と衝突

死傷六名を出す

屋代篠ノ井踏切の慘事

廿日午後十時十二分屋代驛を發車した下り旅客列車が屋代篠ノ井間の北國街道踏切りに差懸らんとする際更級郡稻荷山驛前丸通運送店の貨物自働車が同日共和村小松原の大火罹災地へ食料品を運搬しての歸途同大火に出動せる鹽崎村の消防手四名を乗せ線路左側より疾走して來たので之れを發見した機關手は警笛を吹き鳴らして注意したるも之れに氣附かざりしものか忽ち列車と衝突し自働車はめちやめちやに粉砕し左記即死一名重傷四名、輕

分より卅一分まで十五分間現場に停車した。

夕刊長野新聞所載

(大正拾五年四月二十一日木曜日)

共和村の

大火

一村全滅

更級郡共和村段之原に二十日午後三時大火有り折柄の烈風にあほられて附近へ燃廣がり廿八戸を焼き今尙盛んに燃つゝ有り(午後四時報)

猛火に包まれた小松原

二百戸の部落全滅

烈風中を材木屋から發火し

現場は阿鼻叫喚の修羅場

第二報 二十日午後三時更級郡共和村宇小松原材木商松本和一方から發火した火事は暴風に煽られて裏三軒及隣家へ同時に燃え移り風愈々加つてものゝ五分もたぬ内に駆付けた同村消防組も全くの猛火の内に手の施し様もなく紅蓮の炎は地上に唸りを生じ縦横に廣がりて物凄く見る見る三十分間に八十戸を焼き拂ひ部落の風上約十町は火の海の如く黒煙は風下二百戸を全く包圍して見る

内に十數町を飛んで同部落の中央に飛火し今は全く如何とも詮方もなく犀川岸の子迎水は充分にありながら唯周章狼狽するのみで魔の手の翻弄にまかせるの外なく此中を狂氣せんばかりに逃げまどふ老若男女の悲鳴は言語に絶し三百戸に近い同部落は阿鼻叫喚の巷と化し百臺にも近い消防ポンプは火を遠巻に巻いて傍觀の已むなき状態である。

第三報 一時間餘を火の廻るまゝにまかせた同部落は四時既に大半を焼拂つて人家のあらん限りを焼き盡さねば止まぬ勢であるが全くの安全地帯で應援に出掛た犀口約三十餘戸の部落も小松原二百戸が一時に燃へ燃る焔で愈々危険に瀕し遂には數町離れて居る同部落の南部に飛火し飽くなき魔の手は尙ほも擴がり風下は何れも全焼を免れぬ運命に陥り家財を打ち捨て、悲鳴を擧つゝ避難する群で大混乱を呈して居る。

第四報 火元の松本和一方は小松原の最南端に有りて南風の激しき爲め部落西側に續く小松原山は山火事を起し青松の濛々たる白煙は天に沖し麓を北進するが若し此儘で時を推移する時は何處迄擴がり行くか此方面に消防は全力を傾けて居る一方篠ノ井署は急速に長野松代屋代に打電應援を求め火急の報にガソリンポンプ破壊隊は陸續と到着しつゝあるが午後四時の現状では小松原區の全

滅は到底免れぬ更に川中鳴村の一部四ツ谷區も如何と危ぶまれ其頃より風益々加り人の歩行も妨げて消防隊の活動も自由ならず午後四時迄に收容された負傷者は十數名消防手の負傷者多數有篠ノ井署から取敢ず救護が出動した。

◎罹災總員千五百名

小學校へ收容す

附近の各村は焚出しに努め

宛然戦場の光景

共和の大火は其後四時半鎮火人家ちう密の場所を燒盡したので火勢は自然に衰へ中組部に轉在する數戸も一戸も残さず燒盡して村社布旅御厨神社に及んで幸一時火弱く風衰へたので茲に消防隊は力を得て必死の活動を續け同所を遂に烏有に歸し裏の森で消止めた餘焔は薄暮の天を焦して物凄く慘狀目もあてられず長野赤十字病院よりの救護班は其の間に雄々しく働いて一種凄慘の氣分を見せて居る幸にも死者は出さなかつたが負傷者は多數の見込である消防手中津村西部千野勇外に幾分ある模様で損害は目下取調中であるが小松原南組中組二百餘戸八百棟を燒失し避難者約千五百名は全部同村小學校に收容し附近數十ヶ町村からの焚出しで人々は不安な夜を明す事になつた出動消防組は附近は勿論長野屋代松代遠くは埴科

西條上高井川田方面から約百六十組に達した火元松本和一は此恐ろしい大火の種を撒いた係金治(四ツ)を抱いて篠ノ井署で只何とも申譯有ません一體どうしたらいいしよふと殆ど失神の態で火事の方を見ては火事はまだ消えぬかとおろおろつぶやいて居り無心の金治は頻りに成る電話の傍で平氣で無邪氣な事を口走つて居た午後七時迄に判明した死者は小松原二〇四 庄田精作(五三)は死亡負傷者四五名救護班に收容されたもの七八名である因に小松原銀行は此火災破壊消防の爲め打壞された。

◎應援隊續々出動し

縣は罹災者救助準備

小松原大火の急報に接した本縣警察部では混雜整理と取締應援の爲午後二時巡查教習所の生徒拾五名を自動車で急派し續いて衛生課からも醫師を派遣したが赤十字長野支部も醫師及看護婦の救護班を出動せしめたが社會課では警察部への報告を一々聴取し罹災者救助準備中である。

◎五時に至り

火熱衰らふ

破壊消防により

六時半漸く鎮火す

風勢が衰えたのと消防組必死の活動が効を奏し午後六

時廿分頃全焼約百四十一戸で漸く鎮火した死傷者の判明したものは死者一名負傷者五六名行衛不明の子供二、三名其他は調査中或同部落は總戸數約二百であるから全滅も同様である。午後六時半、小松原部落は遂に全焼したが火勢は更に隣接の犀口部落に飛之をも抵ん勢ひを示したので多數出動の消防隊は縣警察部應援隊の指揮の下に破壊消防を行ひ必死に消防に努めた結果幸ひ延焼は免れそうで或又風勢は順次衰え此の分だと間もなく消えるかも知れない負傷者罹災者等の状況は未混裡にあつて詳細不明である。午後五時四十分

長野新聞

(大正十五年四月二十二日木曜日)

◎埴生分會

同情金

小松原へ

埴科郡埴生村在郷軍人分會は二十一日春季招魂祭の席上更級郡共和村大火罹災者に對し同情に堪へぬとの處から直に總會を開き見舞金五十圓を寄贈するに決定し直に分會長山崎重太郎氏外二名代表者として同村役場を訪ひ其手續きを履んだ。

小松原大火跡始末

◎慘又慘

燒跡に漂ふ哀話
火元の女學生は退學を學校へ申し出で

各所で義捐金計畫

烏有に歸した共和村小松原區二百戸八百棟は其跡は見ても悲惨任むに家無喰ふに食なく救護班から送る握飯や親戚からの見舞で飢をしのぐ有様であるが着のみ着のまゝで燒跡をさまよふ振はさながら關東の大震災を思はしめ一夜を山中にふるえて明した老幼病弱者は二十一日救護班に助けられ同村小學校に收容されたが其内多數の傷病者は漸時身寄りの物に引取られ同村中組に置いた赤十字社救護班も朝十時漸くホツと一息を入れ疲れた消防隊は尙も餘燼の打消やら跡かたづけを續け死者十名程はある見込みで

行衛不明者も調査中だが昨報の庄田清作(五三)の外今朝發見された者は信江の叔母瀧澤みか(五一)は黒焦死體となつて掘出され其他二三子供の死體も發見されたが尙五六名は判らない負傷は約八十名で内消防手で重傷を負つた者は昨報の中津村千野勇外川中嶋村今里消防川崎福茂(二三)と四ツ谷消防宮嶋舞治(二八)氏外重輕傷者三十

餘名ある而して大火の善後策に付各所夫々協議中であるが更級郡役所では取敢ず二十二日町村長會を開き金

一萬圓の見舞金を送る可く尙小學校の校長會も同日開くと罹災村共和村は難を免れた岡田區の有志から二千圓の救助金を送る事になつた此日更級農學校生徒約百名は夜深更迄現場にあつて傳令其他雜務に服し篠ノ井女學校生徒は諸方より食パンを買集めて罹災者の飢をしのがせ尙二十一日は四年生上級生は授業を休みフランネル百枚を縫つて午後貨物自動車で配布したが火元松本和市の妻の姪にあたるさだ子(一七)は更級女學校四年生であるが子供の

弄火とはいへ叔母の失態から此大事を招いたので二十一日受持後藤教諭迄退校を申出た。

◎電燈復舊を急ぎ

罹災者は本分無料

信電會社では共和村の火災當夜一万人近い消防手や其他で現狀は混亂を呈してゐるので之が臨時應急處置として燒失した約五十本の電柱を假立して五十燭光約六十燈を點燈して消防手や罹災者の

便を計つたが更に二十一日は配電課長が五十名の電工を使用して毎日電柱電線並びに各戸毎に電燈の修理を行ひ同夜からは復舊の狀態で或尙二十日夜の臨時點燈費及

本月分の電燈料を無料とした上に三百圓の義捐金を同村役場へ届けた。

◎長野市三百圓

を見舞ふ

更級郡共和村小松原の火災に對し長野市では二十一日三百圓を見舞として贈呈した。

(大正十五年四月二十二日木曜日)

夕刊長野新聞

◎燒失百五十二戸

死者二名負傷六十四名
行衛不明の子供もある

損害見積八十萬圓

小松原の燒失全戸數は百五十二戸此損害見積額約八十万圓の見込みで有二十一日の朝篠ノ井警察員の實地調査の結果に依つて庄田清作(五三)及瀧澤信衛の叔母みや(五九)の兩死體を發見した負傷者は未だ確實の數は判明しないが今朝迄に判明したものは六十四名で此外に行衛不明の子供などが有るから或は燒跡から死體となつて發見されるかも知れない。

廣い範圍で

救助したい

慘憺たる現場の光景

地方課長の歸廳談

更級郡共和村宇小松原の大火災は既報の如く慘狀を呈してゐるが縣は多くの罹災民に對しては能ふ限り廣い範圍に於て

救助を行ふ方針で廿一日早朝萬社會課長は現場の實地調査をして午前中に引き返して來た其談によると實に慘憺たる光景で同情に堪へない罹災民は全く着のみ着のみで學校其他に收容されて居るが食料は附近各村の同情及親戚の者から贈られて充分である直困るのは布團が充分に行き亘らぬ事だ火は昨夜の

豪雨あつたにも係らず猶濛々と煙を出して物凄じいものがある同村では二十一日早朝急施村會を招集して取敢ず二千圓を決議して中津村の木工學校に依頼して假小屋の建築にかゝる事となつてゐる而し同村は比較的裕福の村で百五十五戸中約五十戸位の救助でよいと思ふ縣は先づ取敢ず食費衣類小屋産業其他就業資金學用品等に對してなる可く廣い範圍で支出する方針で折角と調査中である。

◎焦土の跡から

安茂里を焼き

火を吹く神木

累報小松原の大火は同夜午後六時頃全く鎮火し一万人に近い消防手もホット一息入れてゐる頃猛火は更に魔の手を延ばし安茂里村宇小市に飛火して居家二戸山林數町歩を焼き拂ひ漸く七時半頃全く延焼の憂ひは免れたが延長十數町に亘る火災現狀は斷水の狀態にあるので盛んに焼き残りつゝある闇夜の爲見る者をして身の毛をよ立たしめる程慘憺の氣を漲らしめてゐた殊に同村社布施御厨神社の數十年を経た杉の大枯木の如きは頂上から五六間四方へ盛んに火焰を吐出し續けて此大火災を呪ふが如く云ひ知れぬ物凄さの中にも庭花火の如き光景を呈して居た。

深夜村會召集

補習生の焚出

罹災者を救助せんと同夜同村女子補習學校生徒約五十名は小學校に集合して盛んに飯の焚出しを行つたが更に同村當局では十二時を過ぐる深更に及んで役場内に村會を召集して一時的の善後策に就て協議を重ねた結果更級方面委員會に義捐金募集方を依頼すると共に翌廿一日は岡田部落青年會婦人會等を召集して一戸から米二升平均を集め小學校で焚き出しを行ひ更級農學校から上級生徒

五十名を借受て握りめしを罹災者に配布の任に當らしめつゝある。

焼残つた土藏

辛くも土藏が満足に焼残つたものは瀧澤安之進方土藏が横田東福二組消防手に依り瀧澤鶴治方土藏は中津村南部消防組に依り吉岡豊方土藏は篠ノ井消防組の手に依つて何れも延焼を免れた。

焼跡で踊る

發狂した人

猛火の静まつた後へ取残されるものは見る者聞く者をして涙をそゝらすには置かない所の數知れない慘々たる悲劇である之れも其中の一つであるが同區野口某は此想像だにも及ばない暴威を振つて大威力の前に猛火を眺めてゐる中に發狂して附近に有合の酒を矢鱈に飲み上げて自宅の焼跡をいつ迄も狂喜した者の如く大聲で歌を唄ひ乍ら彷徨してゐた。

第一の義捐者

衣類を脱ぐ

大火を聞きつけてまつ先に同村役場を訪れた者は上高井郡保科村坂口某で金拾圓を差出し罹災者救恤金に加へてもらひたいと申し出た同情者もあるが尙五加村の宮坂報徳會長は役場の受付口で眞裸と成有合の金若干と脱

いだ着物とを罹災者に恵んでやつて下さいと自分はシャツ一枚猿股一枚となつて自ら救恤金の準備に駆付けた如き涙を注る様な同情者もある。

災後の大雨

消防手の引揚

尙罹災者の大部分は附近の部落に於ける親類知己を訪れて之に避難したが中には多少物品を田圃や畑中へ運び出し暗夜中に此の荷物の番人をして寒さに震へながら泣きわめいてゐる者もあつた而して午後十時から降り始めた雨は十一時三十分頃から春雨には珍しいどしや降りとなつたので二十一日午前二時頃からは附近部落の消防手が警戒の任に當り遠方からの消防手は全部引揚てしまつた。

火事に活動中の

自動車列車と衝突し

即死者と重傷者を出す

二十日午後から夜にかけての更級郡共和村小松原の大火の爲更級郡鹽崎村よりの焚出しを運搬して第二回目を運ばんと疾走中の稻荷山驛前丸通新井菊次郎所有の貨物自動車が鹽村中郷消防手四名を乗せて午後十時二十分鹽崎村舊篠ノ井國道十號線踏切りに差かゝるや十時廿四分篠ノ井着の一三三號旅客列車が驀進し來り自動車の横腹

に衝突し車體は滅茶々に紛碎されて線路東側柵に撥ねつけられ柵諸共人家の壁に衝突り運轉手小沼高德(二四)助手原清雄(三一)は瀕死の重傷消防手中嶋今朝五郎(二九)は即死清水寅雄(二四)は危篤宮下義雄(二二)は頭部に重傷奥村忠治(二七)は輕傷を何れも負、附近の者共駆け取敢ず各所に急報したが何分大火の騒ぎに警察署は云ふに及ばず醫者は總出の事とて此慘事を前に拱手傍觀のていで列車は現場に停止し非常警笛を鳴らしつゝ篠ノ井に入り来るや鼎の湧くが如き大騒ぎと成り小宮醫師と記者が共に現場に駆けつけた時は附近は鮮血に染り往來の頻繁であつた同夜も全く交通杜絶し悲報に駆けつけた不慮の大厄に逢つた家族は我子を呼び親父に泣きつく子供で悲惨の極みであつた死傷者は應急手當の上篠ノ井町嶋田醫院に擔ぎ込んだが運轉手助手清水消防手の三名は生命覺束ない。

制動も間に合はず兩檢事急行 右に付き同列車乗務員は現狀で語る「篠ノ井橋」を通過して踏切手前のカーブにさしかゝつた時自動車の先端が線路を踏み切らんとしたのを見たのですぐに急制動を取非常警笛を鳴らしたが惰力で遂こんな事になつてしまつたのです」因に同村では夫等公務に殉じた死者傷者の善後處置に付いて急遽村會を召集し協議中である。

汽車と自動車衝突現場檢證の爲長野地方裁判所堀合鈴木兩檢事は百瀬山口兩書記を從へ二十一日朝急行した。

長野市の義捐

共和村の大火に義捐金として長野市は二十一日金二百圓を贈つた。

共和村 義捐金募集 災害の

更級郡共和村の火災は殆ど小松原部落全滅の悲惨事を惹起し辛ふじて身を以て遁れ時に衣と食と住とを奪はれた多數の人が有りまして誠に座視するに忍びません乃ち本社は大方の御同情に訴へ左の規定により義捐金を募集して之れを罹災者に頒ちたいと思ひます。

一、一口金壹圓以上

紙上に金額を掲げて領收證に代ふ

一、締切五月十五日

分配方法は村當局に諮つて合法的に致します

長野新聞社

(大正十五年四月二十三日金曜日)

長野新聞

小松原焼失戸數 一四八戸 四九〇棟

更級郡共和村小松原部落の大火災は屢々報じた如く尙混雜を呈して居るが今回本縣の調査による焼失戸數同坪數及損害額は左の如くである。

- △燒失居宅 一四八戸
- 世帯數 一五五
- 此坪數 四、五二七坪
- △土藏棟數 六六 七二二坪
- △納屋同 七四 六二九
- △物置同 九七 七五四
- △便所同 一〇五 一一〇
- △總棟數 四九〇 六、七四四
- △ 男 四二〇
- △ 女 三九六
- △燒失家族數女 八一六
- 計
- △損害見額
- 不動產 五三四、二九八圓
- 動產 五三三、一三〇
- 內通貨 三、六四五圓八〇錢
- 計 一、〇六七、四〇八圓
- 殉職消防手
- 弔慰金
- 消防同盟會から

更級郡鹽崎村消防手中嶋今朝五郎氏は昨報の如く小松原の大火に出動して身には數ヶ所の負傷を受けて貨物自動車で歸宅の途中舊篠之井鐵道踏切に於て列車に衝突した利那即死の慘事を演じたので本縣消防同盟會は二十二日の葬儀に際し金三百圓に弔辭を呈して其靈を弔ふ處があつた。

火元の主人

責任觀から自殺

の恐れ有警戒中

更級郡共和村小松原部落の大火災の火元で或材木商松本和氏氏は孫の金治が弄火から斯の如き大事と四百九十棟を全焼せしめたは自己の責任であると強い責任感から火災當時から兎角自殺の虞あつたので當日は警察で保護を加へ其後多少落ついたので岡田署長は懇々と諭した結果本人も之を諒として歸宅したと云。

(大正十五年四月二十三日金曜日)

夕刊長野新聞

小松原に餘燼を踏んだ

未だ火を吹く

御神木

幾家族が同居して只

途方に暮れて居る

焼土と化した小松原は三日目の今も尙火の氣失せ切らず小松神社の御神木の如きはさなが仕掛煙火の様に六七間も上のうつろの穴から火を吹て居てそここの灰の小山も中は矢つ張とけてゐる全く廢墟となつた小松原はつきざる餘燼の中に黒こげになつた杏や柿や雑木やが無慘に孤立して居る計りで誰の敷地やら屋敷やらそれさへ判らない。

隣接町村の消防は依然屯して消火に努力して居るが尙足らず昨夜は篠ノ井のガソリンポンプの再出動を懇願しておく程である。

千餘に及ぶ避難民は最寄り／＼の姻戚や知る邊をたよつて思ひ／＼に假の住居を求めてゐるが丁度關東震災の時の様にボール紙や板切れに何の某の避難所と謂つた案配に標札を掲げ僅五間か七間位の間口の家に四家族五家族とつめ込んで丸で戸締りさへ出来ない混雑さを極め家の外も内もない程である

其間に蒼醒たそして不安と壓迫に襲はれつゝある人達が何等の希望もない空虚な思で昨夜も明けたのである。

泣きつゝ語る避難者の話を聞く

婦と子供三人だけで

後は何一つなくなつた之から先一体どうなる事やらと

嘆じむせぶのであつたそして尙續けてやり様が無いとい

つて居た痛しい感傷は記者をも共に泣かしたものであつたが避難者の在所にはこうした名状すべからざる有様は幾等でもあつて枚擧するに遑ない。(廿二日)

農學生徒

總出動で灰片付

郡も村も救助の早

からん事に努む

更級郡共和村小松原大火の罹災者は大部分親戚へ行き親戚のないものは天照寺と光林寺へ

收容してある縣の罹災者救助方針は更級郡役所に命じて凡てをやらせた上夫に依つて決定する事になつたが總額は約二萬圓に上る豫定で或目下北佐久郡小諸方面から材木を買つて小屋掛けを初め食糧品は附近及

長野市方面から購入し被服類は更級女學校の生徒が縫ふ事になつて居る小屋掛は中津木工學校の生徒がやる事に成り二十三日には農學校生徒が總出動で焼跡の灰片づけをやつた此外學用品農具穀類など凡そ生活の必需品は一通り買つて與えなければならぬので農繁期

を控へ役場や郡役所は一日も救助の早からん事に努めてゐる罹災者中極く僅く僅の人達は持出した家財道具を焼なかつたが運び込む場所が無いので焼跡に夫を見張して居る

様はいとも哀れである。

殉職消防手に

弔 慰 金

更級郡共和村字小松原區の大火の消防に盡力火傷を負つて自動車で歸途舊篠之井踏切に差懸つた際列車と衝突即死の鹽崎村消防手中嶋今朝五郎氏に對し本縣消防聯合同盟會梅谷總裁から金一封を添へて廿二日弔辭を送つた。

(大正拾五年四月二十七日火曜日)

長 野 新 聞

◎復興の道程を急ぐ

小松原の罹災地

山なす同情にどしどしと

更級郡共和村小松原の復興に意ては農會長寺澤種二郎氏を委員長に村長大澤鐵左右信用組合林部安十郎二氏顧問となり

農業住宅養蠶室の建築については縣農會三樹幹事に一任し同村は取敢ず二間と三間のバラックを建てゝ急場の住宅となし後日は物置とする筈で信濃木工學校に受負はしめる事となつたが各地からの慰問の金品で山を爲し多數の同情でどん／＼復興しつゝ有。

郡園藝組合はりんど園の剪定又農會は數種子の斡旋等一方は住宅一方は農に努力しつゝある。

◎中津少年團

風呂桶を

持ち廻つて

罹災者の救助

之も共和火災の美談更級郡中津村の談友會と云ふ少年團四十名は廿五日會員中から十ヶの風呂桶を集め村の手押ポンプを借り出し薪携帶で罹災地に至り隨所の焼跡に風呂を立て巡回したので丁度一週間灰と泥にまみれて入浴出来なかつた罹災者は涙を出して有難がつて居た。

◎町村費の

支出は

形式上穩當を欠く

更級郡共和村字小松原部落の大火災に對しては一般から多大の同情をよせ 殊に同郡町村會は一万圓の義損金を贈るを申合せた事は既報の如く有るが之れに對して本縣は一万圓を各町村に割當て之を更に一般の同情に訴へて義損金を募集して贈る事は何等差支ないが純然たる町村費から支出して他町村の救済に直接與ふる事は形式の上に於て穩當を欠くもので有ると云ふ意見に決定したので直に其旨更級郡役所郡長に通達する處があつた。

(大正十五年四月二十八日水曜日)

長野新聞

◎共和村災害地

養蠶共同飼育

稻種子二十五俵の

共同苗代で分配

過般の共和村字小松原の大火災に就ては本縣農會に於ても之が善後策を考究し復興の促進を圖り此際文化農村を建設する方針を以つて住宅其他公會堂は總て共同的に建設し農業も共同經營となすは最も時宜に適したものとして二十七日縣農會より新井宮崎尾崎の三氏は實地視察の爲同村役場へ出張種々打合したが

同部落は非常に貧富の懸隔有て由來個人主義の發達せる所にて共同的精神に乏しければ是を機會に斷行する意行する意向を以て着々計畫の歩を進むると云ふ然して目前に迫る蠶兒の掃立は篠ノ井町郡是蠶種に貯藏し有物を同所に於て稚蠶飼育を爲し壯蠶季に至り各戸に配付し雨よけを爲し桑條育とし又種蒔は各町村農會より
寄贈の關取幾内早稻二十五俵を共同苗代として各人に配當すると云ふ目下二間に三間のトタン屋根のバラックを盛に建築中にて二三日の中には大略終ると云ふ同バラ

ツク村營を以つて一棟の建設費百貳拾圓にて縣稅拾圓以下

の納稅者は無償とし十圓以上貳拾圓以下は拾圓貳拾圓以上參拾圓以下は貳拾圓參拾圓以上四拾圓以下は參拾圓四拾圓以上五拾圓以下は四拾圓五拾圓以上六拾圓以下は五拾圓を負擔せしむる物で尙

縣農會の調に依れば燒失戸數百五十四戸の内純農百四十二個商業五個屋根職教員桶屋日雇業各一戸燒失建坪六千八百七十一坪損害百七十七千七百貳拾八圓延長十五町にして罹災者中縣稅戸數割拾圓未滿四十九戸拾圓以上百五十戸七拾圓以上二十九戸罹災者總數九百人一戸平均六人である。

東京日日新聞記事 大正十五年四月廿一日

第一報

一部落殆ど全滅

長野縣共和村字小松原

百戸を燒き更に川中嶋へ

(長野發)廿日午後二時四十分長野縣更級郡共和村大字小松原材木商松本和一方より發火折柄の北西の烈風に煽られ午後四時までに全部落百三十戸中百戸二百五十棟を全燒した上隣村川中嶋村に飛び火し犀川岸を縫つて對岸

當にあつた。

徹宵救護と警戒のために野宿してゐるそばを飛び歩く消防夫や警官連をながめてかすかな聲で「どうも御苦勞様です」などと感激してゐる光景は涙なしには見られな

焼け残つた

住宅タツタ八戸

判明した死者二名

重輕傷者六十余名

右共和村小松原區の大火につき廿一日朝までの縣保安課の調査では燒失戸數百五十五戸半燒一戸類燒を免れたもの住宅八戸土藏二十一戸で二百余戸の小松原としては完全に全滅した同朝まで判明した死者は同區庄田清作(五三)瀧澤みか(五九)の二人だが其他重輕傷は六十余名

の安茂里村も危險に瀕し午後四時半に至るも鎮火に至らず原因は和一孫金次(四ツ)が味噌たきの火をおもちやにしたためである。

共和村大火に

日赤の救護班

長野赤十字支部では更級郡共和村の大火につき救護班を編成午後六時同地に急派した。

僅か二三時間で

(四月二十二日續報)

二百數十萬圓を灰燼

數年來の貯藏米もその儘に

殆ど全燒した共和村大火の跡

昨報更級郡共和村字小松原の大火事件は本縣としては近年に其の數を見ない大火事で損害高二百數十萬圓にのぼり六百余名の罹災民は僅か三四十名の俸給生活者を除く以外は何れも農民で然も小松原區は同郡經濟の樞要地として認められて居る富裕の地で數年來貯藏米等も相當藏に貯わへられてあつたがそのまゝ殆ど一俵も運び出されず折柄猛烈に吹きまくる悪風の爲に僅か二三時間にして灰と化し去つたので罹災者は同夜は全く夢心地でボンヤリしてたゞ寢をとる事を考へるのみで一家族全部無事である事をたしかめたものは辛じて搬出して焼け残りの布團などにくるまつて麥畑に春寒き一夜を明した者も相

に達し日下同區に急設した療養所で救護班の手によつて手當中。

慘たり

一望焼野ヶ原

折柄の降雨に

罹災民抱いて泣く

紅蓮のほのほは午後六時頃に至つて一先やんだが濛々たる黒煙は全區を俺うて時の過ぐるにつれ暗中に展開されを焼け跡の光景はさながら

大震災時の東京の焼跡を想はしめたしかも夜十時頃からは雨さへ催し岡田區の小學校や焼け残された十數戸に收容された罹災民は相いだいては啾々と泣いた篠ノ井町二業組合の其の他篤志家から贈られたパンや米味噌衣類等を積んだ

トラツクは焼け跡を縫つて勇しく警笛を鳴らして通る麥畑の畦には運び出した家具布團にくるまつて親子相擁して泣き天の無情をかこちながら焼け残つた丸太棒で雨よけを作つて居るものもある足傷いた老婦がトボトボと消防夫にたすけられて悪臭と煙に掩はれたやみの細道を救護所にとたどる悲惨の光景である事よ焼け出された村民の一人は焼け跡の末だ消えやらぬ眞紅のほのほをうらめしげに見つめながら「この村は今まで通りにはなりま

せんよ明日は家族をまとめて篠ノ井の知己の家に厄介になりなすこんな災難にあつてはこの村がむしろうらめしい様な氣がします」と涙をのんだ其の悲惨の光景よ

掘り出した

米味噌で

飢をしのご

僅か二三時間にして焦土と化した共和村小松原の大火跡は廿日午後十時より烈しい降雨あり焼け残りのほのほもこの雨で跡方もなく消え失せたが罹災者の惨状はこれが爲一層甚だしく十一日は朝來快晴で部落民中にはぼつ／＼小屋掛に着手し焼け残りの米や味噌を掘り出して飢えを充するものあり朝來見舞客などでまるで戦場の様な光景を呈してゐる。

罹災者救助協議

共和村の大火で更級郡では共和村關係の十組町村會を郡役所に召集罹災者の救助につき協議した。

急施村會

萬地方課長

現場視察

縣地方課 萬事務官は罹災者の救助するため現場視察として廿一日朝同地に出張村當局と救済策を講じたが大澤村長の見込では百五十戸類焼者約千名の中貧困者五十

戸位でこれ等には今明日中に小屋掛けをなし收容學用品食料品等を給與する見込で廿八日朝至急村會を開いた。

更級町村會で

一萬圓寄贈

更級郡町村會は共和村の大火に一萬圓を贈るべく急きよ二十二日町村會を召集また郡内小學校に於ても各生徒からわずかづゝ醵金して罹災者に贈ることに確定した。

共和村へ義捐金

▲埴科郡埴生村軍人分會は共和村の火災へ二十一日見舞金五十圓を寄贈した▲篠ノ井高等女學校では共和村の大火に際し早速パンを買ひ求め罹災者に送り二十一日は上級生の授業を休んで應援した。

長野から二百圓

共和村の大火に二十二日義捐金として長野市は金二百圓を送つた。

(續報)

一戸當り

(四月二十三日記事)

百圓の救助金

農學生と木工學生

が復興に御手傳ひ

更級郡共和村小松原區の大火災現場に實地調査の爲め出張した本縣萬地方課長並に社會課栗林縣屬は廿二日歸

廳直に罹災救助金支出に付いて關係者の協議會を行つたが焼失戸數は百五十戸四百九十棟この罹災者約九百四十五人損害高百六萬七千圓これに對し縣では大體一戸當百圓をもつて約二萬圓を支出する方針であるがなほ其の他の救済方法は更級郡長に一任することに決した又罹災者の資産状態は縣稅戶數割平均額以上納稅者四十八戸同以下百五戸で學齡兒童百四十七人現場の跡始末に對しては消防組がすつかり疲勞したので更級農學校の全生徒が灰片付同郡中津村信濃木工學校の生徒がバラツクの建築女學生が衣服の配給等に大活動を行ひ一日増しに緒についで來た。

共和村の大火に

集まる同情

更級郡共和村小松原區の大火で長野市普及社上水社では同區出身女工小出かなめの親元が罹災したと聞き其の従身の上に同情し立ちどころに工女同志から金廿圓他の従業員仲間から十七圓五十錢を醵出して見舞金として送つた△長野製絲株式會社では更級郡共和村の火災で早速同工場に勤務してゐる工女の家に對し十圓乃至五圓づつの見舞金を贈つた△更級農學校寄宿生は二十一日更級郡共和村小松原の大火跡へ出動救護班の手傳ひをし目ざましい活動を續け又篠ノ井高等女學校で上級生は廿一日授業

を臨時休みフランネル單衣百枚を裁縫し午後罹災者に配布した東筑摩郡愛國婦人會では廿日更級郡共和村の大火に對し會員並びに一般から一口一圓以上の慰問金を募集して送る事となつた。

消防手に弔慰金

既報更級郡共和村の火災の歸途自動車と汽車との衝突で不慮の死をとげた同郡鹽崎村消防手中島今朝五郎(二三)に對し本縣消防同盟會では二百圓の弔慰金を贈ることになつた。

準村葬で葬儀

更級郡鹽崎村消防手中島今朝五郎が自動車と汽車と衝突して即死を遂げたのは職に殉じたものと認め二十二日午後一時同村天有寺に於いて準村葬を執行した。

小松原原の

(四月廿四日續報)

春蠶救濟

組合長會で方針決定

今回の大火で殆んど全滅になつた更級郡共和村小松原區は郡内屈指の養蠶場だけ有つて同區で毎年掃てる蠶種は約二千枚であるが二十日火災で蠶種千枚は悉く焼失した。郡是蠶種會社に保管してあつた五百枚だけは其難を免れたが共和村農會は二十一日急きよ農家組合長會を開き救濟策を協議したが到底例年の春蠶掃立までにはバラ

ツク建と云へども全部掃立の見込がないから掃立を數日遅らさせる事とし殊に一眠までの稚蠶は共同飼育をして配給し屋外條桑育をして急場の間に合せて收入を計る方針に決定した尙郡是蠶種會社の鎌田常務は自家の蠶種五百枚を無償貸與を申し出した。

更級町村長會

共和村大火へ義捐

更級郡では廿二日郡役所に臨時の村長會を開き共和村の大火に同情し各町村賑金して贈る事とし町村分區等と決定したが約二萬圓以上に達する見込で四日各町村長一同は打揃つて共和村を見舞つたまた同郡役所では篤志者の同情金で共和村の罹災者に着物九百六十八枚を新調して送るべく各女學校その他に裁縫を依託した。

大火の慰問金

小縣郡で募集

愛國婦人會上田幹事部の幹事會は廿四日午後一時市役所内に開會更級郡共和村小松原區火災慰問募集方法を協議決定し直ちに募集に着手する筈また小縣郡幹事部では廿三日各町村委員區に對して同様慰問金募集に就いて通知を發したが一週間以内に取りまとめる筈である尙上田市軍人分會聯合會では廿三日共和村分會長に宛慰問金五十圓を贈呈した。

報知新聞

(大正十五年四月二十一日水曜日市内第二版)

第一万七千六百八十四號

長野縣の大火百五十戸焼く

十數名の死傷者を出す

(長野支局電話)二十日午後二時半頃長野縣更級郡共和村小松原材木商松本和市方から出火し、折柄の烈風に燃え廣がり篠ノ井、長野、その他附近の消防總出で防火に努めてゐるが同六時までに百五十戸約六百棟と山林十三町歩を焼き盡し鎮火した原因は同家の孫金治(四ツ)がみそたき(味噌煮)の火を持ち出したためである、長野署から自動車三臺に二十數名の巡查を繰り出して應援につとめたが小松原共和銀行、伊勢布施神社、天照寺、を焼き共和街道に添ふ兩側約二十町宇小松原の南中北各區は焼け野原となつた、罹災者千餘名は小學校に收容した、なほ同字鹽田清(五三)は焼死し中津村消防手千野勇外數十名は重傷を負ひ子供五名行方不明となつた、損害約參百萬圓

報知新聞

(大正十五年四月二十一日水曜日市内第二版)

第一万七千六百八十四號

火事歸りの自動車衝突四名死傷す

長野支局電話(二十日午後十時二十分)長野縣更級郡共和村大火に出動した四名が(今里村)川中嶋驛前丸通運送店トラックに乗り、鹽崎村に歸る途中踏み切りで下り百三十三號列車と衝突し自動車は大破し消防手中嶋今朝五郎(二三)は即死し運轉手小沼忠義(二三)同助手宮嶋春雄(二三)その他消防手は瀕死の重傷を負ふた。

報知新聞

大正十五年四月二十二日木曜日

第一万七千六百八十五號

長野の火事で負傷六十名

共和村小松原區殆ど全滅

(長野支局電話)更級郡共和村火災に付き縣保安課の調査によれば焼失戸數百五十戸で同字のうち焼残つたもの人家半焼け一戸、類焼を免れたるもの八戸土藏二十で焼死者は昨報した鹽田清作(五三)の外瀧澤信工の叔母みや(五九)は二十一日朝死体を發見した重軽傷六十餘名行方不明三名損害約八拾萬圓。

防火宣傳 主催 小松火災紀念會 刊行

童謡 小さい防火宣傳隊

モシく皆さんおの中
 何が怖いといつたとして
 火事ほど怖いものはない
 何うして火事を防ぎませう
 明けても暮れても火の元に
 大人も子供も気を付けよう
 どこでも火事を出さぬやう
 みんなで注意を致しませう
 どんなに大きなお家でも
 一寸の油断で火を出して
 一たん火事になつたら
 見るまじ火の海血の涙
 につぼんだだけでも一年に
 二億のたからを灰にする
 火事ほど怖いものはない
 皆さん火の元御用心



大正十五年四月廿日（火曜日）
是ぞ忘れてはならぬ日である。朝早くより南風激しい日であつた。我等は學校へと發足して終業事がスミ、我等四名はいざ理科室の掃除といふので僕は箒を手にとつた、時に先生共のケタタマシイ火事だといふ叫び聲が聞へた、小出君等は飛び出した、僕はリンキオウヘンを知らんかと窓より飛び降り、小松原の出口にあらわれ小松原を望んだ、小出君はアレは瓦焼の煙だと言つた、教師は馬鹿を言へ火事だと言つた、小出君は飛び出した、僕も飛び出した。火元まで来た時に息が切れそうにくたびれたので、アヲ向くと火のコがもう頭の上を通つた火はエン／＼ともえ上り里村へと轉じ、見る／＼中にもえ廣がり天一带は雲か煙かと思はれるようになった。四方よりラツパの響き、人々のサケビ聲が聞えた。是れを聞き、見つめた、彼は顔は青ザメチンモク相の態度火の方

大火災

高二 堀内 忠義

◎當時小學校の兒童作文

へ目をすえた。私宅は煙で見へなかつた、僕は山道を通つて行こうとすると、村澤君が注告したので其は一まづ思ひ止めた、一面の火は北へ／＼と轉じた僕は死んでもよいと言ふ決心が心に浮んだので、私宅へ来て見ればアワレや灰となつて居た。我家内の人々が何方に居るのだらうと、山の方へ来て見れば近所の人々と、山手に逃げ上つて居た。家内の人に聞くと何でも出さなかつたと言つた。僕は嘆息した。しばらくすると、天照寺のおばあさんが来て私の家へ来て居なさいと言つたが、厩口に母親の親類があるので、其の家が残つて居たならばそこへ行こうと決議した。
僕は見に行つたら運よく残つて居た。家内一同は天照寺を通つて行く事にした。老人二人は天照寺に宿を取る事に決し、家内一同は厩口へと宿を求めに行つて見れば、野口君の家の人々も行つて居た。家も取り込んで居た。其の夜は何時もの如くに、白河夜舟には眠られず朝飯を食べて、家の後形を見に行こうと、舊道を通つて行つた時に、人々は集つて居た又、巡查も居た、野口君と近寄つて見れば可愛そうに一人が焼け死んで居た、其のそばに其の家の人々が泣き伏して居た。そばに居た人に聞くと老婆だと言つた。
我はそれより厩口に歸つて家内の人々と焼跡へ行つて篠

大火災



ノ井のガソリンポンプにぶつてもらつて、ナベ、カマ、チャワン等を掘出したら百以上も有つた其の夜の事であつた。
 ミシン、ドザンと言ふ音がしたのは恰かも土堤が崩れた如くであつた、其れは小松原のお宮の御神木が折れたのだと言つた。
 親類の人々は見舞にぞくぞく来て下さいました。見た事も聞いた事もない小松原の大火。

高二 塚田 光 商

私は学校の歸り、酒井と他一人連で遊びながら来た。苹果島のそば迄来た。すると、急に煙が天にあがつた、私は五焼きだと思つた其の内に一氣に火が天にあがつた。其れ火事だと走り出した時は二時の半頃でした。私は酒井におい小松原が全滅ならどうするかと云ふと、酒井もおいこまるなと云ひながら来た、三人で火事と云ふさはいだ、田に居た人は一度に來て鐘をはたくやらポンプを引出すやら、おゝさわぎでした。
 私は一息で家に來た、水をくんで屋根に水をうつた、私はとても家はだめだと思つた、往來は泣くやらさわぐやら、おゝさわぎであつた。野口の豚小屋に火はついた。

其の中に近所に煙一面に飛んで來た、家中の人が家の物を出し始めたもう煙が來て息が出來なく、もう天は焼け落ちるが如くにして太陽は赤く染つた。私はとても小松原は助からないと思つた。私は出した物をはこんでいた、もう日は西山にかくれた其の夜は物さびしいかつた。小松原の村は火の村になつてしまつた。一家はトタンをかぶつて其の夜はすましたがよく眠らなかつた、次ぎの日は來た私は近所をまわつて見た、物見ぐるしい光景であつた、其の中親類の人々が見舞に來てくれた、私は其の時はなんと嬉しいかわからなかつた。

高二 太田 武 雄

四月二十日午後二時半あゝこれぞわすれらる事の出來ない日であつた。僕は農業の實習をすませて、四五人の友達と曲り松の所へ來ると煙が見えた。僕は火事だゝと云つて來て見ると、材木屋は天をこがさんばかりにもえています。長田君はあゝ困るなといつて家の中へ飛び込んで居つた。僕はたゞぼう然としてしまつた。火は益々狂い、隣りの家についた。僕は氣を取り直して田甫を通つて家に歸り、らうじに鞆を置き屋根へ上つた。遠方をながむれば家はどん／＼ともへている、僕は母に出す

た。宿る所が有るかと思つたので、はあ、と云ひました。弟は居ません。僕は心配し乍ら家に歸り夕飯を食べて居ました。寝たけれども眠られません。少しうつ／＼とすると人が見舞に來てくれるので眠られません、朝早く起き家の焼跡に行き色々な物をひろつて居ました。ふと考へた事は一時間半ばかりで村全体が黒土となつたと思へば涙を出さずにはおられません。

高二 酒井 安 幸

用意だと言いますと、母はそうかと云つて家の中へ入つた。其のうちに父がかけて來て僕にそんな事をして居たつて駄目だと思つたので、そうかいと云つて下に降りて見れば、弟が泣いて居るので泣いたつて仕ようが無いと云つて家の中へはいつた其して二階に上り、父の衣裳を出して、下に降り畠に置いて少し休んで居ると、家の中から親類の人が俵をかつぎ出して來ました。僕は元氣百倍、まつしぐらに家の中へ飛びこみました。其して火ばちを出し、寺の所に行つて見ますと、人がこれからどうすればいゝかほうにつかないといつて、無じや氣にも泣いて居る様は實にあわれで涙を出さないでは居られない。

下に降つて行つて見ると僕の家は半分もえていました。家の物は何處に居るか分りません、其處らじう尋ねて見ますと苹果島に居りました。父は噫々文庫様の文庫倉がやけると云つて居りました。何を云つたつて、此の猛烈な風ではポンプだつてなんにも無らないと親類の人が云つてゐました。其の中に雨がぼつ／＼と降り出しました。先づ寺を借り、出した物をはこびました。家の中へはいつて見ると一人の弟は居ません母は見つけに行つて來いと云つた。僕はいや／＼乍ら行つた。下にくだつて小山先生にいき會つた。先生は如何にも僕等を可愛相に云つ

四月二十日第五時間は實習で有つた、終つたので庭球をやつたが、うまくあたらないので塚田と二人で家の方へ足を進めた。おい塚田今日はいらい風が吹くな「うん酒井、さいの河原が山火事のやうだと話し合つて居たがそのうちに飯田が後から飛んで來て、塚田いらい煙が出るではないか噫々事によれば火事ではないかなと、三人で話し合つて、だん／＼家のそばに近づいた時材木屋の小屋が燃えて居た、間もなく鐘がつけさまに鳴りだし、酒井もう此の家は助からない。うんもう駄目だ。などと云つて未だ呑ん氣になつて居た、其の中に火は勢力を出して、いせよく燃えだして近所の家の屋根にまで移つた、是れは大變だと言つて田畑の中をむちうになつ

て飛び出した。塚田は何處へ行つたか居なかつた。急いで家にかけて見たら、家内一同水やネコを屋根にかけて居た。こんな事をして居たつて駄目だと云ひ乍ら戸を開こうとすると、本家の家の人がそんな所をあげれば火が舞ひこんでいけないと云つたので、つめて僕も水をはこんだが間もなく上の家が盛んに燃え上つて居た、是れではたまらないと云つて戸をはづして庭に出して神の棚に手をかけたがとどかない、やぐらを持つて来て、ようやくの事で庭まで出して又も家に入つて箆箆をにない出したがもう煙につまつて居られない、弟を連れて家の東の田迄で飛んで行つた。

近所の女の人は泣いて居る、火はおだんだから子供を連れて家のそば迄来て見たら家は白灰と變つて居た。家の人は出した品物のそばで番をして居た。道もあるける様になつた子位は達者で居たかときいたので「アイ」と云つた。

夕方に近づいたが何處で宿ると考へた末、犀口の親類で宿る事に定めて子供一同と母とで宿りに行つた父と祖父さんとで出した品物の番をして居ることにした。一夜を明して翌朝になつた、食をしてぞうりばきで家をさして来た。消防手のお蔭で灰をかたづけ貰つた。

近村のお蔭で米、麥、味噌、醫油他色々の道具を貰つ

私は三人をなぐさめてやりました。ちかちゃんの家の方へ行かれないのだから、もう少し待つておいでと云つて居るともう私の家の棟は落ちてしまひました。皆の者はあきらめて居ました。其の内に夕方になつた、其して雨が少し降りました。そこへ兄さんが學校より歸つて来て、私に本を出してくれかと云つたので私はだまつて居たら兄さんは泣顔をして居た所、お父さんが来て兄さんに長野の家へ行つて、明日から家が建たる迄で厄介になつて學校へ通ふがよい、と言つたので兄さんは泣き乍ら川中嶋をさして行きました、其のうちには日が没すると私共一家は犀口の貸家へ宿る事にした。私は其の夜土堤に上つて向を見れば火があちちこちらに燃上つて居りました。お宮の御神木が燃えて居たので心配でなりません。翌朝床より起きて見たらまだ火が燃えて居ました。焼け後を見たらかなしくなりませんでした。焼けたお茶わんを拾つて犀口の家へ持つて歸りました。

高二 松坂りきの

四月二十日火曜日午後二時半頃の事でありました。私は友人と家へ歸つて行く途中ふと山を見ると、煙が山を通

た、今では大變心も落つき家も建てたが、まだバラックの中で日々を送つて居る有様である時の殘景以向。

高二 野口うめ

四月二十日火曜日午後二時半頃の大火災である。

四月二十日の火曜日の午後の時業が終りましたから、直ぐに家をさしてあるきました。私の友人と話をし乍ら歩いて材木屋の近所迄で話をつづけたが、不意にいやな臭ひがしたけれども材木屋の前を通り過ぎて、二三軒家を隔だて、後を向いて、材木屋の方を見ると煙が大空へと上つて行く、その内に火が見へたので私はおそろしくなつてかけ出しました。其して中組の中ば迄で来ると精米所の屋根に火が燃へて居つたので一生懸命でかけ出しました。私は鳥居のそば迄で来るとお母さんがお出になつたので、お母さんといつしよに家へ歸つて二階の雨戸を閉じて机の上に有つた本を下へだいて鞆に入れて佛壇の前に座つてお祈りしました。そうして居るとお母さんは早く何かを出せと言つたので、着物を出して二度目には布團を出して、三四度家へ入つて色々な物を出しました。私は出した物の番をして居ると妹が妹をおぶつて泣き乍ら、北の家のちかちゃんと三人で泣いて居つたので

つて北へ行くので、私は後を見ると材木屋がどん／＼もえてゐる。それから鐘はデヤン／＼鳴るやら、人は来るやら、其の内にポンプは来るやら、私共はこまるなあ／＼と云ひしま行つて見ていたが、やがてとなりの家へついたらから私はあの風で火のこが飛んで来てあぶないから、こまるな／＼と云ひしま家の方へ飛んで行くともう精米所へ火が飛んで来てどん／＼ともえてゐた。私は急いで家へ行つて見ると家の者は誰でも居ない。ただ子供だけ居た私は泣きそうな顔をして居ると親類の人や他人の人が来てくれて家の物を出してくれました。私も出しました。それで休んで見て居ると先生方や巡査様や村長さんや其の他の人がたくさん来ました。其れから親類の人や其の他の人がへいお前の家は助かると云つたので皆家にいれましたそれで私の家へ三四軒宿りました。

高二 馬場けい

四月二十日私ども五時間の授業をすましてから、學校の歸る道々此の風の強いのに火事がなければよい、とさ／＼やいて材木屋の前を通り過ぎて二三軒の家の裏に來た時後をふり返つて見るとむく／＼と煙が立つて居りました。近所の人々が皆飛び出して来て火事だ／＼と云つたので

私どもは皆一さんに飛んで火事の方へ行きまして、その家のグンまで燃へ上がるまで見て居ました。そのうちに一人の消防手が来て皆家に行けといつたので、私は息をこらして家に行きましたら、もう向ふの家の物置が焼けて居て家へはいる事が出来ませんでした。私は裏を廻つて家に飛び込んで見ると誰も居ません、唯おばあさんがこたつに、からむしをつないで居ましたので私は直ぐおばあさん火事です。出なさいと云つて、直ぐ部屋に入つて机と本を出した又、佛を持つて茶の間へ来て見るとまだおばあさんはからむしをつないで居ましたので、私は袖を引つばつて表へ出ますともう西隣りの家がどん／＼燃えて居ましたので、私は東の方へ行くとする東の家が燃えて居ましたので私どもは逃げる所が無いので、土藏と家の間をくぐつて、やつとの事で田の方へ出ました時私はもう胸一杯になつて泣いて居ますと、火元の方から父母と兄が飛んで来ました私におばあさんはと、云つたので、私は出ましたと云つて又、家に入らうとする父が叱りました、私は其處に居て火元の方を眺めて居るとお母さんが、光雄はと云ふと私は何も云はないで其處ら中を見廻して居ました、けれども中々見つかりませんので私は中組の方迄で行きました。けれども見つからないので私は力を落して其處にぼんやりとして居ますと親

類の人々が来て家の人はと聞きましたけれど私はゆびを指したきり物もいはないで子供を尋ねて居ましたらお母さんが、大川の方から親類の人と話をし乍ら弟をおぶつて来ましたので私はやつと安心してしやがんで居りますと親類の人々兄さんの友達や私の知らない人が来て見舞してくれました、私の家の者は皆家に二度入つた者はありません、そして家の燃えるのを見た人はお父さんきり他の人は誰れも見えて居た人はありません。つまらないのは今年建てたばかりの土藏はもつてなかつたので、皆人が云つてくれました、考へて見れば私はそう思いました、そのうちに日がくれて来てもうあたりが見えない頃前の家に入りました時、私はお母さんと裏の方へ行つて家の焼けた後を見て居りますと長野のお叔さんが来て色々話しますと長野の方へ燃えほこりが飛んで行つたそうです、私は北組の方を見ると其處らちうから提灯が連り合つて歩いて来た其の内の一つの提灯が私の前に来ました、誰かと思つたら南原のお叔さんがおむすびを負つて来ました、私は家の中に入つておむすびを貰つて食べましたが咽喉に行きませんでした、そうして私の家の人に東、中組、北組の親類の人が皆一軒の家に入つて寢所をしいてもらつて寢ると私供は眠られませんでした、その晩は私共皆はざわ／＼して居て夜明しをしました。

高二 小出 よし

四月二十日火曜日午後二時半の大火災の事である私は友達と一しよに學校の歸道でした「コク屋の家まで来た時はもう材木屋がどん／＼と煙が出て来たので後から来た人々が火事だ／＼とさけびましたので私共は又もどつて見て居りましたが其のうちに遠い精米所へ飛火して、どん／＼と燃え始めました私はそれを見て家へ飛んで来ました、家へ来た時は親類の人が来て居ました、私はこはかつたので直ぐ上の畑へ逃げました、お母さんが一番真先内へ入つて、お如様を出して親類の人々も布團等を出して居りました、私も下へおりて自分の着物だけでも出さうと思つて下へおりて見たがお母さんが危ぶないからいけないと言つたので又、上へ登つて居ました、其のうちに横町のお叔父さんが汗を流して自轉車に乗つて来ましたお叔父さんが私にもつと上へ行けと云ひました、私は麻久保の山へ登りました。麻久保へ行つて見たら畑の中に牛や豚等が逃げてあちらこちら飛び廻つて居りました、私はをかしいやら、せつないやら何だかわかりませんでした、其のうちに向ふの家だったので私の内の人々も親類の人々も一さんに山へ登つて来ました、其の内

火事も鎮火して夕方になりました、私供は家内一同で今里の内へ行きました、明日私が家の人と今里の人々と、今里のぼこをおぶつて家の焼跡へ来て見たら、籠や、綱等が重つたまゝ、灰になつて居りました、灰の中をかぶ／＼はいつて見たら、鍋、釜其の他家財道具や農業道具等が皆焼けて眞赤になつて居りました、私も手傳つて拾ひ始めたが兄さんが、ぼこの目へ灰がはいるといけなから田圃の方へ行つておいでと云ひましたから、私はかぶら／＼と田圃道を歩いて居りますと、向ふから文子さんと、まともさんが来ました、聞けば焼けない友達へ明日學校へ十錢以上お金を持つて来るだと先生に云ひつけられましたそうです、りきちゃんの家から離れてふいちゃん、けさをさんの所へも行くのだと云ひましたから私は其の案内を致しました。さうして友達と大變遊でました、其のうちにお晝になりましたから今里へ歸つて行きました、噫々驚いた四月二十日午後二時半の大火災、此の火事は何時まで立つても忘れられない。

高二 西澤 武雄

四月二十日の午後一時半頃であつた。僕等は東のコートで庭球をやつて居たが、西南の風が吹いて来て砂が舞つ

たり小石が足にあたりたりして庭球が出来ない。其の時僕は頭の中でこんなに風の吹く日に火事があればこまると思ひながら庭球をやつて居つた、瞬間東より火事の鐘がかすかに聞へたので庭球をやめてラケットを持つて東の道まで来て見たが鐘の音ばかりで火事場は判然と別らなかつたので又、庭球をやつて居たがだん／＼に鐘の音は繁しく鳴つて来たので網をまるめてラケットを其の場に置いて役場の東へ出て来て見るときは黒煙増々空をおほつて居たので僕等一同は一サんに走り出した少し行くと二人の女生徒が小松原の瓦焼の近所だと言つた。其れから光林寺の大門の所まで来ると段の原の消防が出て来たので其の後を押して行つたがいきが切れそうになつたので後を推さないで行つたすると又消防手がおい少しポンプを引いて行けと言つたが僕は其の命には従はなかつた。其れからだん／＼向へ走つて行く。後からは自轉車がひつきりなしに来るが道を横切る事は出来ない。漸々の事で東側へ来た。其れから曲り松へ来て見ると材木屋は火煙と化つてしまつた時は隣の瓦焼に移つて居たそれから少しつと北の方へ二三軒火が移つたかと思ふと小松原は一面の火になつた、其れから畑の中を通つて篠の井のガソリンポンプの所へ行つて見つゝ其れから北の方へ行つて見るとまだ火は燃て居た。が奥へ／＼と行

つた所が兩方の目はごみが入つて痛くて仕方がないし、煙が鼻の中へ入つてムセツボクで仕方がない、其れからだん／＼奥へ入つた、僕等の同級生の家も全部焼けてしまつた其れから鳥居の下へ来て見ると鳥居の上の横棒はトコン／＼と燃えて居た。お宮へ来て見るともうお宮は灰となつて御神木は焼けて半ばから折れて居た、其れから罹災者は寺と小學校にノガれる事に決定された。岡田の人達からは焚出をしてやつた、又此れを復興するは今後我れらの希望なり又、其の焼跡の慘憺たる光景は何時我等の目を離れるであらう。

高二 松坂 正勝

四月二十日の事で有つた農業の實習終り鎌をかつぎて、皆と一緒に歸り學校から西澤君や酒井君と一緒に家路につきました。一本松の向ふの所迄で来ると火事だと云ふ聲が聞へました、長田君等學校から飛んで来ました酒井君はあの小屋を轉ばさないとだめだと言ふ聲が聞えまじだ。其の中に益々火は廣がるばかりでした。少しつと北組のポンプが来ました。堀内君のお父さんも来ました僕は唯胸がドキ／＼と早打をしました。見て居る内に精米所の家の屋根につき見る間もなく焼落ちました、僕等

はどん／＼逃げて行き後を振り向きて見ると天は黒く火赤くまじりもろ／＼立上る煙は天も焦すばかりでした。鐘はくたびれた聲も出さずよく鳴り續きました、僕は犀口まで来てやつとおちつき水を運んでやりました、又天は、なを曇りお宮までもえそうになりました僕は唯胸が静かにならずかばんを取り、行こうとすると南組の清水と云ふ家の、父さんが来て伯父さんの家はとくに焼てしまつたと言ふと伯父さんは、うん焼けてしまつてもよいと言つて平氣で居りました。又自轉車に乗つて来る者もありました、飯塚ふじ江さんが東飯田の婚禮と云つて早歸りをして僕の通る道に立つて居り火は何處の邊だと聞きましたから僕は中組はもう全くだめだらうと言ふと、青い顔をして家に入りました僕と西澤君と一所に道を急ぎました。新橋のあたりに来てはまだ天は雲つて居りました。

したそうです。僕はまあ犀口が助つてよかつたと思つて中組迄で来て見ました。其の慘状は見られない程でした。焼残りは所々に累々とし居り恰も東京の大震災に負けな有様であらうと思はれた。二十二日の配給の日は足をいためてまで一生懸命にやり火災に遇つた人々に少しの助もしてやらうと思ひました。二十六日の日からは皆の心はそうぞうしくさわぎて勉強もよく出来ないようであつた。

高二 西澤 正治

四月二十日の日は天は晴れて農業をすまして歸る途中二時半頃風は強く吹ききました後をふり歸へると或る人が忙しそうにとんで来ました。何用がありて飛んで来るのでしょうかと思ひ向ふを見ると黒煙が少し立つて居りますのでもとの曲り松の所迄で行くと火事だと云ふ一聲天地もくづれんばかり僕等二三名は松本和市と云ふ家迄かけつけました、小屋からもえ上り今正に本屋につかんと云ふ時なり人々かけつけて色々出し始めた僕等は急いで家へと向つた所にくづ屋根の家があると其の家へ火の粉がまひて所々につき始めて人々の聲は聲亂した。家に歸へりて直ぐ犀口迄で来て見たがああ尊い、天照太神の社は燃

えて居りました其れから二三日休みにて、配給をやりました人々の心はどんなであつたらう。僕等は配給をやつて居りますと、一人のお祖母さんが早くおれの家にくばつてくれて下さいと云ひました何も皆焼けたからどの位せつないか分りません、小松原全焼したと云ふ事は此の邊には珍らしいといはれました。

夕方兄上は二人で親類の家の人々に家で使ふ物茶わん、ランプ、酒等を色々と持つて行きやりました。焼けた家の廻りには消防手、人々が黒山の如く居りました。人々は腹が減つて困ると云ふ人が多くありました火は全く鎮火してしまいました。

學校に來る途中は色々と見しま來きましたが随分家が所々に建てられました。人々が云ふにあの大風の爲が、悪風の爲であらうと云はれて居りました。あの立ち竝んで居た家も今はバラツクの家と變り又、新に立てた家もあります其の家を見る度にあの惨況の事が思ひ出されます。此ん度の家の屋根はトタン板又サ、板又は瓦にてふきました。あのはくづ屋根の家は有りません。

高二 大澤 麻男

大正十五年四月二拾日は我等一生忘れない日でありま

す。五時間の實習をすまして歸る途中土堤の鐘が鳴る「すわ」大火と四方を眺かむ我が心は踊るよう、田圃に居る人、道をあゆむ人皆小松原の方を向く。

僕は直ぐ友人と二三人或る店に「カバン」を置いて夢の如く走りて行く、其處へ唐木田が落膽の顔をして走り行く、一本松の所に行く「嗚呼」もう三四軒焼え火はまだ他村に燃いつけよと虎の如くうなつて行く、僕は高い山に登り下を見降すと村は一面に火の海となりました僕は直ぐあの急坂を夢の如く飛びくだつたが「小出は僕の家が危いから兄さんが學校に居るから直ぐ迎ひに行く」と走り行く。

一軒、一軒落ちる棟、泣く子供の聲して實に筆、口に言ひ難し。

今度は僕の親類の家に行く途中川に落ちてぬれ鼠になつて居てもこんな事はかまひません、直ぐ家に入り鎌鍬などを出したがもう屋根の頂上につたので自分の身が大切であるから砂山にかけ上つてその焼ける所を見たが、二三十分間に蠶室の本家が焼けて、土蔵が残りましたそれで友達の内や小出などを見ましたが小出の家は土蔵が残る堀内の家は全焼でした。

最早宮までも天をこがす様に焼始めた、太陽は西山に落んとして居た時火はまだ他村までも燃えつき顔をして走

高二 西澤 初

り行く、僕は其の時歎息して自失したような氣がした僕は家に歸らうと思つて後を仰ぎ見れば火はまだ鎮火しなかつた、郡道は消防組がまたかと思へば又來てたやすく通る事はせずして歸つたのであつた父は家のシートを持つて行つて貸しました。

習日焚き出しと云ふ事になりました、僕の家ではむすびを箱に入れて役場へ持つて行きました。其の他着物、セトモノなどを罹災者に少しも多くやりました、焼け野が原を見に行く人は少なくはありません。

習日六年以上は配給に行く事になりました。諸方の學校役場、商店、株式會社などからも皆寄贈が有りました、その同情の心は仁恵精神の人と言ふべし又その恩を受けた人は如何でありましょうや。

それでかりに亞鉛板屋根のバラツクに入つておりますがあの廣い善い家に居たのが急に狭くてたまりません、それだけでも、昔の歌に「住めば都よ我が里よ」とあります、六日ばかり立つと又その事情を見に行きましたが、居ても立つても感に打たれたようである、其の事を考へれば又、復興にしようかと考へれば慘況たる鐘景に見るべき事がありませぬ尙皆一生懸命に働きますや。

大火は四月二十日午後二時半頃發火した。僕は歸途に歩いて居た歸つた瞬間鐘が鳴り出した。僕は氣狂の様なやつて何處だ／＼と云つてついに向原に上つてしまつた見れば小松原方面である、これ大變と氣を躍らせて我先と向原を下つて曲り松に着いた、火は愈々廣がつた。僕等は立つても居てもいられなくて寺澤君と一語に諸方をホソウして走つた。何處の人であるか「まあ困るでは有りませんか内の小供が何處かへ行つてしまつて」とまるで狂氣の様になつて話しかけた。「何處へも行きはしませんは、あの近所にも居るでせうから心配をしないで居なさい。これも自分一軒でなし村全焼ですもの」と話して居つた。それよりボウ風は益々強くなつて來た、僕と寺澤は、君どうしたならよからうと、思つて居りました所が、他村の人が此のお宮までがもえるのにどうして助かりようと話して居つた。歸つて來て見れば母は忙しくムスビをにぎつて居つた。翌日になると手紙が來た、ひらいて見れば、天ピン棒とざるを用意して來なさいと書いて有りました。僕は仕度をして家を出て校途についた。集る鐘が鳴つたので体操場に集つて校長先

生の話の色々と聞いた。所が先生が今日は配給物を配るから灰かたづけわしなと言つたので學校に道具を置いて、二列に並んで小松原に達した、来て見れば配給物は澤山有つた、僕の受持は小出先生であつて、次から次へと、配給物を揃へて居た、僕は其れを配るので有つた、僕の配る家は庄田君と福井と云ふ家の二軒であつた。僕は走り足にて配つた。太陽は西山に没した。翌日も又來る事になつた。貰ふ人も有難い感謝に涙を流して居た。僕等の思ふに此の村が立つか、立たぬか此の二つの中の一つを祈つて居ります。

高二 飯塚 ふ 玄江

四月二十日は私共に取つて忘れる事の出來ない日です、丁度其の日は幸にして向ふの家に用が有つたので學校の方は一時間で暇を貰つて歸りました、私が歸る時にはまた此んな事になるとは夢にも考へなく通り過ぎて來ました。それからお宮の前へ來ておまいりをしたが何んだか其の日に限つては唯一人お宮に遊んで居る人がなく心細くてたまりません、其れから家に走つて直ぐ向の家に行つてお手傳ひして晝飯をすましてから間もなく鐘が鳴出したので私は火事だと云つて外へ飛びだしました。表へ

出て見ると人々は皆眞さをになつて何處だ〜とさけんで居ります又私も、むねをどき〜させながら向ふの方へ行つて見ると村の方から煙がどん〜と立ち昇つて居ます、私は村だとわかつたのであはて〜家に來て父に私共の村だから早く行つて下さいと言ふと父はあはて〜走つて行つた私はまだ心がおちつかない、鐘は益々繁しく鳴る其の内に私の家のそばの人がもう南組は全滅たと云ひましたので、私は猶立つても居てもたまりません、私其から家の中へはいつてぼこを妹におぶして私と母で家の中の物を運び出そうとしましたがどれから手をつけてよいかわかりません、まご〜して居る内に父が歸つて來ました、聞けばもう北組の邊りまで燃えて來て居るからもう家の物は皆出した方がたしかだと云つたので私はそれから家の物を出しに取りかゝりました。其の内に親類の人がかけつけて來てくれた、其の時はもうお宮の森がどん〜と燃えて居る其の内に消防は土堤の上を二臺ばかり走つて行く一寸と目が向ふむいたと思ふと直ぐ目にうつたのはそばの家がドン〜と燃えて居るそれは友達の家だつた。もうお宮も燃えてしまつて跡形もない其の事を思つて居る内にもう太陽は西の山へはいろうとして居る風は益々強く吹いて來る私は土堤に行つたけれどさむくて居られない、其の中に火事はやつとやんだよ

うである雨がぼつ〜降つて來た噫私の家は助かつたと思ふと、足のつかれが出て立つ事も出來ない其れからもうだいたい丈夫だと思つたので品物を家の中へ入れ始めたもうあたりは暗くなつて來たまだお宮の御神木はとか〜と燃えて居る長野の家からむすびを持つて來てくれた其をたべて夕飯とした其の夜はまだ家の中はごた〜として居たのでやつと寝る所を造へてさびしい乍らも寝た。

高二 山口 三郎

四月二十日の事である僕が學校から歸つて島に出た途中ふと北の方を見ると黒煙がむく〜と立登る、僕は何事と思つてしばらく見て居たがやがて警鐘の音が聞えた、間もなく火事だ〜と云ふ聲がほう〜からさげび出した、僕はあわて〜家に戻つた其の内に益々煙ははげしくなつた、人々の聲や警鐘の音に天地をひる返すばかりになつて僕はじつとしては居られない程である、火は段々けつた時は道は人々で通られない程である、火は段々と移り小松原は火の中に包まれてしまつた。私の心は如何であつたかわからない、聽て一人の老人が息もたへ〜になつてかけて來た。僕はそばにあつた棒を取つたきりもう何處へも動けない、ふと見ると二三人の友達が

ものも云はないで飛んで行つた、見て居ると何か持つて唯飛で廻つて居る、時は夕方近い頃である、かなしさと、さびしさに胸一杯になり唯ぶら〜さまよつて居た。空を見れば二三羽の鳥が鳴き乍ら飛んで行く姿を見ると實にさびし相である、是れこそは死ぬ迄で忘れまいと思つて居る。火はだん〜とをだんで來た、僕は家に歸つて何か考へて居たが再び外へ出て見ると一層風が激しくなり僕は意地の悪い風と思つたが然し、運命と思ふ外はない聽てラツパの音がした、あたりはし〜んとしたはまだ心はざわ〜してならなかつた日は西山に没してしまつた。僕は今日の大火災は永遠に忘れなれないと思つて、心も落付き深い心に變つた。

高一 小山 芳之

四月二十日の日の事である。僕等は其の日の授業がをへて家に歸らうとすると思ひもよらぬ鐘の音が、ジャン〜と聞える。僕等はすぐ學校のうらにはに出て見だした。僕は一目散に火元にかけつけた。見れば其の日の烈風にあふられてあたり一面は火の海と化してゐた。僕もただ見て居られない。一目散に家に歸つた。直ぐか

ばんを投げ捨て家の物を出した。家の物をみんな出してしまつたので僕はまづ一安心した。宮の方を振り向いて見れば火は益々勢ひを持つて邊をなめつくして来る。其のうちに宮についた。宮もわけなく、なめつくし、今度は宮の森についた。最早ポンプは百だいても来てゐる。消防手の働きはめざましいもので、森の火は消された。僕の家はやつと難をまぬがれた。其の時は何時しか太陽は西の山に沈んでゐた。だが、宮の御神木の火はきえない。僕は其の晩は夜どほし起きてゐた。翌朝僕は焼跡を見に行つた。まるで戦場の跡な騒ぎである。僕は早く小松原が復興してくれればよいと毎日心から祈つて居ります。

高一 小山 政 伊

四月二十日の日の事だ。僕等の住んでゐた小松原は大火事であつた。其の日僕等が教室で授業をしてゐた時、風はうなりをしようじて吹いてゐた。放課後僕は塚田と一緒に學校を出た。あみ屋の前で僕が、「今日の様な日に火事でもあつたらでかくもえるだらう」と云つた。其の時段の原で鐘がちゃんぐぐぐと鳴つた。ふと向うを見ると煙がえんぐりとたつてゐた。僕は自分の家だと思つて

死者ぐるひにかけて行つた。そして曲り松の處まで行くともう、材木屋は哀れ焼け失せたか裏山へ燃え移つてゐた。田の方へ廻つて見ると最う町田の家はぐしが落ちてゐた。折りからの烈風に消防手も手の出し様がない。最う小松原は一面の火の海となつた。人は皆泣いてゐた。僕も一時は泣いたが僕は氣を取りなほして家を見ると最早家は燃えてゐた。そして僕は山の方を廻つて家の方へ行つて見た。家では母と兄とで蒲團などを少し出したきりだ。其の晩には向うの家が残つたので向うの家の人皆きてもよいと言つたので家内一同は向うの家に行つた。向うの家には近所の人皆行つてゐた。火事のひなを言つてゐる。或人はこんな日に小供が火いぢりしてもおこらない人はあんまりだ、など云ふ人もあつた。僕は下の方を見ると火はまだいう然と燃えてゐる。親類の人は飯を持つて来てくれる、或人はまるで東京の震災の様などと云つてゐる人もある。

皆は夕飯を食つて床についた。多くの人は夜もすがら寝ずして火事の事を話してゐる。其のよくく日小松原を廻つて見ると、小松原一面は焼野ヶ原と變つてゐた。中で僕が一ばん悲しかつたのはお宮である。森の木も大ぶ焼けてゐた。御神木も折れてゐた。近村の消防手は皆きて焼け跡をかたづけしてくれる最早や或家ではバラックを

立てゝゐる。僕は焼跡をじつと見て涙にくれてゐたそれは此の共和村が更級郡でもくつしの貧乏村となつたのだ。僕はこれから後人一倍學問し人一倍働かうと思つてゐる。そして共和村が再び金持村となる様に心がけてゐる。近村の人達は何かと持つて来てくれて、くばる處には山の様積んであるそれを思ふと東京の震災などに何かやるのは少しも惜しくはない。大ぶバラックが出来た。僕等焼け出された人は皆で力を合せて小松原の復興をはからう。

高一 金 兒 富 治

二十日の日の午後の出来事である。僕は五時間の授業が終へたので友達と一緒に勇んで昇行口に来た。そして下駄をはいて校庭に出様としたと端、ジャンぐぐぐと云ふ鐘の音に僕ははつとした。それは火事の知らせであつた。僕は思はず火事だぐとひしめきながら校庭を一目散に走つて道路に出た。

そして四方を見渡すと火事はどうやら小松原の南組らしい僕は岸口でなかつたので一安心して小便をまつて居ると、そこへ運よく妹が来た。僕は妹をつれて一散に火元のほゞわかる處までかけつけた。すると火元は材木屋ら

しく大勢の人がわあぐとあわてさげんで居つた。子供の泣聲も中からやかましく聞えてくる。僕はもう道路は通行出来ないと思つたので、こんどは妹をかばいながら畠の中を一目散に安全地帯まで逃れた。けれども折りがらの烈風の事とて如何ともしがたく、南組は最うものゝ五分たつたかたゝない中に早くも火の南組と一變してしまつた。僕はもうこうなれば一時も早く家に行つて家の中の品物を出さうと決心した。そして神社をめぐりて一散に走つたが、氣があせつてゐて思ふ様にうまく走れなかつた。やつとの思ひで中組のはづれへきた時は、最う中組も大半は火に包まれて彼の烈風に火の子は散り、すさまじい勢で燃えてゐる。僕は最うこうなればむろん僕等の住んでゐる岸口もだめだと思ひながらも僕等兄妹は一生懸命だ、やつとの思ひでお宮にたどりついた時はもう北組も二三戸が盛んに燃えて居つた。僕がいきせき切つて家に走りついた時はもう、今までのつかれた足が容易に運ばれない。けれども此處ががまんのやり處だと思つて家の中の物を運ぼうと思つて家の中に入つて手あたり次第家の家の物品を外に出した。そして弟や妹を先に川原へやらせて僕はしばらく家をけいけいした。暫くするとお宮の森から煙が立ち上つた、まもなく火はお宮の本殿についた。僕はぐずぐずして居れば自分の身が危いから

一人川原に避難した。そして出してある蒲團に水をひたした。毛布をかけフツンの傍に腰を下した。そのと端助けてくれ。助けてくれ。と云ふ人聲、僕は不思議に思ひながら土手に上つて見ると萬年河原の土手頭の家が四軒一緒にミリミリ。パチパチ。と恐ろしい勢で燃え始めた。助けてくれ！はそこからもらした言葉だらう。すると今が今まで北風の烈風であつた風が、急に西風と一變してしまつた。其の風こそは神風である。僕はやつと安心した。すると隣にゐた酒屋のおばあさんがじごくで佛に合つたとは此の事だと言つて、始めてにこくと笑つた。そして傍に居たはづの弟がゐない。僕は心配して四方を見たが居らない。僕は仕方なしにお宮の處まで行つて見ると、弟は元氣でガソリンポンプの働を友達と語り合つてゐた處だ。僕はいきなり弟の顔をはいた。そして物も言はずに家に引ばつて來た。間もなく風も靜になつた。火も大ぶ弱くなり鎮火した様子である。僕達一家はやつと安心して、前に出した蒲團や色々な道具を内の中に入れた。が火事の前に出す時よりは、どの品も重くてやつと六時頃までに家の中に入れた。が暗がりの事とて何もよく出來ず、座敷に蒲團を引いてゐた。九時頃になると中嶋のおばあさんがにぎり飯を持ってきて下さつたのでやつと空腹がなほつた。そして其の夜は不安心

な思ひで床についた。

高一 町田文雄

四月二十日僕は今日にかぎつて、はんてんも着ないで學校に行つた。朝のうちは暖でなんでもなかつたが、お晝頃になると急に恐ろしい風が吹き出して來た。僕は四時間の授業の時間に綴方を書いてゐた。やがて出る時間になつた。五時間目は理科であつた。五時間も、六時間も理科をした。六時間は終へた。僕は教室の掃除であつた。少しすると小松原が火事だ、と云ふので東の窓をのぞいて居ると少し煙が登ぼつて居た。僕は始は互焼の煙と思つてゐた。が煙がだんだん澤山になつて來た。僕は気がなかつた。そのうちに段之原のポンプも行つた。僕は友達が早く行つたつてよいと云つたので家へ歸つて行つた。僕はあいにく今日荷物を持つてゐたのでよくとべなかつた。小松原の入口まで行つた時にはもう村の中へはいれなかつた。ポンプも、消防手も、道は行かれないので皆田の方を通つて行つた。村の入口へ行つた時には僕の家は最う一面の火であつた。此の暴風では小松原は全焼であると思つてゐた。人の言ふには火の元は小松原の南組の材木屋でしかも南の一番端であつたと云

ふ。折り柄の烈風で火はもう、火元の近所よりずつと遠く離れてゐる。家へ火が早くついたと云ふ。僕は田の方へ行つて田のあぜに腰ををろした。僕の家は早く焼けてしまつた。僕はあきらめて人の家の燃えるのを見てゐた。寫眞機を持つた人が彼方からも此方からもとんでくる。最うお宮も焼けてまんねん河原の方も燃えてゐると云ふ。小市の方は屋根へねこをかぶしてすつかり用意をしてをいたと云ふ。もうだん／＼火も消えて行く。僕は家の焼跡へ行つてみると家の處はよくわからなかつた。

高一 高野喜久治

人は南組の方に親類のある人は、親類へ行つて物を出したりして家へ歸つた時には家がもう燃えてゐる様な事である。火元より遠くはなれてゐる家より火元の方が物を澤山出したのである。あゝ小松原の大火僕は夢みる様である。

僕は段之原の親類へ引き取られた。次の日友だちと一緒に焼跡へ行つて見た。見舞に行く人と焼跡を見に行く人で随分騒であつた。だん／＼北の方へ行つてみた。木はみんな真黒になつてゐた。何處にどの家があつたのかさつぱりわからなかつた。まだ少し燃えて居る處へ水を掛けたりしてゐた。火事の日夜雨が降つたので大低火は消えてしまつたが、もう雨が降らなかつたら朝まで澤山燃えてゐたのであろう。御宮へ行つて見ると御神木が燃えて居りました。どの人もみな田へ出たばかりに材木屋が火事だと云ふので皆火元の方へ行つてまさか自分の家が燃えるなんては思はないで火元の家の消火に務めたが、もう火元はだめと思つて自分の内へきて見ると近所が燃えてをる様な事で、又北組の方の

四月二十日火曜日であつた。六時間の授業が終へて吾等一同は學校の昇降口から出た。すると鐘の音。向を見ると黒煙が小松原の南組のへんになびいてゐた。あゝどうしたのだろう。此の大風にと思ひながら一目散にとんで行つた。そして家に行つてみると、誰でも居ないからあわてしまつた。家にはいつて出て、かばんを置いてうろ／＼して居る中にも、向うから火が來たからそのまゝ山に逃げ登つた。すると飯田君たちが居たから、かばんを持って來たかと聞くと持つて來たといつたので、又家に行つて一年の妹のかばんと僕のかばんを持つて逃げ登つた。又考へて見たら僕の兄弟達の免狀が入つてゐるたんすのひきだしに氣がついたので、すぐ又家に入つて小ひきだしを二つ持つてにげ登つた。そして家の燃えるのを見てゐた。暫くたつと母も歸つて來た。親類の人も來

な思ひで床についた。

て下さつた。うす暗くなつてから小嶋田の親類に行つてしまつた。だが向うに行つても心配でたまらない。床にツイたがすこしも寝られない。朝起きて西の方をつくく眺めた。其の時の感じは此の朝日が上る様に吾が家の復興をはからねばならないと云ふ事であつた。朝飯を食べて親類の人と一語に家に歸つた。家に歸つたつて家は消え失せて一面に焼のケ原とかわつてゐた。其の時だつて小松原村を再興させるのは僕等の役目だと思つた。が胸が一ぱいになつてたまらなかつた。其の後から何事をやるにも一生懸命にやろうと思つた。

高一 飯田 文一

思ひ出せば涙の種となる。四月二十日は小松原の人達に取つては永遠に忘れる事の出来ない、悲しい出来事であつた日である。此の日は風強く、消防隊のゆうかなな活動も其のかひなく、見る見る内に小松原全体は火の海と化し、煙は天をおほひ人々の泣きさけぶ聲、消防隊のラツバの音、さながら此の世の恐ろしい地獄の様であつた。夜に入れば火勢だん／＼と衰へ雨は春雨にもにずどしや降りになり、人々は近所近邊の知るべをたづね、又は類焼をまぬかれた家などへ避難し、燃え残つた家々の

前は見舞客や下着を持つて来る者、消防隊が休息するやうさながら戦場の様な騒しさである。消防隊は亮々たるラツバの音と共に處々の残り火を消しかくして不安と憂色にとざされた一夜は、ほのぼのと明けたのである。

高一 小山 正

四月二十日の放課後は私達は掃除を一生懸命にやつてゐた。と火事だ、火事だと口口に言ふ聲にふと耳を澄ました。先生や生徒が行つて来た。皆庭へ下りてゆく。私は窓からのぞいて見たが煙が見えるばかり何處だかわからなかつた。二階へのぼれ／＼と云ふ聲と共に私は一緒に上つて見た。

其の時まつくろな煙がもく／＼上つてゐた。私は瓦焼で火をたいてるのだと思つてゐた。其の時こそはいま何十年とたたなければ見られない小松原になつてしまふのだ。私は驚いた。小松原だ小松原だと言ふのであつた。私も少し心配になつたので早く掃除をやつてしまつてから、早く歸らうと思つて下へ降りて来た。掛圖室を少しかけ始めた其の時、藤川先生がきて小松原の人は早く家へ歸れと云つたので、ぞう布掛をやめて運動靴もはか

す草りのまゝで飛び出した。先生は自転車で行く、私は無中で火を目がけて走つて行つた。見ると畠の中に火が燃えてゐる。だん／＼家のある方に近づけば、此處と思へば向うの方に火はどん／＼燃えてゐる。私は何うしてあんなに處々に燃えてゐるのだらうと思つた。私はただむやみに走つた。風は烈しいからだなんて考へるひまはない。 magari 松の東へ歩きだしたが、なさない様な気がして泣きだしてしまつた。いくら泣いていたつて仕方がない事だ。

高一 丸野 よしの

でやすみ／＼言つた。ようやく小屋についた。人は此の災難に同情してくれる、疊はなくこもをひいた、人の同情に依つて夕飯を食べた。朝起きて見るとまだ煙が出てゐた。家の焼跡に行つて見たがまだ火があつた。林檎や夏いもが焼けてゐた。其の悲惨なる有様は言葉には言ひあらはす事が出来ない。

又とび出した。家の人は氣にかゝるし早く行かなくてはと思ひながら歩いてゐた。向うの方から弟が来て早く家の人がある方へ行かないかと云ふのでどつちが早いか走り出した。其の時はほのぼは天をこがすばかり渦を巻いて天へ上つて行く、畠には一家無事になんなく此の難をのがれてゐた。本當にうれしかつた。夕方の烈風がふう／＼とすさまじい勢で家や、火の子を吹き飛ばす。私の内は一番真中でもつてなんだかちつともわからぬ。こんな所に何時までゐたつて仕方がない。早く何處かへ行かなければならない。林ご畠に一家がいられるくらしいの小屋があるから其こへ行く事にした。一番南の始めが火元の家だ、話をきけば四、五歳位の小供がかななくづへ火をつけたのだと云ふ事をおばあさんとはしより

四月二十日の日の放課後、私共は掛圖室の掃除に餘念なかつた。と火事と云ふ耳を貫く様な先生のさけび聲に私は一せいに窓にかけ寄つた。見よ小松原の方角の空は眞黒な黒煙で渦巻いてゐた。小松原の者は皆歸れ、先生の命令が下つた。小松原の人達及先生達はかけ出した。私共も其の後に續いた。かけ着けた時には火の手は三方に上り焔は天をこがして間もなく近所の消防隊がかけつけた、があまりの烈風に火の手が四方に飛び廣がり、小松原一面は火の海になつて手の着け様もなかつた。東南の田圃はあわてゝ逃げまどふ人あまりの大火に茫然と立すくむ人で蜂の巢をこはした様な騒ぎであつた。あの烈風の爲に大家の多い小松原を僅か半日と立たぬ内に無様な焼土と化してしまつた。悪火はまだあきたらぬと云ふ

顔をしてお宮を焼き、あの大きな御神木さへ奇麗に焼いてしまった。焼残つた家は僅か七八軒ばかり後は皆全焼してしまつた。あの大火の事とて負傷者も多く毒蛇の舌の様な焔は生人二人を死のどん底へ突落してしまつた。運命とは云へあまりに徒らな神の仕業であらう。翌日の各新聞には共和村小松原の大火と大々と記されてあつた。これを見た各地方の人達は着のみ着のままで他人の家へ避難してゐる火災に會つた人達をどんなに哀れんだでせう。其の翌日は各地方より同情のこもつた、見舞品が自動車で運ばれた。焼跡には一週間と立たぬ内にバラツクが立てられた。

學校は廿一日より廿五日までお休みになつた。楽しい遠足もだめだ、これからはこんな事を樂しみにせず、火災前の小松原の様に復興すべし。皆一處になつて努力しよう。これが我々の唯一の爲すべき仕事だ。

尋六 柳本 いち

四月二十日はいつもの通り私は學校から歸りました。それから間もなくでした、本當にそれは急に、ジャン／＼と近火の鐘が鳴りひびきました。私はあはただしく庭先へとび出ました。丁度東の家の木の上にもう／＼と煙が

上つて居ます。そのうちに庵女さんが火事は小松原だ、皆火はあぶないから氣をつけなさいといけなさい云はれました。私は体がふるへて其の上お母さんはじめ誰も家の人が居ないのでもう外へも出得ないで唯私は一番仲の良いふさちゃんや、組のお友達の家はどうだらうかお友達はどうして居ることだらうと心配しながら火事場へ飛んで行く消防手さんや人々を見て居ました。其のうちにせつさんのおちいさんがとんで来て、大きな聲して小松原は丸焼けだ、小松原は丸焼けだと云はれました。

あふさちゃんの家も焼けてしまつたのだらうかと思へば自分のことの様になしくなつてしまひました。氣狂の様なあお南風が今でもにく／＼なりません。

尋六 太田 はる

二十日の日私共が學校から歸つて間もなくでした。ジャン／＼と火の見の鐘がなりました。外へ出て見て急ぐ學校か段の原だと思ひましたが、土堤へ上つて見て小松原だと知りました。私共の友達はどうして居るだらうと思つてまがり松迄行きました、其の時はもう村一面火の海でした。

私は家へかへつて家の人がおむすびをこさえに行つたのであるすゝをして居ました。

私は其の時も小松原の人はこんなんきなことは出来ないと思つて氣の毒でなりませんでした。

二十三日は小松原の人達のために學校へお錢と使つた古い本とを持って行きました。

尋六 小出 ふさ

二十日の授業もすまして家へ歸つた。其の中に火事だ！火事だ！と云ふが早いかガン／＼と鐘が鳴つた、あつと思つてそばにあつたカパンを持つて夢中で田圃へ走り出した。

もう其の時は村一面火の海となつて居た。

家はもうだめだと思つて居た處へねえさんが息苦しそうに飛んで来たのでねえさんと一しよに山通しを家の方へと飛んで歸つた。もう其の時は家は丸焼けになつて居たのでもうあきらめた。

私は焼けても力落さず尙一層働いたり又勉強さえしたなら元通りになると思つた。

私は天が私共をいましめたのだと思つてうんとこれから一心にやろうと思ふ。

尋六 久保田 しま

二十日の午後授業がすんで家へ歸らうとすると先生が皆北の方へ飛んで行きますから初めは何の氣もなくあとをついて行きました。

まがり松の處まで来た時もう村一面火に包まれて居ました。ポンプは數へきれない位來ましたがあの氣狂の様な風にはどうすることも出来ません見る間に小松原は殆んどもえてしまひました。唯私は手足がふるへるばかりでした、其の晩私は家の人と小松原へ用事に行きましたが、お宮の南の附近は焼残つた家は數へる位しかありませんでした。

家の人はいこれを見て驚かないものはまづなからう東京の震災だつてこれまでだなど云はれました。家へ歸つたのは其の晩も十一時過ぎでしたが、寢床へはいつてからもある火が目について居つてどうしても眠れませんでした。

小松原の人達は尙更であると思へば氣の毒でなりませんでした。

尋六 飯田 あさの

四月二十日午後の大火事は本當に思もつかないことでした。

私は丁度其の日、本家へ用に行つて用をすまして家へ歸るとすぐ家の屋根へ火が付きました。急ぐお父さんが水をかけましたがあの風でしたかどうすることも出来なくともう／＼もえてしまひました。

あの日は強い南風の上に村の一番南のはじの火元でしたからどうすることも出来なかつたのです。

私どもは一生けんめい働き又勉強して元の様な小松原にしたいと思ひます。

又今度の世間の人様の志は誠に有難いことであります。

尋六 野口 りきの

あの大火事のあつたのは二十日の午後で私が學校から歸つて間もなくでありました。

チャン／＼と鐘の音がしましたので急ぎ道へ出て見ますと火が、どどどとあがつて居ました。其の日は意地悪い南風がどん／＼吹いて居りしかも火元は村の南はずれの

家でしたからとう／＼火のこは風のために舞つて来て子供の家から二軒おいた向ふの家へつき段々火はもへて直ぐ向の家へつきましたから私はカバンを持つておばあさんと一しよに田圃の方へ逃げました。

其の夜は家内中皆犀口の親類の家へとまりました。私は火事のために大事な本を三つもやいて了ひました。

尋六 福井 花江

私ども村の大火は二十日であつた。

丁度私共は作法室の掃除をすまして學校を出た。私どもがとつ子さんのあたり迄來ると向ふにもう／＼と煙が上つたけれども互燒きの煙とばかり思つて火事だなどは一寸も氣付かなかつた。其の中に大人の人に火事だと聞かされて驚いてかけつけて見ると材木屋がどんどんもえて居た。私はやつと家まで飛んで歸つて色々手傳をして居たが火が段々近づいて來たので妹をつれてあせ道づたへ田圃へ逃げ出した。

消防手はポンプをひいて來る。

其の中に長野の赤十字からお醫者さんと看護婦さんとが二臺の自動車で來た。

火事の日から今日まで毎日／＼色々な見舞の品物が自動

車で運ばれる。

私はあんなに誰が下さるのかと思ふと有難くて涙が出てならなかつた。

火事が終つて間もなく友達から鉛筆をもらつたうれしさは私はどうしてもわすれることが出来ない。心から其の友達に感謝して居る。

尋五 金子 ユメ

三つ打の鐘がなる火事だ火事だとさけぶ聲に私は庭に出ました。金澤先生が倫ちやんのうちのあたりですよといはれたのでびつくりしました。それは四月廿日の午後裁縫のけいこをすました後の事でした。

「先生行つてもよいですか。」と聞くと「一本松のあたりまで行つてそれよりむかうへ行つてはいけません。」といはれましたので飛び出しました。徳本さんの所まで來た時は倫ちやんの家の鶏小屋がもえてゐます。私は泣き聲でこまるな／＼とさけびましたが誰一人倫ちやんの家の鶏小屋などかまつてくれるものはありません。一本松の所へ來た時には里村へもえうつてゐました。私は酒井先生にだきついて泣きました。私は家の方が心配でゐてもたつてもいられません。人々は私に「おまいた家はどこ

だい。おまへた内はもえちまつたかい。」などと聞きまです。私はおぶすな様の方へ向いて手を合せて早く火がきえて私の内の方までもえないやうに雨が降るやうになるとな

んども／＼神様にいのりました。

私はもうそこにゐられなくなりましたので田や畑をとびまはつてとう／＼堰ばたまで來ました。茂人さんがゐて「梅だれ家はもえてしまつた」といはれましたので私はびつくりしてもう足はむかうへ出ませんでした。胸をどきおどらせてやうやく利野ちやんの家の田まで來ました時、徳太郎と君子がゐてそばにおかあさんもゐられました。私はおかあさんにだきついて泣いてゐますとおかあさんは「泣いたつてしようがないぢやないかもう此の家ももえてしまつた」といはれました。少したつとおかあさんは「家の方へいつてくるからお前はこゝにいろといはれました。」私にはいさんのマントをもつて來て徳太郎と君子と三人でマントにくるまつてゐました。實は私の家はもえなかつたのであります。私は家もえないうつても倫ちやんのせつなさはどんなだらう。私は倫ちやんの家の事ばかり思つてゐました。

其の中に曾根川先生が來られて私に「お前の家はもう大丈夫だからこゝにつきりいろ」といわれた時は非常にうれしくありました。

夕方になつて火事も下火になつたから私はおとうさんやおかあさんや兄さんたちと持出したものを家の中へ入れました。おけやの家の者が「おばさんこゝに置いて下さい」といつてふとんをしよつて來ました。私はにいさんに「學校から借りて來た圖書館の本を出してくれたか」と聞きましたら「そんなことではないあわてゝ何を出したかわかるものか」といわれたので私はあゝあんなことを聞かなければよかつたと思ひました。家の中へはいつてゐても私は火事の事が心配になりますので折々立つては戸の穴からのぞいて外を見ました。おとうさんは兄さんに家のぐるほを見てこいといひつけました、私はまもなく寝ましたがどうしても眠られませんでした。

高一 金 兒 富 治

四月二十日の日の出來事である。僕は五時間の授業が終へたので友達と一緒に勇んで昇降口に來た。そして下駄を穿いて校庭に出やうとしたとたんジャン／＼、ジャン／＼、ジャン／＼、ジャン／＼といふ半鐘の音に僕ははつとした。それは火事のしらせであつた。僕は思はず火事！火事！と叫びながら校庭を一目散に走つて道路に出た。

そして四方を見渡すと火事はどうやら小松原の東組らしい。僕は犀口らしくなかつたので一心して用をして居ると其處へ運よく妹が來た。僕は妹を連れて一散に火元のほぼ分る所までかけつけた。すると火元は材木屋らしく大勢の人がわ／＼とあわて叫んで居つた。子供の泣聲も中から喧しく聞きとられた。僕は道路はもう通行出來ぬと思つたのでこんどは妹をかばいながら畠の中を一目散に安全地帯までのがれた。けれどもをりかたの烈風のことゝて如何ともしがたく南組はものゝ五分たつたかたゝない中に早くも火の南組と一變してしまつた。僕はこうなれば一時も早く家に行つて家の中の品物を出そうと決心した。そして神社を目がけて一散に走つたが氣があせつて居て思ふ様にうまく走れない。やつとの思ひで中組のはづれへ來た時にはもう中組も大半は火に包まれて彼の烈風中に今や盛と燃えて居つた。僕はもうこうなれば無論僕等の住んで居る犀口も駄目だと思ひながらも僕等兄弟は一生懸命だやつとの思ひでお宮まで走りつけた時には又々北組の二三戸が盛に燃えて居る。僕がいきせききつて家に走りつけた時にはもう今までの疲れで足が容易に運ばれない。けれども此處ががまんのやり所だと思つて家の中の物を運ばうと思つて内へ入つて見るともう二分程しかない。やれうれしやと僕は手あ

たり次第内の中の物品を外に外した。そして弟や妹を先に河原へやらせ僕はしばらく家を警戒した。暫くするとお宮の森から煙が立ち上つた。間もなく火が堂々たる勢でお宮の本殿についた。僕はくす／＼して居れば自分の身があぶないから一人で河原に避難した。そして出している布團に水にひたした毛布をかけ僕は布團の山の傍に腰を下して休んだ。其のとたん助けてくれ！助けてくれ！といふ人聲。僕は不思議に思ひながら土手に上つて見ると、萬年河原の土手頭の家が四軒一緒にみり／＼ぱち／＼とおそろしい勢で燃え初めた。助けてくれとはそれから聞えた言葉だらう。すると今まが今まで南風の烈風であつた風が急に一變してしまつた。其の風こそは神風であらう。僕はやつと安心した。すると隣に居た酒屋のおばあさんが地獄で佛にあつたとはこの事だと言つて始めて安心してこ／＼とお笑ひになつた。そして隣を見ると今まで居つたはずの弟が居らない。僕は心配して四方を見たが居らない。僕は仕方なしにお宮の所まで行つて見た。弟は平氣でガソリンポンプの働を友達と語り合つて居た所だ。僕はいきなり弟の頬をはいたい。そしてものをも云はずに内へ引張つて來た。間もなく風も弱つた。火も勢が挫けて鎮火した様子。僕等一家はやつと安心して前に出した布團や色々の道具を家に入れた。が火

事の前に出す時よりは何品も重くやつとこすつと六時頃に家の中へ入れたが暗がりの事とて整頓もよく出來ず座敷に布團を引いて寝入つた。九時時分になると中嶋のおばさんが握り飯を持つて來て下さつたのでやつと腹のへつたのがなほつた。そして其夜は不安な思ひで床についた。

火事の思ひ出

尋 六 庄 田 文 雄

ぢやん／＼／＼と、ひつきりなしに鐘がなつてゐる。私の村からは、煙がもう／＼と立ち上つて空を閉ぢこめてゐる。學校歸りを家へ飛びつけければ、近所の家は皆煙になつ消えて行く。風は烈しく火を吹き散らして、見る／＼五軒十軒と燃え移つて行く。あゝもう自分の家へも燃えうつてしまつた。あゝもうこれから先は私のは書けない。おゝ考へてもぞつとする。今日はその大火の一週期である。

秋葉さんの前には、ばた／＼と幟がひらめいてゐる。神官が神前にうやうやしく立つて、ぱちり／＼と手をたゝ

いて最敬禮をしてから、經を讀んだ。經が終つた時、かちり／＼とひようし木の音がする。それはたしかに火の用心のために打つひようし木である。何とも言はれぬ感じに打たれた。
私は火事にあつて、はじめて火の恐ろしさを悟つた。

昨年の火事を思ひ出して

尋六 金子ウメ

去年の大火はちようど今日にあたつてゐる。今日はその悲しき一週年である。
五時間の授業を終つて家へ歸る途中も、友達と去年の火事の思ひ出話をして來た。家へ歸ると、私の頭は妙にしづんで來て火事の事が思ひ出されてならない。あゝ去年の今頃は、何をしてゐたらう。學校から曲り松の邊まで飛んで來た時分だ。ほんたうに今頃はかなしくて、せつなくて泣きくづれてゐた時だ。其の時の事を思ひ出すと目からは大粒の涙がはら／＼と落ちる。あんなに悲しかったのは、生れて一べんだつた。ほんとうに去年の今頃は泣きに泣いて泣きくづれてゐたのだ。我々をかはいそうとも思はず、どん／＼燃えのびて行く火の勢、どんな

に悪くらしかつたらう。本當に今日は悲しき記念日だと思つてゐると、又しても三つぱんの鐘がなる。烈風は砂を卷いて去年に劣ない勢だ。あゝつと思ふと子供を脊負つた体で、はだして飛び出した。兄はすぐ煙りを目かけて飛出した。あゝ又かと思つて、ほつと一息ついた。あゝかわひさうだ、氣の毒だと思ひながら、家にはいつた。いくらたつても兄さんは賑つて來ない。やつとの事で兄さんは汗びつしよりになつて賑つて來た。聞けば火事は鹽崎だつたさうだ。それも借り屋をしてゐる人が出したのだと聞くと、私の胸はどき／＼おどり出した。あゝ借屋をしてゐるやうな人。どんなに困ることだらう。と氣の毒でたまらない。それでもあの大風に二軒ですんだのは何よりよかつた。がほんとうにかはひさうな事をした。皆よく言ふが、地震雷火事と、それに相違ひない。あゝ火といふものは恐ろしいものだと身にしみてゐる。



子供等が あそびの

まつろの からみや

うららの

には



第四章 同情編

拜啓本日當地新ぶん紙にて御地大火災報に接し驚き入り候

先年關東大震災に遭遇者の私として一層同情に不堪茲に乍輕少御見舞の印迄で如斯くに御座候

四月廿一日

東京市神田小川町 北村 忠治

遭難者各位

目錄 櫛百六十袋 (トカシニ スキニ)

四月二十一日信濃毎日新聞、長野新聞兩社は取敢ず左記の記事を掲げて同情を一般へ訴へられた。

共和村災害の義捐金募集

更級郡共和村の火災は殆ど小松原部落全滅の悲惨事を産み辛ふじて身を以て遁れ時に衣と食と住とを奪はれた多數の人々が焦土に嘆いて居ります。其のお氣の毒の狀誠に坐視するに忍びません。乃ち本社は大方の御同情に訴へ左の規定により義捐金を募集して之れを罹災者に願つて慰めたいと思ひます。

一、一口金一圓以上
紙上に金額氏名を掲げて領收證に代ふ

一、締切五月十五日

分配方法は村當局に諮つて合法的に致します

信濃毎日新聞社
長野新聞社

左記ハ兩新聞取扱ニカ、ル同情者芳名
金額又ハ品名 住 所 氏 名

二〇、〇〇	更級郡稻荷山町	荒井眞綿防寒具製造工場従業員一同
一、〇〇	上水内郡安茂里村	塚田 清四郎
五、〇〇	長野市權堂町	柳家 内榮
一〇、〇〇	東京牛込區神樂町三ノ二	森岡 寅四郎
一〇、〇〇	長野市大門町	金華 堂
五、〇〇	同 權堂町	よど川 金子やい
一、〇〇	同 櫻枝町	室賀 國司
一、〇〇	上水内郡安茂里村	青木 常雪
五、〇〇	長野市西後町	田中 彌助

三、〇〇〇	同	上西之門町	吉澤治平	五、〇〇〇	同	笠原萬治郎 柄澤秀治
五〇〇、〇〇〇	更級郡信田村	株式會社	小林 暢	五、〇〇〇	南佐久郡前山村倉澤藥師官吏	岡本靈苗
二〇〇、〇〇〇	長野市	株式會社	六十三銀行	五、〇〇〇	長野市南縣町	宮川慶治
一〇〇、〇〇〇	長野市	株式會社	農工銀行	五、〇〇〇	上高井郡須坂町裏上町	上野藤作
五〇、〇〇〇	長野市櫻枝町	同	西澤喜太郎	五、〇〇〇	長野市石堂町	渡邊時次郎
一、二〇、〇〇〇	同	縣町	縣七年會	五、〇〇〇	埴科郡豐榮村	聯合青年會
一〇、〇〇〇	上水内郡安茂里村	同	平紫青年會	五、〇〇〇	更級郡八幡村	宮西音市
一〇、〇〇〇	長野市縣町	同	宮本	五、〇〇〇	長野市西長野町	久保山喜美太
一〇、〇〇〇	西筑摩郡檜川村平澤松	同	土屋吳服店	五、〇〇〇	長野市縣町	やぶ店員一同
一〇、〇〇〇	野屋方	同	末廣町青年會	一〇〇、〇〇〇	長野市新町	長野實業銀行
一〇、〇〇〇	上高井郡須坂町	同	青沼正一	一〇〇、〇〇〇	同	同
一〇、〇〇〇	長野市西後町	同	岡本靈苗	一〇〇、〇〇〇	長野市元善町	善光寺一山中
一〇、〇〇〇	南佐久郡前山村	同	小林次助	五〇、〇〇〇	長野市新町	小林久七
一〇、〇〇〇	長野市櫻枝町	同	宮尾三郎	五〇、〇〇〇	長野市裏田町	佐治木清七
一〇、〇〇〇	同問御所町	同	白木屋旅館	五〇、〇〇〇	同元善町	大本願明照殿内明照婦人會
一〇、〇〇〇	長野市大門町	同	中嶋寫真館	五〇、〇〇〇	長野市	長野中學職員生徒一同
一〇、〇〇〇	善光寺西公園	同	堀内光治	五〇、〇〇〇	同南縣町	柏友吳服店
一〇、〇〇〇	北安曇郡大町	同	稻荷山町友愛會	三〇、〇〇〇	同南縣町	安藤重次郎
一〇、〇〇〇	更級郡稻荷山町	同	大豆嶋青年至誠團	三〇、〇〇〇	日本赤十字社長野支部	院友會
五、八〇〇	上水内郡大豆嶋村	同	加藤竹治	五〇、〇〇〇	長野市鶴賀町	貸座敷組合
五、〇〇〇	長野市千歲町	同	山本喜作	二五、〇〇〇	同西後町	青木專助
五、〇〇〇	同	同	荒木	二〇、〇〇〇	同東後町	柳屋銅鐵店
五、〇〇〇	同	同	石堂町			

二〇、〇〇〇	上田市大門町	白田組上田支部	一〇〇、〇〇〇	長野市	長野電燈株式會社
二〇、〇〇〇	長野商業學校	校友會	七〇、〇〇〇	埴科郡植生町純水館屋代製糸場及從業員一同	安田銀行長野支店
一〇、〇〇〇	同	職員一同	七〇、〇〇〇	同	安田銀行支店同人會
二〇、〇〇〇	上田市鍛冶町	湯田甲子郎	五〇、〇〇〇	同	上野正隆
五、〇〇〇	埴科郡豐榮村	勤儉報德社長 井口治作	五〇、〇〇〇	同	荒木區一同
一、〇〇〇	長野高等女學校内	北嶋愛子	五六、三五〇	同	同市吉田町 長野製糸株式會社工場一同
五、〇〇〇	長野市西鶴賀町	西鶴賀青年會	五〇、〇〇〇	同	更級郡中津村 島田嘉三郎
三、〇〇〇	長野市西後町	牧野賢三	四〇、〇〇〇	同	長野市 工業學校職員生徒一同
二、〇〇〇	諏訪郡岡谷	愛讚會	三七、〇〇〇	同	東ノ門町 交誼會
一〇、〇〇〇	七ノ男給羽織一着	同	三二、〇〇〇	同	大正生命保險株式會社
五、〇〇〇	長野市	磯井正彦	三一、五〇〇	同	長野市 長野出張所峯村
五、〇〇〇	長野市市田町	宮澤萬藏	三〇、〇〇〇	同	上西之門町一同
五、〇〇〇	同	宮崎すゝ	三〇、〇〇〇	同	花岡俊夫
三、〇〇〇	同	大塚義太郎	三〇、〇〇〇	同	渡幸吉
三、〇〇〇	同	山上房吉	三〇、〇〇〇	同	小山邦太郎
三、〇〇〇	埴科郡豐榮村	聯合婦人會	三〇、〇〇〇	同	諏訪部元助
三、〇〇〇	長野市問御所	中村鐵造 石坂喜三	二〇、五〇〇	同	南佐久郡岩村田町 風間ヤスイ外四名
一、八〇〇	長野商業學校	同	二〇、〇〇〇	同	長野市 長野銅鐵組合一同
七、三〇〇	吉田町丸八製糸場	從業員一同	二〇、〇〇〇	同	東京市本郷區駒込追分町 嶋田聰
疊上敷ゴザ百枚	長野市大門町	中惣商店	二〇、〇〇〇	同	長野市三輪 西組青年會
養蠶用紙五〇貫	同市石堂町	丸山新聞店	一〇、〇〇〇	同	入江義郎
手拭百五十本	同東後町	柏友吳服店	一〇、〇〇〇	同	長野市若松町 西澤石版部

一〇、〇〇 長野市西町 室川十藏
 貳〇、〇〇 長野地方裁判所、同區裁判所、同検事局、同供託局 職員一同
 一〇、〇〇 上高井郡須坂町第十二區 常盤町 親善會
 障子四本、板戸二本 北佐久郡小諸町 沼田啓三
 瀬戸鍋五十枚 長野市西後町 金子源助
 貳〇參、五五 埴科郡杭瀬下村 消防組、軍人分會
 一〇〇、〇〇 松代町六文錢合資會社 青年會、婦人會
 七〇、〇〇 長野市結髮業組合 同盟會 同窓會
 五〇、〇〇 長野市飲食店、理料店 組合長金子良吉
 參〇、〇〇 上高井郡須坂町 同業組合
 參〇、〇〇 下高井郡平糶村上林 小田切 佐太郎
 貳〇、〇〇 長野市西町 間組 平穩出張所
 貳〇、〇〇 北佐久郡 山 極 貞 治
 一七、〇〇 上高井郡須坂町 郡役所員一同
 一〇、〇〇 北小布施村 立町(九區)親交會
 一〇、〇〇 小縣郡依田村御嶽堂 山王嶋青年會
 一〇、〇〇 養蠶組合長松原高吉 他十六名
 一〇、〇〇 東筑摩郡坂北村 碩水寺内築北佛教會
 一〇、〇〇 上水内郡柏原村 仁ノ倉青年團
 一〇、〇〇 長野市花咲町 鈴木雄治郎
 一〇、〇〇 長野市 横山青年會一同

六、五〇 他櫛澤山 長野市 明照婦人會内有志
 六、五〇 同 吉田町 丸山與兵衛商店有志會
 五、五〇 松本歩兵五十聯隊第九中隊 第三内務班長以下一同
 五、〇〇 長野市若松町 長歌商店
 五、〇〇 北佐久郡小諸町純水館工場内 更埴出身工手有志會
 五、〇〇 長野市西ノ門町 長野市西ノ門町 錢屋時計店
 參、〇〇 下高井郡須坂町 箱山定治
 參、〇〇 長野市 上今井青年會
 二、〇〇 衣類一包 小縣郡丸子町 長野三番組消防手二名
 二、〇〇 長野市西町 月之湯
 二、〇〇 長野市西町 伊藤けん
 一、〇〇 同上西之門町 西澤好三郎
 一、〇〇 同上 箱山利平衛
 一、〇〇 東京市 箱山商店員一同
 一、〇〇 長野市三王 山田健造
 一、〇〇 更級郡信田村 新井保喜
 一、〇〇 同上 宮原慎造
 一、〇〇 同上 權田喜龜
 一、〇〇 松本市 松本夜間中學三年B組丑生
 五、五〇 長野市縣町 北屋人力車店挽子一同

一〇、〇〇 更級郡信田村 柳澤徹之助
 英ネル腰卷五十枚 長野市大門町 葛市吳服店
 トカン櫛百四十六ヶ 長野市 武井はつ
 及スキ櫛二百二十ヶ 長野市 藤澤イソ
 はさみ八十ヶ 長野市 前田テイ
 紺糸一五〇掛白糸一 長野市 熊谷慎光
 五掛及縫針七〇五本 長野市 熊谷慎光
 鳥打帽子一ヶメリヤス長 長野市 熊谷慎光
 着二枚綿入羽織一枚ズボ 長野市 熊谷慎光
 一足平古帯一本 長野市 熊谷慎光

四九、五〇 長野市芹田尋常高等小學校 職員兒童一同
 四〇、〇〇 長野市 職員兒童一同
 三二、七四 下高井郡須坂町 替佐婦人會
 三〇、〇〇 北佐久郡小諸町 柳田茂十郎本店
 二六、七七 埴科郡雨宮縣村小學校 職員兒童一同
 二〇、〇〇 長野市石堂町 竹内兼昌
 二〇、〇〇 長野市 元善町青年會
 一九、七二 上水内郡安茂里村小學校 職員兒童一同
 一七、七〇 長野市鶴賀 七瀬商工業組合
 一五、〇〇 下高井郡 郡役所員一同
 一二、〇〇 埴科郡 町村技術員會
 一五、五〇 長野市 淀ヶ橋青年會
 一〇、〇〇 小縣郡縣村本海野 本海野禁煙會
 一〇、〇〇 埴科郡豊榮村平林區豊榮青年會長 小林幸治

一〇、〇〇 上水内郡七二會村 郵便局長 西林兵治
 一〇、〇〇 長野市 岡田青年會
 一〇、〇〇 長野市若松町 宮澤洋服店
 一〇、〇〇 長野市西長野町 加茂煙火青年會
 七、〇〇 長野市赤十字社 長野支部職員一同
 五、〇〇 上水内郡 水内村青年團
 五、〇〇 小縣郡丸子町腰趣 竹内正男
 五、〇〇 長野市櫻枝町 後藤幸操
 五、〇〇 埴科郡五加村 飯嶋正胤
 五、〇〇 小縣郡長村 飯嶋正胤
 五、〇〇 上水内郡新町 飯嶋正胤
 五、〇〇 長野市千歳町 飯嶋正胤
 三、〇〇 下高井郡須坂町 飯嶋正胤
 二、〇〇 他手拭百本 長野市石堂町 上今井報徳婦人會
 二、〇〇 小縣郡豊里村 誠喜同店員一同
 二、〇〇 長野市三輪字宇木 六川喜一郎
 二、〇〇 松本郵便局内 田坂秀吾
 二、〇〇 下高井郡須坂町 高砂順一
 二、〇〇 長野市上干歳町 瀧澤東馬
 一、〇〇 東筑摩郡本郷村淺間 出水準之助
 一、〇〇 上水内郡七二會村 上條隆司
 長野實科高等女學校生徒 峰村ふみ

一、〇〇〇	上田市	工場の窓より	一五、〇〇〇	長野刑務所	職員一同
一、〇〇〇	長野市	無名氏	一〇、〇〇〇	長野市	花咲町一同
一〇、〇〇〇	長野市東後町	清水久兵衛	一〇、〇〇〇	長野區裁判所管内	司法代書人會一同
一〇、〇〇〇	同上	小澤惣助	二、〇〇〇	長野市石堂町	高橋質店
二、〇〇〇	同上	宮下芳太郎	一、〇〇〇	埴科郡豊榮村	桑根井十二番五人組合
二、〇〇〇	同上	石坂重太郎	五〇、〇〇〇	小縣郡縣村	小野榮左衛門
二、〇〇〇	同上	宮下佐市	五〇、〇〇〇	北安南部	消防同盟會
二、〇〇〇	同上	宮尾喜兵衛	五〇、〇〇〇	群馬縣新田郡太田町	大光院住職千野學誠
二、〇〇〇	同上	菊地榮助	四七、二六〇	長野市三輪實業補習學校	職員生徒一同
二、〇〇〇	同上	市川藤八	三五、〇〇〇	上水内郡朝陽村	朝陽村農會、同軍人分會
一、〇〇〇	同上	小出ふで	二五、〇〇〇	同産業組合、同青年會	同婦人會
一、〇〇〇	同上	小林梅作	二五、〇〇〇	下水内郡飯山中學校	職員生徒一同
一、〇〇〇	同上	吉澤徳次郎	二五、〇〇〇	長野縣自轉車業聯合會	更級支部
一、〇〇〇	同上	小出晋吉	二〇、〇〇〇	長野市城山大谷派説教場	婦人法話會
一、〇〇〇	同上	竹村文之助	一三、〇〇〇	上高井郡須坂町立町	田尻製糸場内和合會一同
一、〇〇〇	同上	細谷友吉	一〇、〇〇〇	長野市新田町	有田下ラック
一、〇〇〇	同上	玉川敬人	六、〇〇〇	上水内郡小田切村小鍋小學校	職員兒童一同
二、〇〇〇	同上	武井安太郎	五、〇〇〇	同上	同窓會
一〇〇、〇〇〇	上高井郡須坂町	越壽三郎	三、〇〇〇	同上	小鍋婦人會
五〇、〇〇〇	長野市狐池	小田切盤太郎	五、〇〇〇	内務省新潟土木出張所千曲改修事務所内	千曲青年團
一〇、〇〇〇	上水内郡大豆嶋村	久保田勇太郎	五、〇〇〇	埴科郡西條村	鹿嶋報徳社

五、〇〇〇	上高井郡綿内村	嶋正青年會	二、〇〇〇	同上	松本うめ
五、〇〇〇	埴科郡東寺尾村	東寺尾婦人會	一、五〇〇	同上	根岸武一
三、一〇〇	豊野驛	西川新吉商店小役員一同	一、五〇〇	同上	伊藤由乾
三、〇〇〇	北佐久郡和村	市川喜十	一、〇〇〇	同上	清水庄治
三、〇〇〇	上水内大豆嶋村	倉嶋留作	一、〇〇〇	同上	村田庄治
三、〇〇〇	埴科郡豊榮村	牧内自彊報徳社	一、〇〇〇	同上	渡邊辨二郎
一、〇〇〇	長野市上千田區	小野塚昌三	一、〇〇〇	同上	山口勇士
三、〇〇〇	同千田區	小林月郷	一、〇〇〇	同上	塚田紋兵衛
三、〇〇〇	長野市七瀬	餘嶋金魚店	一、〇〇〇	同上	小山武三
二、〇〇〇	同上肩井煉炭工場内	四松巖男	一、〇〇〇	同上	瀧ちい
一、〇〇〇	長野市諏訪町	中野婦人會	一、〇〇〇	同上	五十嵐種義
二〇、〇〇〇	下高井郡中野町	一本木婦人會	一、〇〇〇	同上	佐藤藏太郎
七、三〇〇	下高井郡中野町	栗和田婦人會	一、〇〇〇	同上	越藤國松
三、〇〇〇	同上	西條婦人會	一、〇〇〇	同上	宮嶋千秋
三、〇〇〇	同上	東松川婦人會	一、〇〇〇	同上	高源源吾
二、九〇〇	同上	下小田中婦人會	一、〇〇〇	同上	奈良勘四郎
二、〇〇〇	同上	上小田中婦人會	一、〇〇〇	同上	近藤助治
一、五〇〇	同上	頓所濱治	五〇、〇〇〇	更級郡東福寺村	玉井權右衛門
一、〇〇〇	同上	小林治雄	三、〇〇〇	下水内郡豊井村替佐	高橋忠治郎
一、〇〇〇	同上	近山覺重	五、〇〇〇	長野營林署	所員一同
五、〇〇〇	長野市東鶴賀町	伊藤勝太郎	三〇、〇〇〇	南安曇郡豊科町	丸山盛雄

一〇〇、〇〇	南佐久郡穂積村	黒澤利重	五、〇〇	同小田切村	小田切在郷軍人分會第二班
六〇、三四	長野市箱清水區	箱清水青年會	五、〇〇	小縣郡丸子町六丁目	實業研究會
五〇、〇〇	上水内郡柏原村	信濃電氣株式會社 柏原工場員一同	五、〇〇	上伊那郡伊那町	林業
二五、〇〇	小縣郡縣村小學校	職員兒童一同	五、〇〇	長野市	宇木少年團
二四、二五	長野市	横澤町青年會	五、〇〇	上水内郡若槻村	徳間婦人會
二一、八五	上水内郡古里村小學校	職員兒童一同	三、三〇	埴科郡松代商業學校	安藤英一
二〇、〇〇	上田市	上田貸座敷組合	三、三〇	上水内郡南小川村	高府町明溪會
一五、〇〇	埴科郡松代商業學校	職員生徒一同	三、〇〇	更級郡牧郷村	堀入邦太郎
一九、〇〇	松代實科女學校	職員生徒一同	三、〇〇	東京市外駒澤七九二	堤寒二
一七、〇〇	長野稅務署	穂高婦人會、處女會	二、〇〇	上水内郡小田切村	小田切婦人會
一一、五四	上高井郡川田村	職員一同	一、〇〇	長野市大門町	近藤まさい
一〇、〇〇	埴科郡松代町表紫町	牛嶋區青年會	一、〇〇	同上役場内	室井句
一〇、〇〇	長野市	南長池青年會	一、〇〇	同上長野縣工夫	芳川和夫
一〇、〇〇	上高井郡	郡役所員一同	一、〇〇	同上水内郡榮村	法蓮寺
一〇、〇〇	下水内郡飯山町	高等女學校職員一同	一、〇〇	同上水内郡大豆嶋村	五十嵐つね
一〇、〇〇	東筑摩郡新村	上新實業青年會	一、〇〇	同上水内郡朝陽村北長池	倉尾菊之助
一一、三五	下高井郡穂高小學校	職員兒童一同	一、〇〇	同上水内郡小田切村	原田とふ
六、六七	上水内郡古里村	古里青年會金箱部會	一、〇〇	更級郡信田村	淺野勇雄
五、〇〇	上高井郡須坂町	屋部町	二、〇〇	同上	大矢長作
五、〇〇	上水内郡芋井小學校	職員生徒一同	一、〇〇		濱村與吉

一〇〇、〇〇	同上	濱村隆次	二五、〇〇	上高井郡綿内小學校	職員生徒一同
一〇〇、〇〇	同上	濱村順	三、〇〇	同上	女子同窓會
一〇〇、〇〇	同上	濱村茂男	二五、〇〇	小縣郡縣村	婦人會
一〇〇、〇〇	同上	濱村民男	二二、二〇	上水内郡柏原小學校	職員生徒一同
一〇〇、〇〇	同上	濱村勝馬	二〇、〇〇	上水内郡神郷村	婦人會
一〇〇、〇〇	同上	濱村一彦	二〇、〇〇	小縣郡禰津村	西宮消防組、青年會
一〇〇、〇〇	同上	濱村尾磨	二〇、〇〇	上水内郡三水村	赤鹽同志會
一〇〇、〇〇	同上	濱村幸雄	一〇、〇〇	北佐久郡北大井村	相木一同
一〇〇、〇〇	同上	古里分會	一〇、〇〇	下高井郡湯田中	溫泉旅舍一同
一〇〇、〇〇	同上	軍人分會	一〇、〇〇	埴科郡役所	所員一同
五、〇〇	同往里村	青年會	一〇、〇〇	上高井郡高井小學校	兒童職員一同
五、〇〇	同上	婦人會	一〇、〇〇	帝國生命保險會社	田崎次平
九一、一七	長野市後町小學校	信濃紙器製本會社	九、五〇	上田市木町區	青年會
手帳五百冊	長野市	職員生徒一同	六、〇〇	埴科郡寺尾村	大正婦人會
手帳及び鉛筆若干	同上	生徒有志	五、〇〇	小縣郡丸子町	婦人會
六四、二五	上高井郡高井村	高井婦人會	五、〇〇	更級郡大岡村	婦人會
六〇、〇〇	埴科郡屋代中學校	職員生徒一同	三、〇〇	上水内郡水内村	水内西區婦人會
五四、一六	長野市鍋屋田小學校	職員生徒一同	三、〇〇	北佐久郡大井村四ツ谷	第三農事組合長
五〇、〇〇	長野市城山小學校	職員生徒一同	三、〇〇	長野市問御所	山屋醬油店內八幡助三
三四、三〇五	長野市加茂小學校	職員生徒一同	二、〇〇	上伊那郡小野村	宇治榮一
二七、八〇	長野市山王小學校	職員生徒一同	二、〇〇	下高井郡日野村日野製材所内	桑原常吉
紙挾四打其他雜品二十八點	同上	生徒有志	一、〇〇	上水内郡柏原村	風間藤五郎

一、〇〇〇 同上
 一、〇〇〇 同上
 一、〇〇〇 北佐久郡北大井村
 三、〇〇〇 北佐久郡南御牧村
 七、〇〇〇 同上
 二〇、〇〇〇 北佐久郡御牧村
 四〇、〇〇〇 埴科郡南條村
 二〇、〇〇〇 同 小作組合總代組合長
 一〇、〇〇〇 長野市緑町
 手拭百本衣類一包 長野市石堂

見舞金品寄贈芳名錄

海外
 金拾圓 在朝鮮
 金五圓 在樺太眞岡本町
 金百圓 在布哇
 金五拾圓 在南滿洲
 金百圓 在米國
 金百圓 在布哇
 他府縣

古田 治男
 田原 幸兵衛
 加増第一農事小組合
 須釜青會年
 須釜農事小組合
 婦人會
 南條婦人會
 鹽入 豊治
 荒井 九兵衛
 金子屋綿糸店
 以上

金五拾圓 東京牛込區赤城下町四
 鉛筆四十二 東京市外杉並町
 消ゴム四十八 大谷 嘉四郎
 小兒マント 一 縮入一 宮原 茂一郎
 金五拾圓 曹洞宗大本山 總持寺
 金拾圓 東京深川 加瀬 元治
 金拾圓 同 宮嶋 吉治
 金五拾圓 東京 松本 忠雄
 金貳拾圓 岩手縣氣仙郡猪川村長谷 森 和一郎
 金五圓 横濱青木町 青木 信一郎
 金參拾圓 東京 大日本佛教慈善會
 金拾圓 同 信交會一
 金貳圓 神戶市北須磨 平林 齊
 金拾圓 同 S 生
 金參拾圓 東京モスリン會社 東海 生
 金五圓 東京神田駿河町 宮澤 三十一
 金貳拾圓 神奈川縣關本 杉本 道山
 松風干菓子 八百枚 京都 西本願寺
 金八圓 東京 日本齒科醫學專門學校
 長野縣人有志一同

金五圓 神戶市
 金拾圓 愛知縣幡豆郡福地村
 金五圓 新潟縣高田市
 金貳拾八圓 北海道十勝國 河東郡鹿追村
 青年禮讚 二十部 東京
 金拾五圓 同
 金五拾圓 東京
 金參拾圓 同
 金貳拾圓 同
 金貳拾圓 同
 金拾圓 同
 金拾圓 同
 金拾圓 同
 金拾圓 同
 金拾圓 同
 金拾圓 同
 金拾圓 同
 金拾圓 同
 金拾圓 同

西澤 きのえ
 接木師一同
 東亞商工株式會社
 高田支店
 町田 春治郎
 柳澤 正夫
 外十三名
 文省社書店
 海東 生
 藤原 銀治郎
 小林 營成
 寺澤 正雄
 町田 濤治
 五明 砂
 北河原 松太郎
 更級郷友會
 宮本 清
 宮原 虎
 鈴木 宙
 五明 正
 風間 禮助
 本城 郡治郎

金拾圓 同
 金五圓 同
 金五圓 同
 金五圓 同
 金五圓 同
 金五圓 同
 金四圓 同
 金貳圓 同
 金貳圓 同
 金壹圓 同
 手拭二十 下伊那郡
 飯田町
 龍丘村
 生田村
 上伊那郡
 宮田村
 伊那富村
 伊那町
 宮田村
 中澤村

宮尾 善助
 戸谷 慎平
 越田 猪三郎
 和岡 眞一郎
 藤岡 梓樓
 町田 一男
 青木 才兵衛
 保柳 袈裟五郎
 北村 袈裟五郎
 東庄 吉
 宇都宮 尚弘
 岩上行 波
 常盤 旅館
 小池農家小組合
 松昭謙 輔
 岸本 與
 武井製糸場員一同
 伊那小學校搦平分
 教場職員生徒一同
 宮田春近村産業組合
 保科 虎三郎

金貳圓 南箕輪村
 諏訪郡
 單衣三、綿入三、帶二 上諏訪町
 衣類六點 岡谷
 手帳五拾三冊 岡谷
 金壹圓 宮川村
 西筑摩郡
 金參拾圓 福嶋町
 金拾五圓七拾八錢 奈川村
 同 同
 東筑摩郡
 金五圓 宗賀村
 金拾圓五拾貳錢 嶋内村
 金拾圓 坂井村
 金貳圓 片丘村
 金壹圓 坂井村
 金壹圓 本城村
 金五圓 生坂村
 金貳圓 同
 神子柴第一農家組合
 藤森 權之助
 林信一郎方
 小濱三郎
 林今朝市
 保科長谷雄
 農會技手
 小學校職員生徒一同
 小學校職員兒童一同
 婦人會
 宗賀婦人會
 岩垂しつゝい
 藥師殿布教所
 筑摩地村
 桂石農事組合
 常光寺
 松林寺
 宮下昌清
 窪田今朝治
 小學校職員兒童一同
 南部農事改良組合
 金五圓 中山村
 松本市
 五十聯隊十一中隊
 和田町
 金壹圓
 金參拾五圓五錢
 金六圓 新伊勢町
 金拾貳圓五拾錢
 金八拾壹圓六拾七錢
 金參拾圓拾壹錢
 金貳圓 松本市
 金四百拾貳圓 同
 北安曇郡
 金參圓 神城村
 金四圓九拾錢 同
 神城村
 金拾圓 同
 神城村
 金四圓 同
 金九圓六拾錢 同
 千石農事改良組合
 石農事改良組合
 中農事改良組合
 南農事改良組合
 南農事改良組合
 町農事改良組合
 村澤至貞
 北嶋文雄
 外五名
 西村柴門
 更級出身者一同
 五十聯隊
 新伊勢町有志者
 代表笛金藏
 五十聯隊
 一年志願兵一同
 松本聯隊區司令部有志一同
 松本商業學校職員生徒一同
 並柳區
 聯合青年會
 內山區
 佐野區
 澤渡區
 三日市場區
 飯田區

金拾圓 同
 同
 南安曇郡
 豐科町
 南佐久郡
 野澤町
 羽黒下驛
 金貳拾圓
 金拾圓
 中込村
 野澤町
 北佐久郡
 小諸町
 同
 岩村田町
 小諸町
 同
 志賀村
 北大井村
 金五圓
 飯森區
 堀之内區
 婦人會
 料藝組合代表
 坂口善四郎
 興志本合資會社
 南佐久郡各宗聯合會
 方面互助會長
 柳澤林藏
 野澤キリスト教會
 沼田啓三
 山長洋品店
 中澤さかい
 菱屋旅館
 山崎屋長三郎
 小學校
 兒童一同
 中村農事組合
 佐久琵琶吟友會
 小林賢吉
 金貳拾圓 岩村田町
 金貳拾五圓 布施村
 金五圓五拾錢 南御牧村
 金六圓五拾錢 同
 拾貳圓七拾五錢 同
 金壹圓八拾五錢 同
 金壹圓 同
 金壹圓 同
 金四圓貳拾錢 同
 金四圓五錢 同
 金參圓 同
 金七圓七拾錢 同
 金貳圓五拾錢 同
 金壹圓貳拾錢 同
 金壹圓五拾壹錢 同
 金壹圓六拾錢 南御牧村
 金四圓六拾錢 同
 金參圓四拾錢 同
 金貳拾壹圓四拾貳錢 同
 金貳圓參拾錢 同
 金壹圓 同
 小學校職員生徒一同
 役場員一同
 入合農事組合
 中町第一農事組合
 宮本第四農事組合
 中町第三農事組合
 中町第四農事組合
 上町第二農事組合
 鶴沼農事組合
 宮本第五農事組合
 上町第一農事組合
 尾尻農事組合
 上町第三農事組合
 中町第二農事組合
 本町第二農事組合
 本町第三農事組合
 小學校職員
 少年赤十字團一同
 宮本第二農事組合
 依田秀

金拾圓 東内村
 金貳圓 神川村
 金四拾圓 同
 兒童服六枚 同
 金百拾貳圓七拾錢 依田村
 金參拾壹圓九拾八錢 同
 金拾圓 鹽川村
 金參圓 依田村
 金五圓 同
 金五圓 丸子町
 金五圓 浦里村
 金壹圓 浦里村
 金拾貳圓五拾錢 浦里村
 金壹圓 依田村
 金壹圓 同
 金壹圓 同
 金五圓 同
 手拭五十一 上田市
 杓子百本 松尾町
 金五拾圓 同
 金貳圓 上田市

青 年 會
 青木蒼久保
 少年少女會
 小學校職員兒童
 依田村一同
 小學校職員兒童
 婦 人 會
 尾野山婦人會
 尾野山禁酒共鳴會
 中丸子學友會員一同
 越戸第二農事組合
 小縣郡農會 田子 林之助
 越戸共同經營組合
 茂澤第一農家組合
 茂澤第二農家組合
 茂澤第三農家組合
 越戸第三農事組合
 新 中 樓
 會 根 喜代太郎
 軍 人 聯合分會
 無 名 氏

金拾圓 同
 數ノ子三百貫 上田市天神町
 金五圓 袋町
 金五圓 同
 金七圓 同
 金參圓 同
 金五圓 同
 金貳圓 同
 金參拾圓 同
 下高井郡
 金拾圓 中野町
 金五拾圓 同
 金壹圓 往鄉村
 下駄八十足 中野町
 衣類六十五點 同
 金拾圓八拾七錢 上木島村
 金拾圓 平穗村
 金拾圓 平岡村
 金貳圓 往鄉村
 金貳圓四拾七錢 穗高村

高 嶋 庄太郎
 鴉 澤 林 藏
 袋町青年會
 上 田 支 部
 下紺屋町青年會
 原町青年會
 豊原青年會
 鎌原青年會
 鍛冶町青年會
 小縣蠶業學校職員生徒一同

金參拾七圓 瑞穂村
 金拾五圓貳拾錢 高丘村
 金五圓 同
 金貳拾八圓五拾五錢 往鄉村
 上高井郡
 金拾圓 保科村
 袴纏二 須坂町
 手拭三十 小布施村
 金百圓 白米二石五斗
 白麥二石五斗三升
 味噌四樽
 漬物二樽
 繩十八束
 着物五十
 其他七點
 金貳拾圓 保科村
 金貳圓五拾錢 保科村
 金拾圓 同
 金拾圓 川田村
 金五圓 山田村
 金參拾圓 保科村
 杓子百本 保科村

犬飼區 柏尾區 福島區
 北原區 針田區 關澤區
 神戶區 重地原區 笹澤區
 前坂區 小菅區
 安源寺 共同經營組合
 有 志 者
 穗 高 村
 保科小學校
 保科消防組
 一 小 僧
 高畑殖産會社
 軍 人 分 會
 青 年 會
 婦 人 會
 在 字 組
 山崎定右衛門
 外 七 名
 保科小學校職員一同
 婦 人 會
 田中屋利七
 山 田 溫 泉
 袖山誠友社

綿布五反 須坂町
 金五拾圓 川田村
 金拾圓八拾錢 川田村
 金 五 拾 圓 小布施村
 金五拾參圓八拾六錢 同
 金貳百圓 龜倉
 金拾圓 同
 金拾五圓 須坂町
 金五圓 綿内村
 衣類五十枚 保科村
 草履五十束
 ワラジ五十束
 金五拾圓 同
 金參拾圓 同
 金貳拾七圓六拾五錢 川田村
 金九圓七拾錢 川田村
 金拾四圓五拾錢 同
 金八圓拾錢 同
 タヲル六反 山田溫泉
 金參拾圓 須坂町
 衣類雜品五ヶ 須坂町

匿 名 氏
 川 田 村
 小 出 研 究 會
 玄 戒 一 寺
 授 戒 一 寺
 須 坂 町
 上 高 井 婦 人 會
 龜 倉 支 部 員 一 同
 役 場 員 一 同
 綿 内 青 年 會
 婦 人 會
 軍 人 分 會
 青 年 會
 平 林 新 平
 豐 洲 村
 保 科 村
 川 田 村 小 學 校 職 員 生 徒 一 同
 婦 人 會
 川 田 町 婦 人 會
 川 田 少 年 會
 藤 井 旅 館
 須 坂 明 照 會

金參拾圓 同 小田切 清之助
 金貳圓 同 新友會
 金貳圓四拾錢 川田村小學校內 關本甚藏
 下駄四十足 須坂町 キリスト教會
 金五圓五拾錢 須坂町小學校職員兒童一同
 金拾圓 井上村 婦人會
 金七圓 須坂町 未申同級會
 金貳拾圓 都住村
 金貳拾參圓參拾五錢 仁禮村 大谷不動尊披
 衣類雜品二百五點
 金貳拾圓 井上村 豐洲村小學校職員生徒一同
 金五圓 幸高青年會
 金五拾圓 小布施村
 蠶種五枚半 井上村 竹內源之助
 金貳拾貳圓 日野村
 金八拾七圓 綿內青年會
 金五圓 綿內青年會
 金拾五圓五拾錢 高甫村 青年會
 金拾參圓五拾錢 山田村役場
 綿布十反 大正生命保險會社須坂監督所有志
 金貳圓五拾錢 豐丘村 青年會
 金貳圓五拾錢 同 軍人分會

金貳拾七圓 豐丘村
 金貳圓 同
 下水內郡
 金五圓 外樣村
 金壹圓五拾錢 飯山町
 金參拾圓 外樣村
 金壹圓 豐井村
 金貳圓 同
 簍八十枚 溫井村
 金貳圓 岡山村
 金五圓 永田村
 金五圓 同
 金貳拾九圓五錢 豐井村
 金參拾圓五拾五錢 常盤村
 金參拾貳圓拾錢 大田村
 金貳拾四圓七拾五錢 永田村
 金參拾壹圓 秋津村
 金拾五圓 豐井村
 金四圓九拾五錢 岡山村
 金壹圓八拾五錢 同
 金四圓八拾錢 同

有志者 園里婦人會
 慈善會
 丸山徳明
 丸山こめ
 和合會
 鬼坂青年會
 奧出山婦人會
 溫井青年會
 竹井萬治郎
 親川青年養德會
 親川勤儉貯蓄救助會
 有志者
 有志者
 有志者
 有志者
 有志者
 豐井小學校一同
 溫井組
 羽廣山組
 上境組

金壹圓五拾錢 同
 金七圓九拾五錢 同
 金壹圓拾錢 同
 金九拾五錢 同
 金參圓六拾錢 同
 金參圓五拾錢 同
 金六拾六圓六拾七錢 同
 上水內郡
 金五圓 七二會村
 金拾圓 安茂里村
 繩七束 大豆嶋村
 金貳拾圓 安茂里村
 白米一俵 同
 白米一俵 朝陽村
 布四反 豐井村
 單衣三枚手拭一反 豐野
 味噌五樽醬油十樽
 金百五拾圓
 金參圓
 金拾圓 小田切村
 繩二十束 安茂里村
 木材十三點

下境組
 桑名川組
 土倉組
 柄山組
 藤澤組
 大瀧組
 飯山町役場
 笹平部
 西河原青年會
 佛教婦人會
 塚田七郎
 塚田佐市
 丸山榮治郎
 神田よし
 西川新吉
 七二會村
 小田切信購組合
 西澤魚店
 小路部落一同
 岡村半一郎

靴二十ヶ
 金六拾圓五拾錢 同
 金貳拾圓 同
 金拾七圓 同
 金壹圓拾錢 淺川村
 金拾圓 同
 金五百貳拾圓六拾五錢 安茂里村
 松丸木十二本
 下駄二十足
 小學校兒童用綴
 方原紙三千枚
 鎌五十枚
 金拾圓 古間村
 金百圓 大豆嶋村
 金拾五圓 小田切村
 金參拾圓 榮村小學校職員兒童一同
 金拾圓 南小川村小學校職員生徒一同
 金貳拾圓 戶隱神社中協和會
 手拭二十六筋 柵村
 金貳圓 古間小學校
 金五圓 若槻村
 金參圓 柏原村
 金拾五圓五拾錢 同
 鳥居村
 仁ノ倉佛教婦人會
 鳥居青年會
 職員生徒一同

松嶋提灯店
 小市婦人會
 吉窪本組
 小學校職員生徒一同
 會山君子
 上水內郡役所職員一同
 安茂里村
 大豆嶋村小學校職員兒童一同
 山田正吉
 松岡組
 小田切村
 榮村小學校職員兒童一同
 南小川村小學校職員生徒一同
 戶隱神社中協和會
 古間小學校
 上祖山處女會
 軍人分會
 仁ノ倉佛教婦人會
 鳥居青年會
 職員生徒一同

金拾貳圓 中鄉村 職員生徒一同
 金拾五圓 榮村 西部農學校職員生徒一同
 金五拾五圓 柳原村 柳原村外各種團休

金百貳拾四圓參拾錢 若槻村
 上野北組婦人會
 上野南組婦人會
 上野青組婦人會
 檀田婦人會
 檀田婦人會
 吉條婦人會
 東條婦人會
 檀田青年會
 檀田青年會

金貳拾五圓六拾五錢 淺川村
 清水區 眞光寺區
 西澤區 中會根區
 押田區 畑山區
 福岡區
 長野市 菅沼農家組合

金八拾圓 三水村
 金五圓 神郷村
 蠶種二枚 志鹽處女會
 手拭二十三筋 北小川村小學校職員兒童一同
 金拾參圓貳拾參錢 舟岳共立會
 鎌百三十七枚 淺野青年會
 金貳拾七圓 東小學校職員兒童
 金四圓六拾六錢 水内村

西山部佛教會
 日下野小學校一同
 水内村有志者

津和村小學校職員兒童一同
 淺川村 三ツ出區長 永井鶴松
 一之瀬區長 石坂孝藏
 同 竹ノ下區長 松木 菊太郎
 同 宮ノ前區長 松木 忠之助
 南小川村 菅沼農家組合

白米十俵 長野市 甲洲屋
 ワラジ百三十足 池田元吉
 金百圓 倉石完三
 手拭二百本 同 横文陶器店
 土瓶百五十五ヶ 長野市 酒井牧男
 菓子鉢百五十五ヶ 同 信濃毎日新聞社
 金拾圓 同 小坂順造
 金貳拾圓 同 信濃毎日新聞同人會
 金參百圓 同 信濃電氣株式會社
 金百圓 同 小林 固太郎

金貳百圓 羽織二外六點
 下駄百足 同
 金拾圓 同
 單衣百枚 同
 布團五枚 同
 文具一箱 同
 手帳一〇 同
 着物一〇 同
 ドンブリ九百ヶ 同
 手拭百筋 同
 白足袋 六十
 紺足袋 五十
 靴十打 同
 醬油十樽 長野市
 味噌五樽 同
 雜記帳千冊 長野文具商組合
 鉛筆千五百本 同
 毛筆二十本 同
 足袋十足 同
 筆入百ヶ 同
 朱墨入一瓶 同
 手拭百 同
 金貳拾圓 元善町
 金拾圓 長野市

長野市 ミン学校
 德武 德太郎
 會津友吉
 信濃裁縫女學校校友會
 權田 精一郎
 金兒 佐太郎
 宮川 勝三郎
 宮澤 道太郎
 小妻寬商店
 高橋 幸吉
 西澤 新吉

金拾圓 善光寺旅館店員共濟會有志
 同東和田 小布施 徳武
 同 嬌風會長 ノルマン
 同 同 波邊 周治
 同 同 松嶋 八重治
 同 同 梅谷 さと子
 同 同 伊東 乾
 同 同 大勸 進
 同 同 水尾 寂曉
 同 同 東飯田支店
 同 同 善光寺 白蓮坊
 同 同 長野師範學校職員一同
 同 同 大日本法令出版株式會社
 同 同 中村青年會
 同 同 北條青年會
 同 同 同中御所
 同 同 青友會
 同 同 明友會
 同 同 松屋只吉
 同 同 朝陽組

食パン五百六十ヶ	同南縣町	内山周藏	金拾圓	同西町	金兒英學
麻履十足	同權堂町	武田大助	金貳拾圓		長野縣信用組合聯合會
手帳二十冊		落合周造	金貳拾圓		長野縣購買組合聯合會
罐詰四ヶ	日本火災保儉代理店	長野婦人會	金拾圓		善光寺傳導講本部
慰問袋二六		嬌風會長野支部	金貳百圓		長野市役所
丸干一箱	同千歲町	根岸房吉	金貳百圓		長野市料藝組合
タフル百五十	同後町	吉野屋商店	金貳拾圓		宮嶋次太郎
鉛筆百二十		柳澤萬年筆店	金參拾圓		長野縣曹洞宗事務所
汁椀二百ヶ	長野市	甘利藤四郎	金貳圓		小山喜美夫
茶盆五十		加藤彌司馬	金百圓		鈴木鶴治
醬油五樽		玉木喜十郎	金參百圓		鹽谷剛哉
湯吞百ヶ		夏目平助	タフル二百筋		愛國婦人會長野支部
手拭八十		丸田平助	金參拾五圓		綠町
衣類三十七點		瀧澤嘉助	金五圓		綠町修養會
角盆三十五		塚田勘藏	金五圓		難波國太郎
ドンブリ百五十五ヶ		和田布團店	味噌、白米		丸山時治郎
塗箸百人分		小妻屋商店	白米五升		太田忠吉
衣類一車、戸九本		大内洋物店	其他數品		中惣商店
外數點			敷莫薩百枚		清水與助
着布團五枚			鼻紙百五十束		
足袋百六十三			ビスケツト三百五十袋		
手拭二百					

茶器百六十組	長野繭糸株式會社	德倉國治郎	浴衣六十八枚	藤屋平五郎
手拭三十、盆十		幼稚園	其他五十	高屋庄太郎
飯椀三十ヶ		永井將英	手拭四反	五十嵐一郎
衣類一包		押鐘尼	シウタン二	柳澤勘之助
干鬮二箱、菓十束		押鐘有志者	バケツ十ヶ	齋藤
外三十六點		塚田傳四郎	金參拾圓	金兒源助
衣類三		武井市左衛門	單衣三	小池清之助
古着六十		柏友吳服店	鍋五十ヶ	長野材木商組合
ザル五十ヶ		丸上新開店	金拾圓	長水理髮組合
ネコ腰卷五十		越野高治郎	金拾五圓	同役員一同
手拭百五十		前嶋壽太郎	金六圓	小山誠吉
新聞四十貫		岡澤武一郎	手拭百	石堂町
手拭六十		明盟婦人會有志者	金七圓	高田
足袋二十足		田中益之助	白米八斗八升	川端區青年會
背負子一		堀定治郎	味噌一樽	牧屋綠之助
櫛二百二十、白黒絲各百五十		永井將英	古着數點	鈴木千歲
針七百五十、鉄八十		長野實科女學校生徒職員一同	衣類三十點	柳澤吳服店
衣類十五點		長野縣農會	鉛筆十二打	西澤太一郎
火箸五十		渡部藥局	綿布百五十反	無名氏
金拾圓			衣類四點	
金參拾壹圓八拾貳錢			衣類三點	
金百圓				
風藥百七十一				
漬物二樽				

會席盆百五十九枚 篠ノ井町 更級繭絲利用組合
 太ナワ八束四把、細繩二束 榮村上横田 第一
 ワラ五十七束、鎌六丁 第一
 空依二十八俵、黄能銀九丁 第二
 天祥俵二本、空吹二十一 第三
 草履五足、草鞋十足 第三
 手拭百五十五 篠ノ井町 山屋吳服店
 五十五束 川柳村 消防組
 藁五十束 川中嶋村 北澤よし
 靴一ヶ、夏帶一 榮村 村農會
 大根十八俵 同東横田 第一
 馬鈴薯十五俵 第二
 菜五俵、人參二俵 第三
 午房一俵、太十一束 第四
 諸積二十貫 第五
 葱六十三貫五百匁 第六
 摺木五十本 篠ノ井町 酒井熊太郎
 金參拾圓 榮村 御幣川區
 金百圓 青木嶋村 下堰水利組合
 金貳拾圓 曹洞宗川中嶋寺院 丹波島小壯會
 金貳拾圓 篠ノ井町 西部一同
 金參拾圓 榮村 寺澤信太郎
 金五拾圓 青木嶋村 會區

金五拾圓 稻里村 田中重治郎
 金貳拾圓 眞嶋村 前淵大正會
 金貳拾參圓五拾錢 稻里村 野池組一同
 金參圓 眞嶋村 中村鐵平
 金貳圓 川中嶋村 中谷組、橋場組、二ツ屋組
 白米二斗五升 稻荷山元町 西澤廣雄
 金貳拾圓 榮村 横田區
 金參百圓 川中嶋村 御厨區
 金拾壹圓 同 上水鉤寺組
 金拾圓 同 於下組
 金拾圓 篠ノ井町 農具店
 金百六拾參圓拾錢 川中嶋村 四ツ屋上組一同
 白米一斗三升外數點 同 今里區
 金百參拾八圓 同 梵天友誼會
 白米一石六斗六升 眞嶋村 上中堰普通水利組合
 金五圓 ナワ二十六束 一婦人
 ナワ二十五束 伊モ三十五貫 鯨澤堰水利組合
 金壹圓 金壹圓 金五拾圓

金四拾五圓六拾錢 東福寺村
 金五拾五圓貳拾錢 阿彌陀堂區
 ナワ二十一束 川中嶋村 新田組
 白米六斗七升 眞嶋村 堀東同志會
 金貳拾圓參拾錢 眞嶋村 御幣川各農家組合
 藁二十五束、外四點 榮村 青 第一區軍人分會
 金拾五圓 青木嶋村 共學舍
 金五拾圓 眞嶋村 涌池消防組
 金拾圓 眞嶋村 柳澤隣治郎
 金貳圓 同 消防組頭 小森澤區
 金百參拾圓 川中嶋村 山本幾之助
 金拾圓 眞嶋村 北村青年會
 金六參拾圓 上山田村 稻里村
 白米一石二圓 川中嶋村 消防組
 金貳拾圓 青木嶋村 商工會
 金參拾圓 同 青木嶋村 青年會
 金參百參拾四圓 同 大塚綱嶋組
 金參拾圓 川中嶋村 中嶋青年會

白米二俵 篠ノ井町 小嶋田村役場
 握飯二箱 同 小林重太郎
 毛布三 同 宮入佐久
 手拭二百 同 宮崎運平
 德利盃四十三 同 四海波
 澤庵漬二樽 中津村 田嶋準一郎
 藁六十束、繩二十四束 川中嶋村 北河原組一同
 味噌六樽、醬油三樽 味噌一枚、白米五升 眞嶋村 更級郡農會
 太ナワ四十五 東機械ナワ七十貫 御厨村 技術員會
 ナワ十四束、同八丸 味噌五樽、漬物五樽 川中島村 北戸部青年會
 白米四十二升 雜品十點 稻里村 三村鶴治郎
 手拭三 眞嶋村 野池組
 太ナワ二十七束 篠ノ井町 小山三藏
 バケツ百ヶ 川中嶋村 上村組
 大根九束 味噌六貫五百 麥桿帽二十ヶ 上水鉤荒屋組
 藁二十八束、外數點 同 丸山りき
 衣類七點 同

金網ザル五十ヶ
 サル百ヶ
 太ナワ十束
 ワラ二十五束
 エリ一打
 ナワ二十束
 機械繩十七丸
 ナワ二車
 ナワ二十七束
 ワラ十二束
 味噴二樽
 空吹六ヶ
 藁自動車五台
 白米 外一點
 茶碗千六百ヶ
 杓子百二十本
 鉋丁百二十丁
 風呂敷百六十一
 金五拾圓
 繩二百四十二束
 白米三斗一升
 空俵十ヶ
 ネコ二枚
 空吹四十三ヶ
 ワラ荷車六台
 ナワ三十束

東福寺村
 小 森 部

伊藤 與四郎
 小嶋 田青年會
 上越 青年會
 倉石 久福
 眞嶋 俱樂部
 更東 義會
 上布施 青年會
 丹波 嶋軍人會
 大久保 自轉車店
 會區一、二、三
 四、五農家組合
 北村 和一郎

金拾六圓八拾錢
 ワラ九十七束
 太繩九十七束
 白米二斗二升
 網二筋、粉二斗
 味噌二十四貫
 着類二十一貫
 漬物一樽
 夏芋二十貫
 其他七點
 梅干一樽

稻荷山町
 東福寺村
 稻里村
 川中嶋村
 篠ノ井町
 同
 眞嶋村
 中津村
 青木嶋村
 稻荷山町
 稻荷山町

小泉 末太郎
 小森 青年會
 稻里 產業組合
 今里 信用購買組合
 丸共 製糸場
 丸共 現業員
 中津村 農會
 聯合 青年會
 山本 相治
 婦人 分會
 軍人 分會
 榮葉 組合
 二葉 組合
 信里 村
 西寺尾 村

東福寺村 役場

金五拾圓
 金拾六圓貳拾錢
 金五拾圓
 衣類雜品三百五十點
 稻種子一俵
 金拾圓
 金百圓
 金拾圓
 金五圓
 金貳拾圓
 金拾圓
 金參拾貳圓
 金七拾圓
 毛絲シャツ二打
 金百圓
 金貳拾圓
 金五拾圓
 金五圓
 金拾圓
 金貳拾八圓
 金五拾圓
 金參圓

川中嶋村
 更級村
 八幡村
 篠ノ井町
 榮村
 篠ノ井町
 同
 同
 川中嶋村
 同
 篠ノ井町
 同
 同
 力石村
 同
 稻荷山町
 川中嶋村
 稻荷山町
 八幡村
 村上村

婦人會
 青年會
 月都 婦人會
 宮澤 軍三郎
 外 百二十名
 高田 農家組合
 會區 墨林社
 更級郡役所員一同
 篠ノ井 驛互助團
 唐木田 晴 姫
 五明 正
 商工會 役員一同
 北部菓子商組合
 メリヤス 組合
 須藤 瀧三郎
 愛國婦人會 更級郡幹事部
 在郷軍人分會
 村 農會
 宮坂 火藥店
 商工 組合
 消防組員一同
 長門 初太郎
 宮下 勝己

金壹圓
 金拾圓
 金五拾圓
 金五圓
 ナワ三十一束
 シヤブル百七十
 ザル二百
 農具十七點
 雜品三點
 同 二點
 草搔百五十四丁
 種籾一俵

無名氏
 丸山 啓吾
 更級郡醫師會
 飯嶋 佐平治
 青年會
 村 農會
 村 農會
 若林 とも
 中澤 たけ
 軍人分會
 青年會
 同窓會
 婦人會
 更級郡佛教社會事業協會
 眞嶋 村
 日原 村
 小泉 茂十郎
 天理 教理生會
 更埴 支會
 村上 村

金四拾七圓
 金五拾圓
 金參百拾壹圓四拾貳錢
 金壹百圓
 金五圓
 金參拾圓
 金參百圓

稻荷山町軍人分會
 同
 桑原村
 鹽崎村
 北部實業學校生徒
 信里村
 西寺尾村
 中津村
 稻荷山町

金百圓 村上村
 金拾圓 桑原村
 金九圓五拾錢 稻荷山町
 金五圓 同
 金拾圓 東福寺村
 金參百參拾五圓 信里村信用販賣購買組合
 金參百四圓八拾錢 更級村
 金貳百六拾五圓八拾九錢 桑原村
 金參百五拾圓 川柳村
 金五圓 上山田村
 鉛筆一打 川中嶋村
 蠶種十四枚 青木嶋村
 小柿苗六百本 真嶋村
 白米一石 常盤婦人會
 其他數點 榮村
 ナワ十束 御幣川
 其他數點 各農家組合

村農會 消人分會 軍人分會 青武年會 向生組 衛生組 信用購買組合 同窓會 婦人會 婦人會 墨友會 信用購買組合 信用購買組合 上山田村 更級村 桑原村 川柳村 三好屋 渡邊益太 小山藤太郎 常盤婦人會 御幣川 各農家組合 青年會

ザル八十ヶ 柄杓五十ヶ 其他四十一 繩十一束 藁四十束 菓子百八十斤 ワラ四台 ワラ八束 漬物一樽 餅焼シ一 湯沸シ一 白米七斗五升 味噌二樽 漬物二罐詰四 背負子六十五 味噌一樽 衣類二十九點其他五點 同 手拭十五反、衣類十三點 篠ノ井町 湯吞百ヶ、罐詰一箱 中津村 太繩二十束、白米二斗一升 八幡村 太繩三十束、ワラ五十束 川柳村 金貳拾圓 ワラジ十束 草カキ二十 欽七、鎌五十 太繩三十 ザル百二十六 其他三

力石村 力石消防組 塔ノ腰組 木村菓子店 本堂組新青俱樂部 山崎運平 柳澤峯太郎 古森澤組 大文字 助四郎 青木 治郎兵衛 下水 鮑婦人會 瀨原田婦人會 東飯田酒店 那第一農家組合 石川消防組 村農會

ナワ三十束 西寺尾村
 湯ワカン五十 鹽崎村
 片口百ヶ 北村富三郎
 下駄六百足 更埴履物商組合
 茶碗七其他五點 榮村
 モロコシ種一箱 川中嶋村
 風呂桶十本ニテ一日接待 中津村
 古蠶籠百枚 榮村
 白米四石一斗 青木嶋村
 繩七束 池田五十二郎
 白米一石 更埴銀行
 手拭二〇〇本 川中嶋村
 金拾圓 下水 鮑婦人會
 金六拾參圓 川崎町一同
 金拾壹圓拾錢 青木嶋村
 太繩二十五束 北部實業中等學校生徒一同
 金貳拾圓 村上村
 金拾五圓 信里村
 金八百參圓六拾錢 八幡村
 古着二十五點 各種園林
 茶碗五十ヶ 篠ノ井町
 鉛丹百磅 海野孝政

軍人分會 北村富三郎 北澤武右衛門 北澤儀十郎 更埴履物商組合 會區第四農事組合 長田君之助 原暖友會 柳澤徳治 青年會 池田五十二郎 更埴銀行 上村區 下水 鮑婦人會 川崎町一同 青木嶋村 村上村 成田正一郎 希望社猪友一同 各種園林 篠ノ井町 海野孝政

金五拾圓 回神丹一瓶 目藥大瓶一 外點眼器 鹽崎村 中津村 堀 仁二郎 長谷青年會 力石村 信田村 牧年會 青人會 婦人會 鹽崎村 石田正氏 同 村農會 榮村 小林自轉車店 中津村 信濃木工學校 丸田美一 元町青年會 稻荷山藪糸同業組合 四ツ屋青年同志會 軍人分會

藁二百五十束 中津村 今井區
 葎百束 西寺尾村 產村農組
 金五拾圓 信里村 青年會
 噴霧器一台 榮村 小林廣作
 金參拾圓 信里村 婦人會
 蠶籠二百枚 八幡村 小松與三郎
 金拾圓 篠ノ井町 佐藤搔圖治
 金四拾五圓 同 警察署員一同
 小柄杓二十ヶ 鹽崎村 宮崎關治郎
 衣類十二點 川中嶋村 無名氏
 金九圓 眞嶋村 川合有志主婦
 白米一斗九升 川柳村 天理教信聖宣教所
 金拾參圓 小嶋田村 小嶋田青年會
 無料理髮一日間 中津村 三宅理髮店
 金參百圓 小嶋田村 小嶋田村
 除草器三二ザル三五 鎌七、稻拔二 茶碗一五 鋤一、斗樽三 背負子三、バケツ三 蠶籠百五十 蠶籠三五 葉四束、蠶籠三五 ショレン、天秤棒一 鉄柄二、シャベル四 繩十五束 鹽崎村 村農會

金五百五拾圓 更府村 稻荷山町
 金拾圓 青年團
 種粃二十五俵 更級郡各町村農會
 金千八百圓 篠ノ井町 有志者
 金參拾圓 村上村 小學校職員兒童一同
 金貳拾參圓六拾五錢 篠ノ井町 更級實科女學校職員兒童一同
 金拾七圓五拾四錢 上山田村 小學校職員兒童一同
 金五拾圓五拾壹錢 更級村 小學校職員兒童一同
 金拾七圓五拾五錢 八幡村 小學校職員兒童一同
 金貳拾四圓貳拾七錢 桑原村 小學校職員兒童一同
 金四拾圓 稻荷山町 小學校實科高女職員生徒一同
 金五拾圓九拾壹錢 鹽崎村 小學校職員兒童一同
 金拾五圓六拾錢 川柳村 小學校職員兒童一同
 金貳拾六圓五拾錢 信田村 小學校職員兒童一同
 金貳拾五圓 大岡村 小學校職員兒童一同
 金拾參圓貳拾錢 信級村 小學校職員兒童一同
 金拾壹圓貳拾六錢 日原村 小學校職員兒童一同
 金參拾圓 牧鄉村 小學校職員兒童及西部公民學校生徒一同
 金拾五圓 更級郡中部公民學校職員生徒一同

金參百參拾圓 東福寺村
 金參百拾圓 更府村
 金貳圓 東福寺村
 金貳百四拾圓 小嶋田村
 尺度百五十五本 安川はま
 握飯(白米一俵分) 中津村
 金五圓 篠ノ井町
 金拾圓 眞嶋村
 金五圓 上山田村
 金五拾圓 鹽崎村
 金拾圓 職工手間延五十日 更級郡看護婦會
 金貳拾圓 大岡村 職工組合
 金壹圓 信級村 大岡青年會
 金參拾圓 篠ノ井町 平林喜美司
 金五拾圓 川柳村 嶋田佐門
 眞嶋村 小林八十八方
 稻荷山町 市川福園
 同 清水良作

金參拾圓五拾錢 更府村 小學校職員兒童一同
 金參拾圓 信里村 小學校職員兒童一同
 金拾參圓參拾五錢 御厨村 小學校職員兒童一同
 金四拾五圓 中津村 小學校職員兒童一同
 金六拾貳圓八拾錢 下水鉋村 小學校職員兒童一同
 金六圓五拾錢 青木嶋村 北部實科中等學校生徒一同
 金四拾圓 眞嶋村 大塚小學校職員兒童
 金參拾九圓四拾八錢 眞嶋村 小學校職員兒童一同
 金拾五圓 西寺尾村 小學校職員兒童一同
 金參拾七圓 東福寺村 小學校職員兒童一同
 金九拾貳圓拾六錢 通明小學校職員兒童一同
 金百五拾九圓四拾五錢 信級村 牧鄉村弘崎青年會一同
 金參圓 小嶋田村農會
 鎌百枚 川中嶋村 秋山鍛冶工場
 金物無料修繕 林源吾
 白米二斗五升 本村
 金拾圓 共和村 山口源之丞
 吹二ヶ繩二束 共和村 岡澤信衛
 白米一俵 味喰一斗 共和村 岡澤信衛
 握飯二箱 學校内 五坂明千雄

金五拾錢
 金貳圓
 金壹圓
 金參圓
 金壹圓五拾錢
 金貳圓五拾錢
 金參圓五拾錢
 金貳圓五拾錢
 金八圓

深町組

平林 喜多平
 兩角 熊太郎
 宮澤 しげ
 兩角 艶之助
 平林 今朝八
 兩角 袈裟治
 平林 龜吉
 北澤 治太郎
 金澤 小治郎
 兩角 主水

金參圓
 金參圓
 金貳圓五拾錢
 金貳圓五拾錢
 金貳圓五拾錢
 金貳圓
 金壹圓
 金壹圓
 金壹圓

本組

山口 喜三郎
 山口 愛治
 山口 酒造太郎
 山口 傳重
 木藤 清一郎
 木藤 賴保
 山口 運衛
 山口 半助
 山口 佐藤治
 山口 あぐり

細井 覺隨
 兩角 茂一郎
 岡澤 實治
 岡澤 藤平
 越川 安治
 若林 守治
 小河原 茂作
 小河原 道治郎
 西澤 金彌
 岡澤 治郎兵衛
 小林 義衛

金貳圓五拾錢
 金貳圓
 金壹圓
 金貳圓五拾錢
 金貳圓五拾錢
 金貳圓五拾錢
 金六圓
 金七圓
 金貳圓
 金貳圓五拾錢
 金六圓
 金五拾錢
 金八圓
 金壹圓五拾錢
 金壹圓五拾錢
 金五拾錢
 金壹圓
 金拾圓
 金拾五圓
 金壹圓
 金參圓
 金壹圓五拾錢

越川 道雄
 兩角 今朝平
 小河原 今朝五郎
 西澤 多馬治
 小河原 初
 岡澤 今朝好
 越川 清之助
 岡澤 熊助
 西澤 恒三郎
 西澤 勘治郎
 岡澤 繁治
 柳本 やすの
 岡澤 茂男
 兩角 森三郎
 西澤 辰三郎
 越川 保衛
 西澤 市治
 小河原 健治郎
 小河原 欽治
 西澤 直
 西澤 淺治
 宮坂 昌哉

金壹圓
 金貳圓五拾錢
 金五圓
 金壹圓
 金貳圓
 金六圓
 金六圓
 金貳圓五拾錢
 金壹圓
 金參圓
 金拾圓
 金拾圓
 金貳圓五拾錢
 金七圓
 金貳圓五拾錢
 金貳圓五拾錢
 金貳圓五拾錢
 金拾圓
 金壹圓五拾錢
 金壹圓
 金五拾錢
 金五拾錢

兩角 袈裟治
 小林 元綱
 西澤 義衛
 宮下 文太郎
 越川 福衛
 小河原 七之助
 西澤 信平
 西澤 豐治郎
 越川 嘉平
 越川 庚
 越川 隣之助
 平林 健治
 若林 音之助
 若林 弘衛
 若林 佐平
 若林 文一郎
 若林 和右衛門
 越川 喜市
 岡澤 竹雄
 若林 榮三郎
 德永 紋左衛門
 若林 都男

金壹圓
 金壹圓
 金貳圓五拾錢
 中
 金參百圓
 金五拾圓
 金四拾圓
 金五圓
 金四拾圓
 金參拾圓
 金拾圓
 金拾圓
 金五圓
 金參圓
 金五圓
 金七圓
 金拾圓
 金四圓
 金六圓
 金參圓
 金六圓
 金拾八圓

組

鈴木 斧三郎 金參圓
 小林 覺治郎 金拾圓
 宮下市郎左衛門 金拾五圓
 寺澤 種二郎 金百圓
 大澤 廣太 金貳拾圓
 寺澤 廣治郎 金拾貳圓
 寺澤 善治 金拾圓
 岡澤 市之助 金七圓
 寺澤 準四郎 金七圓
 寺澤 一郎 金六圓
 寺澤 慶太郎 金拾圓
 岡澤 正美 金八圓
 寺澤 欽治 金貳圓
 寺澤 又治 金參圓
 寺澤 武三郎 金參圓
 丸山 芳英 金貳圓
 西澤 いぬ 金五圓
 小林 要人 金貳圓
 寺澤 慶治郎 金貳圓
 久保田 松太郎 金參圓
 藤澤 重雄 金參圓

寺澤 繁治
 原田 宇吉
 仁科 周平
 吉澤 房治
 大澤 鐵左
 平林 竹次郎
 久保田 仲治
 久保田 國治
 岡澤 龜治
 瀧澤 茂一郎
 太田 忠男
 原田 嘉十郎
 原田 嘉十郎
 堅谷 安茂
 久保田 九一郎
 石井 友吉
 西澤 平十郎
 柳澤 勝太郎
 村澤 喜三郎
 太田 元春
 德永 沖太
 岡澤 惠治郎
 鹽入 貞作

金貳圓
 金貳圓
 金五拾錢
 金壹圓
 金五拾錢
 金壹圓
 金五拾錢
 金壹圓
 金拾圓
 金拾圓
 金拾圓
 金壹圓
 金貳圓
 金貳圓
 金壹圓
 金貳圓
 金拾五圓
 金拾五圓
 金拾八圓
 金五圓
 金拾五圓
 金四圓
 金拾圓
 金貳圓
 金壹圓
 金貳圓
 金五圓
 金六圓
 金五圓

南

組

柳澤 豊四郎 金貳圓
 原山 竹治郎 金拾貳圓
 久保田 そよ 金拾圓
 久保田 豊政 金壹圓
 岡澤 よしの 金參圓
 大澤 豊三郎 金貳圓
 越川 慶作 金壹圓五拾錢
 久保田 喜之作 金四圓
 久保田 袈裟師 金貳圓
 大澤 友四郎 金貳圓
 原田 俊作 金參圓
 原田 長左衛門 金拾圓
 太田五郎右衛門 金拾貳圓
 岡澤 龍右衛門 金七圓
 久保田 竹藏 金壹圓
 金兒 豊兵衛 金五拾圓
 寺澤 總之助 金四拾圓
 久保田 セツ 金貳拾圓
 大澤 茂尾 金拾五圓
 瀧澤 文五郎 金拾五圓
 瀧澤 時之助 金拾五圓
 寺澤 三之丞 金拾圓

平林 梅三郎
 鹽入 彌八
 大澤 清之助
 小林 彦重
 小林 新五郎
 小林 三郎
 西澤 武男
 岡澤 今朝吉
 鹽野入 市治
 青木 博
 久保田 伊三郎
 石井 彦治
 大澤 新太郎
 寺澤 豊治
 丸山 今朝吉
 林部 勝五郎
 林部 藤之助
 林部 安十郎
 岡澤 素一郎
 岡澤 龜吉
 藤川 隆算

久保田	袈裟師	若林	都男	岡澤	正美
岡澤	定治	瀧澤	文五郎	前澤	重雄
西澤	登治	古畑	甚太郎	鹽入	市治
小澤	義工	若林	守治	寺澤	又治
岡澤	武雄	細井	覺隨	太田	五郎左衛門
德永	沖治	大澤	しげを	寺澤	藏治郎
西澤	いぬ	丸山	芳英	久保田	銀太郎
岡澤	今朝吉	若林	左平	小河原	健治郎
石井	濱治	岡澤	伊佐男	小河原	茂作
石井	彦治	原田	俊作	平林	庄三郎
大澤	廣太	久保田	辨藏	柳澤	龜作
吉澤	房治	飯嶋	盛太郎	小田切	眞治
原田	宇吉	柳澤	和四郎	林部	象治郎
小林	要人	堅谷	きく	林部	勝五郎
原田	長左右門	磯貝	条治	岡澤	甚太郎
仁科	周平	下平	四五六	寺澤	定治
德永	豐治	德永	茂雄	林部	安十郎
鹽入	彌入	小林	新五郎	若林	勇作
大澤	清之助	小林	加治摩	德永	惣之助
寺澤	欽治	岡澤	素一郎	小林	房太郎
德永	幸治	村澤	萬一郎	堅谷	國治
柳澤	嘉左右門	中澤	政治	寺澤	萬作

堅谷 茂美 岡澤 龜治 小林 榮太郎
 原山 今朝五郎 堅谷 慶作 金兒 豊兵工
 德永 金作 林部 多々作 柳澤 豊四郎
 丸山 多賀太 黒岩 鶴四郎 山口 鶴藏
 兩角 盛三郎 兩角 九内 山口 佐太郎
 岡澤 よしの 久保田 豊政 小林 豊左右門
 小田切 傳内 嶋田 平十郎 宮入 あきを
 堅谷 林治

計 二百三十四
 新田 三十
 計 二百六十四

◎小松原區長を經由したる同情

一、更級郡川中嶋村字四ツ屋淨蓮寺住職彌津宗雄師は當時越後小丸山別院輪番勤務中不在の處招電に依り急遽飯院罹災者に對し金壹百圓を區長瀧澤鶴治氏へ見舞瀧澤區長は唐木田友彌氏を人夫として各罹災者一同へ配給した。

一、上高井郡仁禮村米子の不動寺では家内安全無病息災の御神符を區長宛郵送直ちに配給本部を經由各罹災者へ配付せり。

愛國婦人會同情記録

(大正十五年四月廿一日立案)

共和村小松原部落火災に關し慰問金募集方の件
 昨二十日更級郡共和村小松原部落に於ける火災は頗る悲慘を極め支部救済費にも差支を生る義と思考候間左記の通り不敢取幹事部所在地の委員區より慰問金を募集し寄贈相成可然哉相伺候也

支部長

各幹事部長殿

更級郡共和村小松原部落火災に關しては既に新聞紙上に御承知の通り二百餘戸の全焼者を出し罹災民約千餘名に達し其の狀況頗る悲慘を極めたる次第に有之就ては之れが救済方法として全縣下に涉り金圓募集の見込に候も何分至急を要する儀に付不敢取幹事部所在地の委員區に於て慰問金募集致度候に對右御承知の上御取纏め本月末日迄で當支部へ御送付方御高配相煩度此段及御依頼候也

共和村罹災者義損金 (長野市)

金額 住所 氏名
 壹圓 西長野 萬靜子

參圓	長田 要道
五圓	牛嶋 幸子
參圓	竹下 かつ子
五圓	和田 なか子
參圓	山崎 まつじ
壹圓	小嶋 浪江
貳圓五拾錢	小嶋 君子
貳圓五拾錢	義澤 うら子
貳圓	西澤 るい子
五圓	小林 ほろ子
五圓	宮澤 きぬ子
貳圓	丸山 みすゞ
參圓	宮澤 てる子
參圓	相原 秀子
參圓	細川 雅子
貳圓	花岡 千賀子
壹圓	原 ひで子
貳圓	西ヶ谷 すが子
五圓	村松 とし子
貳圓	黒岩 さた子
貳圓	原 君子
拾圓	梅谷 さと子

横澤町 縣 長田 要道
 縣 牛嶋 幸子
 縣 竹下 かつ子
 縣 和田 なか子
 縣 山崎 まつじ
 縣 小嶋 浪江
 縣 小嶋 君子
 縣 義澤 うら子
 縣 西澤 るい子
 縣 小林 ほろ子
 縣 宮澤 きぬ子
 縣 丸山 みすゞ
 縣 宮澤 てる子
 縣 相原 秀子
 縣 細川 雅子
 縣 花岡 千賀子
 縣 原 ひで子
 縣 西ヶ谷 すが子
 縣 村松 とし子
 縣 黒岩 さた子
 縣 原 君子
 縣 梅谷 さと子

五拾錢	縣町	三富れい子
五拾錢	西長野	淺見清子
壹圓	同	田口はる子
五拾錢	同	木塚みす子
五拾錢	同	鹽野谷きみ江
壹圓	同	伊藤つる
壹圓	田町	高橋まつ子
壹圓	千歲町	佐伯あや子
金拾錢	石堂町	依田節子
壹圓	田所町	包國かね子
五拾錢	縣町	片桐小吟
壹圓	縣町	三澤むら子
壹圓	同	塚本とみ子
壹圓	同	坂田ふさ子
壹圓	同	内海たき子
五拾錢	同	岸眞子
同	同	長南千代美
同	同	富田よしぎ
衣類一包	同	小池一枝
同	同	無名

愛第二二號

大正十五年四月卅日
 愛國婦人會上水内郡幹事部
 長野支部御中
 先般更級郡共和村小松原大火に關し罹災者に對し同情見舞として左記金額贈呈候條罹災者に分配可然御取計相成度此段御依頼候也
 左記
 金貳拾圓也
 送金書
 一金拾圓也 愛國婦人會長長野支部上高井幹事部山田村委員區
 右先般更級郡共和村小松原部落火災に付義損金應募致し度別紙爲替券に依り送金候也
 大正十五年四月廿七日
 上高井郡山田村役場内
 山田村委員長 宮川 順 作
 長野支部御中
 愛埴第二〇號
 大正十五年四月卅日
 埴科郡幹事部長

罹災者慰問金員送付の件
 四月二十一日付愛長第二七六號を以て御照會相成候共和村火災罹災民慰問金左記の通本日小切手を以て及送附候間可然御取り計相成度候也
 追而幹事部所在地の委員區は他の婦人會名儀にて募集せられたるを以て左記の町村よりの分取纏め候次第に付御了知相成度申添候
 尙領收書御送付相成度候

一金百四拾八圓四拾五錢 但し四百六名の慰問金

- 内譯
- 金貳拾六圓拾錢 八十二名分南條村委員區
 - 金四拾圓也 八十七名分杭瀬下村委員區
 - 金貳拾圓也 八十九名分倉科村委員區
 - 金拾圓也 八名分 松代町委員區
 - 金貳拾七圓六拾五錢 八十七名分西條村委員區
 - 金貳拾四圓七拾錢 五十二名分東條村委員區
- 以上

大正十五年四月三十日

愛國婦人會下水内郡幹事部長

長野支部長殿

更級郡共和村火災に對する同情金左記の通り別紙小切手

を以つて送付候也
 追て本日迄に纏らざるもの有之候條追送可致候

一金四拾圓拾錢
 内譯

- 金四圓五拾錢 幹事佐々木きよ子 扱分
- 金八圓也 同 嶋津常代 扱分
- 金拾圓八拾錢 幹事岡田ゆう子 扱分
- 金拾圓也 同 淺山正春 扱分
- 金六圓八拾錢 同 山本きし子 扱分

愛高第二九號

大正十五年四月卅日

上高井郡幹事部

愛國婦人會長長野支部御中

養損金送付の件
 更級郡共和村小松原罹災義損金左記の通り及送付候條可然御取計相成度候也

左記

- 金拾五圓也 高甫村婦人會上八十支會
- 金六圓也 同 下八十支會
- 金六圓也 同 野邊支會

貳圓
參圓
計金壹百圓拾錢也
金剛寺婦人會
笹井婦人會

愛埴第二〇號

大正十五年四月三十日

埴科郡幹事部

長野支部御中

罹災民慰問金送付の件

標記の件に付本日小切手を以て百四拾八圓四拾五錢送付の處尙左記二ヶ委員區より新に申込有之候間別紙小切手相添へ送付に及び候間可然御取計相成り度候也

一金參拾四圓參拾錢

内金貳拾壹圓六拾錢

金拾貳圓七拾錢

寺尾村委員區十四一名
豊榮村委員區六十六名

愛埴第二〇號

大正十五年五月三日

愛國婦人會埴科郡幹事部

長野支部御中

小松原罹災民慰問金送付の件(第三回目)

標記の件に付本日左の通申出有之候間別紙小爲替封入及送付候可然御取計相成度候也

一六六圓也

愛埴第二〇號

大正十五年五月三日

埴科郡幹事部

長野支部御中

小松原罹災民慰問金送付の件(第四回目)

標記の慰問金左記の通り申出有之候條及送付候間可然御取計相成度候也

一金參圓也

但し現金添附す

戸倉村委員區五名分

愛埴第七十方號

大正十五年五月三日

東筑摩郡幹事部

長野支部御中

慰問金送付の件

更級郡共和村火災慰問金募集の處本郡別紙の通り有之左

記金額及送付候條可然御取計相成度候也

記

一金拾圓也

一金九拾圓五拾錢

五富村女子同窓會
鹽尻村同窓會有志
別紙名簿の通り

計金百參圓五拾錢也

以上

更級郡共和村罹災者慰問金寄附人員調

一金九拾參圓五拾錢

内譯

金額 氏名
壹圓 赤羽晴江
同 吉江ふさ
同 向山とめ
同 小野江ひ
同 萩原きう
同 岡田とき
同 丸山きよ
同 小口かつ
同 土條園恵

金額 氏名
壹圓 武居美知
同 村瀬いき
同 小林たき
同 吉江てる
同 上村ひさ
同 松尾勝江
同 鎌倉ふみ
同 熊谷すい
同 中村み壽江

壹圓 中村ツノ
貳圓 小松いくい
壹圓 小松幸
貳圓 小澤るか
壹圓 小澤沖石
同 二木つたい
同 青木まつ江
同 青木しげ子
同 小澤たけ
同 有賀今朝江
五拾錢 小松いと
壹圓 味澤ふじ江
同 小松與佐
同 小口まさ子
五拾錢 中澤すみ子
同 碓井かめよ
同 有賀はるい
同 小山タツ
同 草野満壽子
壹圓 大和實子
五拾錢 加々嶋なか
五拾錢 大槻もとえ

壹圓 笠原かづゑ
同 佐倉きくゑ
同 佐倉りよ
同 笠原いたい
同 宮下けさ江
同 小澤しつゑ
同 小澤きう
同 小澤きよ
同 有賀しげ
同 田中しょう
同 高砂くめ
同 高砂あさお
同 高砂千代野
同 百瀬静
同 備前はる
五拾錢 高砂きくい
同 小林はるい
同 佐倉君代
同 柳澤豊子
同 百瀬藤伊
同 吉江美穂江
同 吉江貞子

壹圓	平出 やいの	壹圓	土田 たい
同	眞壽田ともよ	同	土田 いちの
同	黒河内 貞子	同	吉江 春子
同	米窪 しず	同	吉江 鶴江
四圓	堀内 ちか	同	百瀬 とし江
三圓	堀内 ゑつ	同	保高 けさ子
三圓	堀内 きみ	同	保高 みと
壹圓	米窪 傳	同	赤澤 や枝
同	百瀬 美代恵	同	笠原 きめよ
同	米窪 いよ	同	中村 しき江
同	會員 外		
壹圓	横山 春子	貳圓	川上 ふじ
同	武居 秋子	壹圓	小松 梢
同	佐倉 りよ	五拾錢	小林 たまよ
同	大橋 ざん		

愛第十九號
大正十五年五月一日

愛國婦人會長野支部御中

義捐金送付の件

田口村委員區より別紙人名の通更級郡共和壹火災義捐金

南佐久郡幹事部

送付に付御査収相成度候

共和村火災義捐金名簿

金額	氏名	金額	氏名
貳圓	高橋 大吉	壹圓	井出 梁太郎
五拾錢	大工原瀧三郎	五拾錢	長坂 文治郎
同	高橋 昌一	同	佐々木 丑藏
同	小林 常次	同	大工原嘉三郎
同	小林 忠次郎	同	友野 倉太
同	岩田 三郎	同	小林 慶治郎
同	岩田 信芳	同	依田 嘉市
同	泰伊 三五郎	同	佐々木 勝衛
同	松井 榮之助	同	浅川 幸吉
同	岩田 濱重	同	加藤 多忠
同	清水 與市	同	丸山 市藏
同	中條 吉之助	五圓	小學校職員一同

番號二三〇號
大正十五年五月三日

長野支部御中

四月廿一日愛長二七六號を以て御照會相成候更級郡共和

北安曇郡幹事部

金額	氏名	金額	氏名
壹圓	荒井 たけ	壹圓	宮田 榮子
五拾錢	松本 しずい	五拾錢	福嶋 くま
壹圓	本城 卷子	五拾錢	寺嶋 きん
貳圓	曾彌原 乙女	五圓	福嶋 そう
壹圓	曾根原 とよ	參圓	平林 あや
貳圓	築井 千代司	壹圓	中村 鶴江
同	太田 いるゑ	同	原 しづゑ
同	伊藤 ますよ	同	武田 やすい
同	篠崎 とく	同	太田 ひさゑ
同	福嶋 園枝	同	西澤 しめ
同	宮下 まつ	同	中村 くに
同	金原 静枝	同	原 薦野
同	消水 はる枝	同	植澤 ひさゑ
同	曾根原 まさ	同	荒井 しめ
同	伊藤 たか	參拾錢	荒井 しめ

寄附者名簿 (大町委員區)

村小松原部落火災慰問左記の通小包郵並銀行券を以て送
金候條御査収の上領收證御送付相成度此段及御通知候也
一金五拾一圓參拾錢也
一衣服貳枚

參拾錢	北澤 つる	貳拾錢	關口 ふしい
參拾錢	市川 うめ	五拾錢	栗林 春代
五拾錢	田中 幸ゑ	參拾錢	篠崎 みなと
壹圓	半田 みさえ	同	吉澤 志子
同	合木 しほり	五拾錢	諏訪 ちか
五拾錢	伊東 さしと	同	市川 かよ
貳拾錢	鷲澤 きよい	同	鷹見 まつ
參拾錢	松下 操	同	北澤 みさゑ
五拾錢	榎澤 八重	同	小林 すみゑ
五拾錢	前田 まさ	五拾錢	西澤 壽美ゑ
同	武田 りう	參拾錢	伊東 つね
同	井口 かつ	壹圓	飯嶋 きた
貳拾錢	太田 ちや	五拾錢	飯嶋 憲
同	竹内 あさ	參拾錢	丸山 みさの
參拾錢	曾根原 ち子	同	松尾 春代
衣服二枚	内山 みね	五拾錢	伊藤 菊榮
同	工藤 静江	同	山田 子枝
同	宮脇 ふさ		

愛上第三〇號
大正十五年五月四日

計金五拾壹圓參拾錢 衣服二枚

上田市幹事部長 勝俣いさ子
長野支部長梅谷さと子段

四月廿一日付愛長野第二七六號を以て御依頼相成候更級郡共和村小松原部落火災慰問金募集方の件左に當幹事部に於ける募集高左記の通りに有之本日第十九銀行爲替を以て送金候條御受領の上領收證御送付相煩はし度候也別紙送金書添付

追て上田市中之條婦人會より金參圓送金方依頼に付同封送金致候

送金書

一金百七拾六圓四拾八錢

但し更級郡共和村小松原區火災慰問金

上田市幹事部義損金分

一金參圓也

但し更級郡共和村小松原區火災義損金

上田市中之條婦人義損金分

大正十五年五月四日

愛國婦人會上田市幹事部

愛小第二七號

大正十五年五月八日

愛國婦人會小縣幹事部

更級郡共和村小松原區火災慰問金送金の件
曩に御照會に係る標記の件に關しては取不致本月一日本號にて及送金置候處其の後募集致候分左記の通小切手券にて御送金致候間御査収相成度候也
追て當幹事部として募集は是にて一先打切り致度申添候

記

一金參拾圓也

小縣郡浦里村 婦人會
處女會

大正十五年四月廿二日

愛國婦人會

上伊那幹事部長

長野支部長殿

更級郡共和村小松原部落火災に關し慰問金募集方御通知相成候に付ては當幹事部より左記の通り及送付候條可然御取り計相成度候也

記

一金拾圓也

愛第五號

大正十五年五月五日

愛國婦人會長野支部

西筑摩郡幹事部長

愛國婦人會長野支部長殿

更級郡共和村小松原部落火災慰問金左記の通り送金候條可然御取計相成度候也

記

一金七圓也

一金五圓也

一金五圓也

計金拾七圓也

大正十五年五月十日立案

共和村小松原部落火災救濟義損金取り纏中の處本日迄に到着せるもの左案の通り同村委員區長に分配方依頼相成可然

案

共和村委員區長宛

支部名

客月廿日小松原部落火災は未曾有の大火にして頗る悲惨を極め誠に同情に堪ざる處に有之縣内本會々員中より慰問金募集致候處左記金額及び物品寄贈相成候間別紙小切手を以て御送付申上候につき御査収の上罹災者に可然御分配傳達方御取計相煩度此段及御依頼候也

記

長野支部長殿

共和村義損金送付

更級郡共和村火災に對する義損金に付ては客月三十日送金致候處其後左の通り申出候間別紙小切手を以て送付候也

下水内郡幹事部長

記

一金八百八拾九圓七拾參錢

衣類 貳拾壹點

篠之井町 六十三銀行支拂

大正十五年五月拾一日

共和村委員區長

愛國婦人會長野支部御中

謹啓本村小松原區火災被害者に對し深甚なる御同情を以て慰問金品御募集被成下左記の通本日御送付を煩し難有正に拜受仕候

先は御禮迄で如斯に御座候

記

一金八百八拾九圓七拾參錢

外衣類貳拾壹點(小包貳個)

大正十五年五月十三日

一金貳拾九圓也

内 譯

金八圓六十錢

幹事 岩井はる子 扱分

金七圓也

平井むつ子 扱分

金參圓四拾錢

出野政枝 扱分

共和村火災義損金(第一回送付渡領收の分)

金壹圓

同 小川みや子 扱分

金壹圓

同 長野市西長野町 田中富子

大正十五年五月十日

東筑摩郡幹事部

長野支部御中

火災慰問金第二回送付

今回募集相成候共和村火災慰問金左記の通り御届有之別券及送付候條可然御取計相成度此段申送候也

記

一金貳拾八圓也 筑摩地村 青木房次郎外二十人分

共和村見舞金人名

一金貳拾八圓也 筑摩地村

内 譯

金額 氏 名

五圓 筑摩地村役場

貳圓 青木房次郎

同 青木 靜吉

同 合名 會社

同 青木 製絲所

同 神戶 清志

同 横澤 金重

同 金井 逸像

同 米山 源四郎

同 青木 金吾

同 神戶 嘉助

計金貳拾八圓也

壹圓

青木 金四郎

同

横澤 新雄

同

山田 虎一

同

神戶 重次

同

神戶 榮重

同

米山 秀雄

同

古厩 四郎

同

古田 彌四郎

同

東原 吾市

同

古田 巖

同

熊井 晋次郎

金四拾七圓四拾貳錢

愛第二五號

大正十五年五月二十日

南佐久幹事部

愛國婦人會長長野支部御中

義捐金送付の件

更級郡共和村火災罹災民に對する義捐金左記の通り及送金條御查收相成度候

記

一金貳拾六圓五拾錢

白田町

一金貳拾四圓五拾錢

青沼村

計金四拾七圓也

白田町

金額 氏 名

壹圓 中村 せい

金額 氏 名

同 中嶋 操

壹圓 田嶋 よし

同 山下 みよし

五拾錢 中澤 すみ

同 佐木 せい

同 玉居 たつの

同 但丸 たみ子

同 田原 幾久

同 森田 いま

同 川村 こまき

同 田原 のぶ子

同 井出 かづよ

同

同 櫻井 くに

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

壹圓 黒岩 てる

同 井出 きくよ

同 瀨下 富久

計金貳拾六圓五拾錢

貳圓 日向 治五助

五拾錢 横森 喜助

同 日向 猛

同 石井 爲吉

同 岩松 伊勢吉

同 三石 伊作

同 小林 茂久治

同 小林 尙二

同 菊地 千勝

同 高見 澤一郎

同 新井 清一

同 三石 寛

同 堀籠 宗三

同 向日 ぶさ

同 黒岩 盤

同 三石 圓治

計金貳拾圓五拾錢

拾圓 白田町婦人會

壹圓 井出 かつ

同 高橋 よし子

五拾錢 日向 倉太

同 新海 喜助

同 日向 淳

同 新津 秀助

同 三石 文治

同 廣岡 三雄

同 三石 五助

同 三石 毅

同 三石 忠治郎

同 戸塚 徳助

同 田中 茂吉

同 瀨下 丙三郎

同 猿谷 まさよ

同 武田 じん

同 三石 重太郎

愛上第三〇號

大正十五年二十七日

上田市幹事部

長野支部御中

本月四日付愛上第三〇號を以て更級郡共和村小松原火災慰問金送金致候處其後左記金額義捐申出候に付追送致候條可然取計相致度候也

追て御手数數乍ら領收證御送付御願度申添候

金一圓五拾錢

各郡市幹事部義捐金の外

金參百圓也

愛國婦人會長長野縣支部より贈呈す

小松原火災同情金收支決算

收入

一金五萬四千五百八拾七圓四拾四錢

收入總額

内譯

業捐金 四、六〇三、六九

簡易住宅補償料 一、七〇〇、〇〇

縣補助金 八、〇四七、〇一

雜收入 一、二二六、七三

支出

一金五萬四千五百五拾貳圓九拾貳錢

支出總額

内譯

分配金 三、四八三、三

食料費 一、七七七、七四

簡易住宅費 一、五二五、六

學用品 三七〇、一八

被服費 二、四〇三、七三

就業費 八三五、八〇

係員費 一六八、六〇

廣告費 五七三、四〇

人夫賃 一三八、五五

收支差引 金參拾四圓五拾貳錢

分配 一戶當り廿四錢宛

大正拾五年八月十八日

内主食物 一、四〇九、五〇

内副食物 三二八、二四

内作材料 一四、五九〇、三

内布團 一、五八八、〇三

内農具 二七九、〇〇

内家具 五四六、八〇

通信運搬費 四〇三、五五

雜費 一、三〇三、八三

共和村役場

附 錄

明治廿二年町村制實施以降

歷代共和村吏員名簿

瀧澤	瀧澤	村澤	野口	小林	岡澤	瀧澤	福井	野口	野口	福井	西澤	小澤	村澤
大之助	書記	義市	勝榮	豊太郎	素一郎	庄之助	有本	近治	駒治	助友	俊治	彦一郎	文太
野口	岡澤	小林	福井	岡澤	瀧澤	馬場	小原	岡澤	岡澤	瀧澤	寺澤	西澤	村長名
兵治郎	素一郎	鎮困	有本	周三郎	大之助	林治	水治	周三郎	嘉久太	野口	種二郎	淺治	
宮入	九野	野口	野口	瀧澤	福井	大澤	小澤	福井	大澤	野口	野口	瀧澤	
重二郎	善治郎	文廳	春作	嘉久太	邦友	鐵左右	松助	平吾	鐵左右	近治	安之進		

岡澤市之助	唐木田秀治	寺澤準四郎	林部 綾治	岡澤周三郎	小原水治	西澤 淺治	小林 彦一郎	岡田區長	代理者	小松原區長	代理者
寺澤慶太郎	唐木田秀治	寺澤準四郎	平林友作	岡澤陸藏	岡澤陸藏	飯田大藏	飯田大藏	岡田區長	寺澤慶太郎	飯田大藏	小松原區長
瀧澤 駒重	小田切良作	野口 近治	瀧澤安之進	瀧澤直三郎	飯田八三郎	飯田八三郎	飯田八三郎	小松原區長	瀧澤 駒重	飯田八三郎	小松原區長
	馬場 林治	野口 權内	野口兵治郎	福井英行	小田切良作	野口 近治	野口 近治	代理者		野口 近治	代理者

共和村吏員名簿

明治廿二年(以降)

明治廿二年(以降)

共和村吏員名簿

明治廿二年(以降)

嶋田平十郎 岡澤市之助 福井英行 野口春作
 原田嘉十郎 瀧澤安之進 瀧澤庄之助
 嶋田平十郎 野口兵治郎 瀧澤義市
 小林愛三郎 馬場林治 久保田岩太郎
 瀧澤庄之助 瀧澤鶴治
 福井有本 久保田義三郎
 野口春作 丸野善治郎
 福井邦友 飯田良隆
 瀧澤鶴治
 久保田義三郎
 野口權内

瀧澤安之進 福井平吾 小林三平 瀧澤作左工門
 飯田八三郎 小川原水治 野口近治 岡澤陸藏
 寺澤幸助 西澤淺治 飯田大藏 寺澤種二郎
 瀧澤安之進 明治卅一年四月二日
 福井平吾 野口近治 飯田大藏
 野口文廳 馬場林治 瀧澤安之進 林部綾治
 林部倉之助 西澤淺治 岡澤周三郎 大澤歡四郎
 寺澤種二郎 野口種作 福井平吾 丸野春治
 野口倉之助 明治卅四年四月
 林部倉之助 瀧澤安之進 林部綾治
 西澤淺治 西澤淺治 岡澤周三郎 大澤歡四郎
 寺澤種二郎 野口種作 福井平吾 丸野春治

共和村村會議員

明治廿二年四月(第一回)

一級 明治廿二年四月 二級
 飯田大藏 瀧澤駒重 小林彦一郎 岡澤周三郎
 岡澤陸藏 小川原水治 瀧澤安之進 西澤淺治
 福井宗兵衛 中嶋儀作 寺澤幸助 中村與會左右門
 第二回
 寺澤幸助 岡澤陸藏 小川原水治 飯田大藏
 瀧澤安之進 中嶋儀作 西澤淺治 瀧澤作左工門
 岡澤周三郎 福井平吾 中村與會左右門 飯田八三郎

明治二十八年
 瀧澤安之進 福井平吾 小林三平 瀧澤作左工門
 飯田八三郎 小川原水治 野口近治 岡澤陸藏
 寺澤幸助 西澤淺治 飯田大藏 寺澤種二郎
 瀧澤安之進 明治卅一年四月二日
 福井平吾 野口近治 飯田大藏
 野口文廳 馬場林治 瀧澤安之進 林部綾治
 林部倉之助 西澤淺治 岡澤周三郎 大澤歡四郎
 寺澤種二郎 野口種作 福井平吾 丸野春治
 野口倉之助 明治卅四年四月
 林部倉之助 瀧澤安之進 林部綾治
 西澤淺治 西澤淺治 岡澤周三郎 大澤歡四郎
 寺澤種二郎 野口種作 福井平吾 丸野春治

寺澤種二郎 小出潔之助 野口權内 瀧澤嘉久太
 野口種作 小林彦一郎 瀧澤庄之助 大澤廣太
 大正二年 以下四ヶ年總選舉
 瀧澤安之進 原田長左工門 小林彦一郎 磯貝彥治
 瀧澤庄之助 野口權内 寺澤種二郎 瀧澤大之助
 平林民重 小川原水治 野口種作 坂田袈裟治
 大正六年
 瀧澤大之助 林部勝五郎 渡邊吉治 寺澤種二郎
 福井邦友 小林榮三郎 越川安治 馬場林治
 瀧澤瀧治 瀧澤嘉久太 小林松助 原田宇吉
 大正十年
 小林松助 坂田袈裟治 野口春作 林部勝五郎
 原田宇吉 岡澤信衛 瀧澤淺太夫 岡澤文水
 久保田駒五郎 福井邦友 寺澤種二郎 飯田大太郎
 大正十二年
 平林竹次郎 野口藤伊 野口權内 岡澤宇吾治
 瀧澤主計 仁科周平 坂田袈裟治 馬場林治
 小田切良作 小林松助 小川原欽治 山口新太郎
 昭和四年三月
 飯田大太郎 岡澤市之助 渡邊眞 岡澤信衛
 小川原欽治 小口新太郎 吉岡豊 平林竹次郎
 福井陸治郎 兩角主水 坂田袈裟治 久保田義三郎

共和村岡田區會議員

明治廿四年

小川原水治 岡澤仙治郎 林部猶左工門 平林喜十郎
 丸山秀太郎 兩角仁作 寺澤幸助 林部倉之助
 岡澤周三郎 岡澤武十郎 中嶋儀作 村澤文太
 西澤淺治 岡澤仙治郎 岡澤周三郎 小林三平
 小川原水治 岡澤陸藏 林部倉之助 岡澤武十郎
 林部猶左工門 兩角仁作 林部綾治 寺澤種治郎
 寺澤種二郎 林部綾治 小林三平 林部倉之助
 西澤淺治 林部猶左右衛門 兩角仁作 大澤歡四郎
 小川原水治 清水寬之助 岡澤陸藏 寺澤幸助
 西澤淺治 大澤歡四郎 岡澤周三郎 清水寬之助
 寺澤幸助 平林彌十郎 兩角仁作 小林隣治郎
 林部倉之助 林部猶左衛門 林部藤之助 大澤七五郎
 原田長左工門 岡澤宇吾治 西澤淺治 小林榮三郎
 大澤七五郎 德永金作 嶋田平十郎 平林民重

平林友作 柳澤彙治 林部勝五郎 大澤友四郎
 大澤友四郎 岡澤宇吾治 嶋田平十郎 小澤原道治郎
 寺澤慶太郎 小林榮三郎 兩角九内 原田長左工門
 柳澤彙治 岡澤素一郎 平林友作 嶋田平十郎
 岡澤文水 兩角九内 平林竹治郎 岡澤素一郎
 小林竹治郎 寺澤慶太郎 嶋田平十郎 小林榮治郎
 關 武人 豎谷慶作 林部榮之助 兩角茂一郎
 越川平治 磯貝彙治 唐木田秀治 大澤七五郎
 岡澤宇吾治 林部藤之助 小林源治 西澤淺治
 小林隣治郎 平林彌十郎 岡澤周三郎 越川安治

共和村小松原區會議員

明治廿四年
 飯田八三郎 中村與祖左工門 小田切久右工門 瀧澤安之進
 福井忠兵衛 坂田重内 福井惠右工門 瀧澤直三郎
 福井平吾 野口舞治 野口又治 飯田大藏
 坂田重内 野口舞治 福井平吾 野口種作

瀧澤安之進 小田切久左工門 飯田八三郎 中村與祖左工門
 瀧澤直三郎 吉岡安治 飯田大藏 福井宗兵衛
 野口舞治 瀧澤大之助 福井宗兵衛 丸野春治
 福井英行 瀧澤駒重 飯田八三郎 野口種作
 瀧澤猪太郎 飯田大藏 松坂七藏 吉岡安治
 小出潔之助 野口兵治郎 飯田大藏 渡邊勝治郎
 馬場林治 瀧澤大之助 飯田太市 瀧澤安之進
 福井英行 松坂七藏 瀧澤猪太郎 丸野春治
 太田富衛 瀧澤安之進 飯田太市 野口龜作
 瀧澤大之助 馬場林治 瀧澤儀十郎 小出潔之助
 野口兵治郎 渡邊勝治郎 丸野春治 久保田義三郎
 野口龜作 坂田袞治 小田切良作 飯田太市
 太田富衛 久保田義三郎 瀧澤大之助 瀧澤嘉久太
 野口權内 丸野春治 瀧澤儀十郎 瀧澤團治
 野口春作 瀧澤團治 瀧澤大之助 太田富衛
 瀧澤清一郎 飯田太市 坂田袞治 瀧澤嘉久太
 福井英行 小田切良作 瀧野駒重 野口權内

大正二年
 瀧澤清一郎 馬場時重 山田行太郎 野口文廳
 坂田袞治 馬場良之助 瀧澤大之助 瀧澤庄之助
 野口春作 瀧澤團治 渡邊吉治 福井邦友
 瀧澤鶴治 野口惣吉 飯田大太郎 坂田茂一郎
 渡邊甚平 飯田新吉 山田行太郎 野口藤伊
 瀧澤瀧治 馬場良之助 瀧澤義市 松坂年松

共和村土木委員

大正七年十二月
 野口近治 瀧澤大之助 林部勝五郎 小林榮三郎
 大正十一年十二月 野口權内 馬場林治
 十二年三月 林部倉之助 林部勝五郎
 大正十三年四月 久保田駒五郎
 大正十五年 野口權内
 昭和二年三月 平林竹治郎
 昭和二年三月 清水寬之助 渡邊 眞
 昭和四年四月 仁科周平 久保田義三郎

學務委員

明治廿二年ヨリ年次

寺澤幸助 中村與祖左工門 小林彦一郎 大澤歡四郎
 福井平吾 西澤淺治 野口駒治 福井英行
 寺澤種二郎 瀧澤安之進 西澤俊治 馬場林治
 瀧澤嘉久太 飯田大太郎 瀧澤庄之助

共和村常設委員

瀧澤猪太郎 瀧澤儀十郎 坂田袞治 太田富衛
 岡澤宇吾治 唐木田秀治 林部勝五郎 柳澤彙治
 岡澤文水 福井邦友 太田多三郎 久保田義三郎
 山田行太郎 瀧澤義市 松坂七藏
 村澤勝榮 岡澤定治 林部勝五郎 柳澤彙治
 岡澤文水 太田多三郎 渡邊甚平 福井邦友
 松坂七藏 山田行太郎 寺澤慶太郎 久保田駒五郎
 小林榮三郎 瀧澤壽昨 太田長重 瀧澤鶴治
 岡澤文水 村澤直治 小林榮三郎 小田行太郎
 岡澤素一郎 大澤友四郎 越川龜治 仁科周平
 兩角九内 中村太忠

太田長重 瀧澤奧太郎 野口藤伊 岡澤素一郎
 馬場時重 大澤友四郎 嶋田平十郎 清水寬之助
 西澤勘次郎 小林竹二郎 小田切傳内 飯田新吉
 太田長重 飯田良隆 仁科周平 岡澤素一郎
 野口俊治 宮下市郎左工門 寺澤豐治 小林芳太郎
 飯田庄之助 野口政之助 兩角主水 小田切傳内
 飯田良隆 太田時男 仙田經雄 西澤新平
 大江新太郎 久保田千松 小山利 松坂辨之助
 宮下藤太 寺澤貞治

國勢調査員

産業統計調査員

産業統計調査員

農業調査員

第一回大正九年十月一日

大正十四年第二回國務

昭和四年九月一日現在

小林松助 小林松助 兩角九内 兩角九内
 若林和左工門 越川雅雄 小河原茂平 太田長重
 岡澤市之助 若林和左工門 久保田袈裟師 小原原茂平
 岡澤素一郎 大澤安通 石井祐治郎 久保田袈裟師
 關 武人 岡澤市之助 林部理三郎 石井祐治郎
 小林榮三郎 原田平三郎 岡澤長治郎 岡澤長治郎
 瀧澤義市 林部理三郎 石川運平 唐木田幸
 飯田儀右工門 關 武人 瀧澤義市 野口敬一郎
 福井七郎 石川運平 松坂角之助 小田切三郎

福井有本

林部辰雄 小山利 清水要四郎
 九野善治郎 野口昌一郎 林部元
 飯田儀左工門 太田長重 久保田力
 久保田千松
 福井七郎
 小山利
 野口昌一郎
 仁科周平
 小林芳太郎
 瀧澤義市
 松坂角之助
 林部象治郎
 寺澤定治

組頭 大澤歡四郎 小頭 宮下市郎左衛門
 同 西澤淺治 同 德永金作
 同 西澤俊治 同 小林光榮
 同 岡澤宇吾治 同 林部勝五郎
 同 磯貝条治 同 小林源治
 同 中嶋力太郎 同 小林芳太郎
 同 若林和右衛門 同 岡澤市之助
 同 岡澤泰治 同 岡澤素一郎
 同 寺澤善治 同 柳澤四郎
 同 小林直太郎 同 兩角主水

小松原消防組

任命及辭任年月八省略

岡田消防組

任命及辭任年月八省略

野口巳作 瀧澤國治
 野口龜作 飯田儀右工門
 久保田義三郎 坂田袈裟治
 野口彌會之助 瀧澤清一郎
 野口忠治郎 丸野善治郎
 小出潔之助 野口春作
 松坂兼治 久保田駒五郎

共和消防組幹部名簿

組頭氏名

野口近治
 小田切良作
 小河原欽治
 部長氏名
 岡澤泰治
 小河原欽治
 岡澤市之助

任命就職及辭職年月日

大正二年二月十二日任命

大正七年四月四日辭任

大正七年四月四日任命

昭和二年十二月四日死亡

昭和三年一月十七日任命

現任

任命辭任年月日

大正二年二月十二日任命

大正四年九月廿二日死亡

大正七年十一月廿五日任命

大正七年十一月三日辭任

大正七年十一月三日任命

大正十二年十月六日辭任